

と
こ
は
と
の
は

第 38 号
2 0 2 5

常葉大学外国語学部言語文化研究会

表紙の題字は木宮健二理事長

目次 (簡略版)

I	巻頭言	
1.	巻頭言	1
2.	40 周年記念	3
3.	外国語学部 40 周年年譜	17
II	外国語学部共通	27
1.	教員エッセイ	29
2.	江藤秀一外国語学部特任教授・学長の最終講義	47
3.	外国語学部コロキウム	57
4.	外国語学部文化講演会	61
5.	特別研究の題目	62
6.	日本語教員養成課程の活動報告	65
7.	学内外での教職員や学生の取り組み	71
III	英米語学科	85
1.	高校生対話弁論大会	87
2.	教員採用試験合格者	89
IV	グローバルコミュニケーション学科	91
1.	海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)	93
2.	多言語レシテーション大会	94
3.	社会人基礎力養成	108
4.	臨地実習	113
V	各言語圏での活動	123
1.	英語圏	125
2.	スペイン語圏	128
3.	ポルトガル語圏	137
4.	中国語圏	140
VI	退職者	143
VII	外国語学部言語文化研究会	147
	編集後記	150

目 次

I 巻頭言

1. 巻頭言

常葉大学外国語学部創立 40 周年を記念して ……………増井 実子…………… 1

2. 40 周年記念

2-1. 外国語学部開設 40 周年に寄せて ……………江藤 秀一…………… 3

2-2. 「とこはことのは」外国語学部創設 40 周年記念号に寄せて
……………鈴木 薫…………… 7

2-3. 外国語学部の「語」の字ー学部創設 40 周年のその先へー
……………一言 哲也……………10

2-4. 英米語学科のカリキュラム改革の原点
ー専門セミナーの設置とリサーチ科目の充実ー…………戸田 勉……………15

3. 外国語学部 40 周年年譜

常葉大学外国語学部年譜ー 40 年の歩みー ……………市川 真矢……………17

II 外国語学部共通

1. 教員エッセイ

1-1. 小林伝兵衛住宅を訪ねて……………天野 剛至……………29

1-2. 解釈の「協働」体ー教室で英語の詩を読む……………小口 一郎……………34

1-3. ホセ・ムヒカ元ウルグアイ大統領の言葉と思想、これからの社会
……………宮腰 宏美……………39

1-4. 戸田の造艦碑……………若松 大祐……………45

2. 江藤秀一外国語学部特任教授・学長の最終講義

講義概要……………47

3. 外国語学部コロキウム

2024 年度外国語学部コロキウム ……………57

4. 外国語学部文化講演会

2024 年度外国語学部文化講演会 ……………61

5. 特別研究の題目

グローバルコミュニケーション学科特別研究

共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧……………62

6. 日本語教員養成課程の活動報告

6-1. 2024 年度日本語教壇実習の報告 ……………坂本 勝信……………65

6-2. 教師になるということ	小林 咲妃	66
6-3. 日本語で学ぶ授業作成	落合 優音	68
7. 学内外での教職員や学生の取り組み		
7-1. 合同ゼミナール	青木 麻未・大澤 奈歩	71
7-2. 宴の後にふりかえりながら	森下 真千子	75
7-3. 歓迎聆聴：2024 年度公開講演を実施して	若松 大祐	82
Ⅲ 英米語学科		
1. 高校生対話弁論大会		87
2. 教員採用試験合格者		
未来の子どもたちに誇れる仕事をするために	杉山 大悟	89
Ⅳ グローバルコミュニケーション学科		
1. 海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)		
海外事情談話会		93
2. 多言語レシテーション大会		
2-1. 第 11 回多言語レシテーション大会	若松 大祐	94
2-2. 四言語で描く多彩な世界	増井 実子	99
2-3. 言葉の力を感じるひとときに	谷 誠司	100
3. 社会人基礎力養成		
新卒として就職活動ができる価値についての一考察	谷口 茂謙	108
4. 臨地実習		
4-1. 中国と日本の考え方・環境の違いから感じる世界の広さ	大木 萌々華	113
4-2. 女性の人権問題として捉える	佐藤 茉央	117
4-3. 日韓の共通課題を考えるきっかけ	星野 伽蓮	119
4-4. グローバルな視点を養う	植田 晴名	120

V 各言語圏での活動

1. 英語圏

アメリカ留学を通して学んだ「自由」と「責任」…………池田 実優…… 125

2. スペイン語圏

2-1. 挑戦と成長の 1 ヶ月…………服部 未由羅…… 128

2-2. 日本語の通じない国での生活…………松田 千潤…… 129

2-3. スペインで感じた日本文化の魅力…………佐藤 巴南…… 130

2-4. スペイン語学研修に行って感じたこと…………田村 瑠香…… 132

2-5. 2024 年度 スペイン・ラテンアメリカ特別研究サブレポート抄録
………… 133

3. ポルトガル語圏

ポルトガル食文化について…………佐口 健心…… 137

4. 中国語圏

2024 年度の中国語圏における研修 ……若松 大祐…… 140

VI 退職者

江藤秀一先生………… 145

VII 外国語学部言語文化研究会

『とこはことのは』38 号の編集の現場 …… 149

編集後記 …… 150

I 卷頭言

1. 巻頭言

常葉大学外国語学部創立 40 周年を記念して

外国語学部長 増井 実子

本年、常葉大学外国語学部は創立 40 周年を迎えました。この記念すべき節目に立ち会えることを、現学部長として心より嬉しく思います。また、これまで学部の発展を支えてくださったすべての皆様に深く感謝申し上げます。

1984 年、外国語学部は英米語学科とスペイン語学科の 2 学科体制で開学しました。その後、2004 年にスペイン語学科はグローバルコミュニケーション学科へと改組され、多様な言語能力と国際的な視点を兼ね備えた人材の育成を目指す教育内容へと進化しました。さらに、2018 年には長年の学びの拠点であった瀬名キャンパスから草薙キャンパスへと移転をしました。この移転により、学生たちの学習環境が向上し、より充実した教育と研究の機会を提供できるようになりました。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大という大きな試練にも直面しました。2020 年からの 2 年間は、留学や国際プログラムが中止され、国際交流の機会が大きく制限されました。それでも、教職員や学生が力を合わせ、オンライン教育や静岡県内での国際交流の充実を図るなど、困難な状況に立ち向かいました。そして、2023 年以降、留学プログラムが再び動き出し、学生たちが世界に飛び立つ姿を見られるようになりました。この経験は、学部が逆境に負けずに前進する力を持っていることを改めて示したと言えるでしょう。

40 年の歩みの中で、外国語学部は数多くの優れた卒業生を輩出してきました。英米語学科では英語を基盤とした専門性を深め英語教員養成に力を入れてきました。グローバルコミュニケーション学科では韓国語・中国語・スペイン語・ポルトガル語の学習と異文化理解を活かした国際的な視野を広げています。卒業生たちは、国内外で幅広い分野で活躍し、学部の名を高めてきました。

このような歩みを振り返る意味で、今号の『とこはことのは』では 40 周年を記念した特集を組んでいます。一つは、これまで学部を支えてくださった 4 名の先生方から寄稿をいただき、各時代を振り返る企画です。先生方の貴重な言葉は、

学部を歴史をより深く知る手がかりとなることでしょう。もう一つは、40 年の歩みをまとめた「年譜」の掲載です。作成にあたり、市川真矢准教授に過去の資料を丹念に調査・整理していただきました。その尽力により、史料的価値の高い内容が完成し、これが 50 周年に向けたカウントダウンの第一歩となることを確信しています。

私自身、常葉大学外国語学部スペイン語学科の第 1 期生として本学部で学んだ一人です。在学中、初代スペイン語学科長の佐々木孝先生をはじめ、多くの先生方に温かい愛情と熱意を持って指導していただきました。先生方の教育は、私を支える力となり、そのおかげで今日、母校でスペイン語やスペイン語圏の文化・社会を担当する教員として教壇に立っています。現在、教員としてこの学部に関わる中で、先生方からいただいたご恩を少しでも返したいという思いを胸に、後輩である学生たちの教育に励んでいます。

40 周年という節目を迎えた今、これからも教育と研究の質をさらに高め、学生一人ひとりが夢を実現し、国際社会で活躍できる力を養う環境の提供を目指していきます。また、地域社会や国際社会との連携を一層深め、50 周年に向けたさらなる飛躍を目指して努力してまいります。

最後になりますが、常葉大学外国語学部の 40 周年を『とこはことのは』の読者の皆様ともにお祝いできることを心より喜びとし、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2. 40 周年記念

外国語学部開設 40 周年に寄せて

江藤 秀一

外国語学部特任教授・学長

外国語学部が開設 40 周年を迎えた。嬉しい限りである。

今から 42 年ほど前になるが、開設前の外国語学部英米語学科の開設準備にかかわった。初代の学部長となる鈴木實常葉学園大学教授がその準備の責任者であった。私はそのとき、常葉学園短期大学英文科の講師を務めており、菊川校舎の教務課長補佐も務めていた。その役目と英文学専攻との関係からか、開設準備の集まりに呼ばれたのだと思う。

その会場は大学内ではなく、静岡市内のホテルの会議室か会議室を有する施設の二階だったように思う。何せ、40 年以上前のことなので、記憶があいまいになっている。しかし、当時の資料が手元に残っていて、授業科目や担当教員の候補者の名前はわかる。担当教員は名前があがっているものの決まっているわけではなく、これから交渉するということだった。

その資料によると、専門科目は次のような科目となっていた。

英米語学科			スペイン語学科		
科目	単位数	必修・選択	科目	単位数	必修・選択
英語講読	8	必修	西語講読	8	必修
英作文	8	必修	西語作文	8	必修
英会話	8	必修	西語会話	8	必修
英文法	4	選択必修	西語文法	4	必修
英語 LL	4	選択必修	西語 LL	4	必修
商業英語	4	選択必修	商業西語	4	選択必修
時事英語	4	選択必修	英作文	2	選択必修
英語学概論	4	選択必修	英語講読	2	選択必修
英語音声学	4	選択必修	英語史	4	選択必修
英語史	4	選択必修	西語概説	4	選択必修
英文学概論	4	選択必修	西語史	4	選択必修
米文学概論	4	選択必修	西語音声学	4	選択必修

英米文学特殊講義	4	選択必修	スペイン・ラテンアメリカ文学	4	選択必修
英米の歴史	4	選択必修	スペイン・ラテンアメリカ文学特講	4	選択必修
英米文化特殊講義	4	選択必修	スペイン史	4	選択必修
卒業研究	4	必修	ラテンアメリカ史	4	選択必修
			卒業研究	4	必修

また、両学科の共通科目として、次の科目が挙げられている。すべて 4 単位科目で、国際経済学と国際社会学に（必）と書かれている。

国際政治学	国際経済学(必)	国際社会学(必)
国際法	国際貿易実務	言語社会学
アメリカ研究	イギリス研究	ラテンアメリカ研究
西洋思想史	西洋美術史	コミュニケーション論
商法	行政法	金融論
マーケティング論		

今では異文化理解や異文化コミュニケーション、あるいは多文化共生といった科目が並ぶところであるが、そのような異文化に関する学問は 1980 年代に広がっていったものであり、本学の外国語学部の開設時には全く開講されていない。社会学、政治学、経済学に「国際」を冠にして科目化し、文学部との違いを出しているように思われる。両学科の共通科目として西洋思想史や西洋美術史が入っているところは、外国語学部の教育目標が完全な実用主義を目指すものではなく、大学としてのアカデミズムを求めていることが感じられる。

1980 年代の日本は経済的にも強くなっていき、自動車産業や半導体などで激しい日米貿易摩擦が起こっていた時代である。アメリカの社会学者エズラ・ヴォーゲルは 1979 年に日本の経済成長と企業の発展ぶりを *Japan as Number 1* という著作に記した。日本は外国へ経済的に積極的に進出しており、外国語学部も成長が期待される人気の学部であった。

英米語学科とともにスペイン語学科を設置した理由は、先代の木宮和彦理事長から直接伺ったところによると、スペイン語が世界で英語に次いで使っている人が多いというのであった。ところが、いつの間にか経済力がすべての物差しになっていったようで、特にアメリカ経済の発展に伴い、英語が世界を席巻してしまっ

I. 2. 40 周年記念

た。その結果、スペイン語の人気もなくなったのだろうか。2004 年にスペイン語学科を廃止し、グローバルコミュニケーション学科に改組し、今日に至っている。

開設時の『常葉学園だより』（現『常葉だより』第 43 号、1984 年 4 月 6 日）は、初の入学試験で定員 120 名に対し、338 名の応募者があったと報じている。また、その隣のページには「一致協力前進しよう」というタイトルで、

「時代の要請に応じ地域の要望に応じて外国語学部が発足しました。英語やスペイン語がよく出来るだけではなく、世界の事情に通じ、実務的能力を備えて大きな人材が育つことを強く希望しております。」

との鈴木実学部長の抱負が掲載されている。初年度の担当教員は鈴木学部長初め 13 名でスタートし、3 年次までには倍の 26 名体制になる予定であることも報じられている。

同じ号の巻頭のページで当時の木宮和彦理事長は

「これからの日本は、外国人も日本で日本人と同じように仕事をし、日本人も外国でその国の人々と同じように仕事をする時代になります。そのとき、青年は諸外国の事情に精通し、宗教・風土・習慣・言語を理解していなければならないと思います。そんな意味で、わが大学の外国語学部は、国際化社会のためのカリキュラムを組み、真の国際人を育成しようと思います。」

と述べられている。

これからの日本は急激な少子化が待ち受けており、介護や医療といったエッセンシャルワーカーを含め、あらゆるところで労働力が不足し、様々な形で外国の人たちの助けを借りなければならなくなるだろう。そして、これまで以上に多くの外国人を受け入れることになるだろう。すでに静岡県にもたくさんの外国の方々が居住している。外国語学部開設当時の木宮和彦前理事長の言葉にある「これからの日本は、外国人も日本で日本人と同じように仕事をし」という時代がすぐそこまで来ている。

本学外国語学部では地域の多文化共生を支える人材を育成し、文部科学省登録日本語教員養成機関の登録申請も進めている。外国語学部の使命は 1980 年代の外国語学部開設時からなお一層重要度を増してくるだろう。語学力養成は AI や ICT などを利用して独学で行い、大学では人文社会学系から心理教育系、さらに

[illegible]

2008年12月15日



真の国際人育成をめざす

新洲行紀卷之四

木
下
部

[illegible][illegible][illegible]

「とこはことのは」外国語学部創設 40 周年記念号に寄せて

鈴木 薫

常葉大学名誉教授

2002 年 4 月～2012 年 3 月、2013 年 6 月～2016 年 3 月外国語学部長

はじめに

2017 年に常葉大学を退職し、その後 3 年間非常勤講師として教壇に立ち、2020 年 3 月に大学を離れてから、5 年が経った。この間、だんだんと古いことは記憶が薄くなっていくことも多くなり、資料も分散して正確で詳細な記録を記述することが難しくなってきた。しかし、今回、「とこはことのは」の外国語学部創設 40 周年記念号の発刊ということでもあり、拙文を寄稿することとしたい。

私は 1993 年 4 月に本学に着任し、2002 年 4 月から 2012 年 3 月まで、および 2013 年 6 月から 2016 年 3 月まで学部長を務めた。外国語が専門でない者が学部長になってもよいのか、悩んだのだが、当時の学部長の海野泰男先生の「私も外国語が専門ではないから」という後押しがあり、引き受けることにした。というわけで、10 年ほど学部長を務めたが、この間の学部に関する出来事としては

- ・スペイン語学科改変 グローバルコミュニケーション学科設立
- ・入試改革
- ・カリキュラム改革
- ・海外提携大学の増加（ビクトリア大学、ペンシルベニア大学、グリフィス大学、クイーンズランド工科大学 QUT、銘伝大学）
- ・海外提携大学とのリモート授業（e ラーニング）
- ・海外提携大学からの学生受け入れ
- ・外国語学部コロキウム開始

などがある。

本稿では、この中から「外国語学部コロキウム」と「海外提携大学とのリモート授業」のついて述べてみよう。

外国語学部コロキウム

大学は研究と教育との両輪から成っているといわれる。個々の大学によってその比重は異なり、研究に重点を置いている大学もあり、教育に重点を置いている大学もある。外国語学部で研究を少しでも活性化していくには、教員間の交流を活発にして、タコつぼを避ける必要があるように感じた。また、私自身、学部所属の先生方の研究を把握していなかったので、話を聞きたいとおもったこともあった。これがうまく作用したのは、新任教員の紹介を兼ねてコロキウムを担当していただくことで学部の教員が新任教員をよく知るきっかけとなったことである。私がイギリスのノッティンガム大学にポスドクで滞在していた時のファカルティーのティータイム（イギリスらしい）で教授たちが歓談しているのを目撃したことも影響していた。一方、私の出身の東京大学理学部化学教室では、まさにコロキウムという名称で最新の研究動向を報告しあう会が開催されていたのも参考にした。この会には教員だけではなく、大学院生や学部学生も参加可能であった。外国語学部でも、意欲ある学生や大学院生の参加を促してもよいのかもしれない。

最近うれしいことの一つは増井学部長からコロキウムの案内がメールで送られてくることである。アカデミックな活動がほぼ皆無となった今、年に数回でも現役の先生方の研究のお話を聞くことができ、刺激を受けることができるのは有難いことである。外国語学部コロキウムを始めておいて良かったと思っている。

なお、私が退職するまでのコロキウムの講演者等の記録を手元の資料で探したが、散逸してしまって現在不明となっている。

海外提携大学とのリモート授業（e ラーニング）

2000 年代に入るとインターネットが急速に発展する時代となってきた。すなわち、隣の部屋のパソコンと海外のパソコンとの違いはインターネット端末という観点からは区別ができなくなった。たまたま、瀬名の校舎と菊川の校舎の間の授業中継が造形学部で進行中だったので、これをヒントに海外提携大学とのリモート授業を構想した。

準備として語学研修引率でアメリカに出張する機会を利用して、兼ねてから知り合いのいるアリゾナ大学ほかの施設を見学させてもらった。アリゾナ大学では

I. 2. 40 周年記念

ツーソンのメインキャンパスとフェニックスのサテライトキャンパスをリモートで結んで授業を行っていた。残念ながら彼らのシステムはとてつもなく高価で、しかも専任の技術者を張り付ける必要があったので、外国語学部では採用できようなかった。そこで、単純にカメラだけをインターネットに接続する方法にした。エバンズビル大学とメールで打ち合わせをして接続テストに臨んだが、成功した時の喜びは今でも克明に思い出す。その後、クイーンズランド工科大とのリモート授業も開始した。

海外大学とのリモート授業は当時としては先進的で、文部科学省から調査官が派遣されてきたほどである。また、このリモート授業の受講者からは特別に上乘せ料金を徴収しなかったが、他大学の教員からは随分と驚かれた。

英語の実力はあっても、資金の面で海外語学研修や留学が困難な学生にとって、よいプログラムを提供できたのではないかとと思っている。

おわりに

常葉大学に在籍した者としては、常葉大学がこれからもますます魅力的な大学に成長していってもらいたいと願っている。そこでの、重要なキーワードの一つは「リスペクト」ではないだろうか。世間から「リスペクト」を得るのは容易くはない。地道に努力する以外に方法はない。逆に、評判を落とすのは一つの事例で十分であることを肝に銘じておく必要があろう。

外国語学部の「語」の字

—学部創設 40 周年のその先へ—

一言 哲也

2016 年 4 月～2019 年 3 月 外国語学部長

私は、在職中の約 30 年間、常葉学園短期大学の英文科（後に英語英文科）と常葉大学の外国語学部に所属しました。その間、常葉の高等教育における外国語関連学科・学部を巡り、時代や環境の色々な変化を見てきました。本稿では、その経験から、これからの外国語学部がどのような方向に発展したらよいか、私なりに感じていることを「徒然なるままに」述べてみたいと思います。

私が短大に着任した当時、学科の先輩教員が「外国語学部は、短大の教員で作った」という言葉をよく口にしていました。私が短大に着任したのは外国語学部ができて 5～6 年目の頃でしたから、外国語学部創設の頃の経緯や人事のことが、まだ「生々しい」記憶として残っていたのでしょう。もちろん私にはよく分からない過去のことであり、詳細は今も知りません。当時の日本は、五輪や万博を開催し、それ続く高度経済成長と国際化の時代であり、女子の高等教育進学率上昇の受け皿として短期大学も隆盛の時代でした。そして、昭和型国際化の時代に合致した教養系の学科として、常葉短大の英文科にも多くの学生が入学してきました。進学者が増える 18 歳人口に対応した「臨時定員増」がまだあって、私が着任した頃、確か学科の入学定員が 160～180 人位のところに、200 人を超える入学者がありました。おそらく外国語学部も、このような時代の流れに乗るように、創設されたのでしょう。当時は、「外国語（＝ほぼ英語）ができる国際的な短大・大学卒の女性」が華であり、女子学生たちは、英語力アップ・英文学の教養・国際的な経験などを求めて入学してきたのでしょう。

しかし、その後間もなく、バブル経済が崩壊。英文科を巡る時代や世相が大きく変化し始めることになります。まだ多くの入学者を確保していた常葉短大の教員は、私も含め（今振り返って思えば）危機の時代が近いことにまだ実感を持っていませんでした。当時、学園の重鎮が「短大は時代（世の中）が潰す」という主旨の発言をしたとかで、古参の教員たちが憤慨していたのを、半分他人事のよ

I. 2. 40 周年記念

うに聞き流していた自分がいました。まさかその後すぐ、自分が学科の主任や科長として、この波の中で翻弄されることになるとは想像もせず、、、

さて、上記の入学者 200 超のピーク以降、社会の経済状況が厳しくなるにつれ、英文科への入学者が減り始めます。そして臨定も裏目に出て、ついに「定員割れ」に、、、受験生もその保護者も、教養よりも職に就くための実学や免許・資格への志向が強まり、英文科のような教養系学科は入学者確保が困難になりました。18 歳人口がさらに減少し四年制大学志向も高まり、まさに「世の中が短大を潰し」にかかります。そんな状況の中、英文科は他の学科に先んじて学科見学会や高校訪問を開始。今でこそ当たり前の募集活動が、まだどのようなものか分からず暗中模索でした。初の高校訪問では、訪問校の選定に、中学 3 年生を対象にした大手塾が作成した県内高校別進学先データを利用しました。当時の入試委員会の委員長には、「英文科は一体何をやってるのか。一学科が勝手に事を進めるな！」と厳しく注意されたこともありました。（その後、同じ委員会の長や学生部での仕事を経験した身としては、誠に「ごもっともな」叱責です。）

さて、とにかく藁をもつかむ思いで始めた見学会ですが、人が集まらず閑古鳥が鳴くような状況の時もあり、高校訪問でも、事務室受付窓口で「対応できる教員が不在なので、そこに資料だけ置いて行って下さい。」と言われたり、やっと教員が対応してくれても、3 年生の状況をほとんど把握していない先生が来たりと、虚しい思いで次の高校に向かったことがよくありました。それも、県内だけでなく山梨・長野方面の高校でも、、、悔しいことに、かつての短大英語系学科の商品価値が急速に低下していたのです。「短大・大学で英語（外国語）を勉強する」ことへのニーズや目的が変化し、昭和的な「国際化」の中で存在してきた英文科には、もう魅力がなくなったことを痛感しました。そして賭けにも等しい最後の一手として、菊川にあった英文科は静岡校舎への移転を学園本部に直訴します。実に異例の動きでした。学科名称を変え、カリキュラムも大幅に改訂し、卒業後の進路を見えやすくした 3 コース制を持つ仕組みにしました。英語英文科生が保育科と連携し幼稚園教諭の免許を取得できるコース、一般企業への就職を主とする観光ビジネスコース、四年制大学編入を目指すコースです。「何のために英語を短大で学ぶのか」に対する回答として出口志向を看板に据えたのです。教養としての語学・文学を軸にしたカリキュラムからの方針転換でした。（学科内での

議論では、「文学を捨てるのか」という厳しいご意見も出ましたが、もちろん文学系の科目は残しつつ、生き残りのために、このような「藁」をも掴んだのでした。）

この一手により、静岡市内という都市部への移転効果もあり、次年度の入学者はV字回復に近い大幅増となりました。が、時代の逆風はさらに強まり、校舎移転とカリキュラム改訂の効果も数年で薄れ、常葉短大英語英文科の命運は、文字通り尽きつつありました。入学定員を減らし、AO型入試での合格者数を増やしたり、奨学生枠や指定校を大幅に追加したりしましたが、英語英文科への入学者は回復しませんでした。私は当時、学科長から学生部での仕事に移り、全学的な入試のことも担当していましたが、「英語英文科は早めに何とか（＝廃止）した方が良いと思う」と、当時の学長に言ったこともあります。

この後暫らくして、いくつかの偶然が重なり、私は常葉大学外国語学部に移籍し、間もなく学部長を拝命しました。私の役目は、ショート・リリーフとしてワンミッションを完遂することでした。そのワンミッションとは、短大英語英文科の廃止に向けた教員の移籍対応です。「短大の教員で作った外国語学部」という「子」の家に、「短大英語英文科」という老いた「親」が、一つの世代を終えてお世話になる時がついに到来したのです。

その頃、外国語学部は瀬名キャンパスにありました。富士・静岡・浜松の3大学統合や草薙キャンパス開設の少し前です。移籍後、驚いたのは、元気だと思っていた「子」が、既に学生募集で苦しみ始めていたという現実です。入学定員を満たすか僅かに足りないかという状況で、私の心の中では、短大英語英文科が辿った経緯がすぐに連想されました。そして改めて「何のために大学で英語（外国語）を学ぶのか」を考えさせられたのです。今の高校生は、一体何を求めて大学で外国語を勉強したいのだろうか？平成・令和型の「グローバル化」の時代に求められる、この学部の在り様（専門性）とは何なのだろうか？

外国語学部の学生募集は、草薙キャンパスの「開店景気」のせいで暫く好調でした。私はちょうどその時期に当たりましたので、ある意味では短大と真逆の状況におかれたのです。短大英語英文科が静岡に移転した後の2～3年間と似ています。しかし、コロナ禍や定員増もあり、ここ数年は再びかつての状況に戻ったと聞いています。創設40年になるこの学部の次の一手は、どうあるべきか？退

I. 2. 40 周年記念

職した今でもよく考えます。そんな自問自答の中で、ちょっと気になるのが、外国語学部の「語」の字です。この学部の英訳名称は Faculty of Foreign Studies です。「外国学を専門とする学部」とでも解釈できでしょうか。語学も外国学の重要な一部であることは間違いありませんが、語の字はありません。古い言葉ですが、かつて「外事」を専門とする外事専門学校がありました。その後、外国語大学と言う名称で大学に発展しますが、常葉でも、英語とスペイン語専攻の2学科を持つ学部の名称に「外国語」を冠したのでしょうか。（かつては、外大や文学部の傘下に〇〇語専攻の学科が置かれていたものです。）しかし Foreign Studies を忠実に体现するならば、外国学（外事学?）をもっと色濃く出したカリキュラムでも良いのではないのでしょうか。従来言語・文学という伝統的研究領域の科目群を残しつつ、外国学を専門とする学部の傘下に、地域研究・文化・社会・歴史・地理（地政学）・宗教の学修をする科目群を基軸として置く。さらに政治・経済の観点から、一学部を越えて他分野の経営学部・法学部などとの連携も、他学部専門科目履修制度などを利用して、卒業までのトータルな学修に組み入れる。これを、2 年次前期までの語学力アップ系科目群と、2 年次後期からの領域別科目群に大別し、観光系・商経系・語文系・教育系・地域研究系などの系統（あるいはコース）制にする。学科は1つに統合し、言語で区分するのをやめる、、

私は車の運転が好きですが、昔、マニュアル車に乗っていた頃の左足は、現在ではすっかりオートマ化して無用に。さらに、運転支援機能付きの今の車では、走行中の加速・減速には右足も使わず。同様に、日常的な語学力も、「ポケトーク」などという携帯の自動翻訳機やスマホのアプリで間に合うようになり、さらに昨今は、生成 AI も想像を超えた機能を持つようになっていきます。高い語学力を獲得し、言語学・文学の研究をしたり、通訳・翻訳ができたりする人材を養成してきた外国「語」系の大学や学部は、もしかしたら、やがて「時代や世の中（や技術）が潰す」ことになるかもしれません。しかし、大学レベルでのマニュアル的な語学の必要性は決して消えないでしょう。ただ、単専攻の学部や学科の学修としてではなく、他の専門分野の「副専攻」あるいは「第二学位」として、、（退職者の妄想めいた言葉、、、ですから、お許しを。）

インバウンドの観光客が激増し、さらに、人口減少の中、今の社会インフラを維持するために移民も必要な時代になろうとしています。40 歳になる外国語学

部という「子」は、いかに「孫」の代にその歴史を繋ぐか。「親」は時代の変化に伴い役割を終えましたが、働き盛りの 40 歳には、不穏な国際情勢で日本人が内向き志向を強めるこの時代にこそ、次の一手を模索し続けてほしいと思います。

英米語学科のカリキュラム改革の原点

—専門セミナーの設置とリサーチ科目の充実—

戸田 勉

常葉大学名誉教授

2013年に私が常葉大学に赴任してから今日までの間で、最も大きな変化はカリキュラム改革である。2014年、前学長の西頭徳三先生が大学全体のカリキュラム改革を実現するため、各学部学科にカリキュラム・コーディネーターという委員を置くことになり、英米語学科では私が指名された。ここから英米語学科創設以来の大掛かりなカリキュラム改革が始まり現在に至るのであるが、その第一歩となるのが専門セミナーの開設である。ここではその経緯について簡単に説明し、英米語学科の教育改革の原点を書き留めておきたい。

当時の英米語学科のカリキュラムは、学生の英語力の向上を優先していたため、語学クラスが数多く設定されていた。さらに、語学系の科目は学科の専攻科目群の中で大きな割合を占め、専攻研究の学びが希薄なカリキュラムだった。また、一般的なカリキュラムでは、大学の学びの集大成として特定のテーマを専門的に学ぶリサーチ科目が設けられているのだが、英米語学科では、ただ卒業論文（当時は「特別研究」）だけが4年次に設定されているだけで、その土台を作る科目が存在せず、学びの連続性が確保されていなかった。そこで、改革の第一歩は、リサーチ科目の充実のために「専門セミナー」を3年次と4年次に設定することだった。

カリキュラムに「専門セミナーⅠ」を組み込むこと自体は事務的な処理になるので難しいことではなかったのだが、この場合、この科目が適用されるのはその年度に入学した1年生が3年生になってからということになり、その年度の2年生と3年生は学ぶチャンスがなくなってしまう。そこで、3年の「専門セミナーⅠ」については、当時選択科目であった「Intensive Reading III」を代替することにした。しかし、開講年度は、この科目が選択科目であったことに加え、「専門セミナー」という授業内容に学生も慣れていなかったため、履修者数は芳しくなかった。翌年からは積極的に学生に働きかけた効果もあり、人数的にも集まり始め、

リサーチ科目として動き始めることができた。

次の段階として、「専門セミナー I」での学びを発展させて卒業論文に結びつけるためのリサーチ科目として「専門セミナー II」を開講した。この段階では必修化まで踏み切れなかったが（2024 年度入学生から必修化が決定）、学科としては画期的な改革だった。また、このときに学科教員だった現学長の江藤秀一先生のご提案で、卒業論文の履修者が論文の成果を発表する発表会が企画され、それが現在の中間発表会と年度末の最終発表会に引き継がれている。

個人的には、学生と同じ土俵で文学テキストや批評を論じ合える「専門セミナー」はとても刺激的な授業だった。学生の繊細で柔軟な感性がテキストに触れると、先入観に囚われた教員の目には見えない新鮮な発見が生まれ、幾度となく驚かされた。ノーベル賞作家カズオ・イシグロをテキストにした授業は学生の反応がとても良く、私自身も学生から学ぶことが多かった。*Nocturnes*（『夜想曲集』2009 年）を取り上げたときは、授業での討議が私の最初のイシグロ論執筆の大きな動機づけとなった。このようなテキストを通して教員と学生が刺激し合う「専門セミナー」の特色は他の科目には見られない魅力である。

英米語学科のリサーチ科目の充実は「専門セミナー」の必修化をもって終わるものではない。順次的な科目の発展を目指すのであれば、2 年次に「専門セミナー」の準備教育として研究方法や姿勢を学ぶ科目を設置してもいいかもしれない。また、3、4 年次に「専門セミナー」とは別の演習科目を置いて、副専攻分野を作ることも学生の視野を広げる意味で重要になるだろう。AI が急速に発展し、英語の日常的なコミュニケーションは機械に任される日が来るのも近いことは疑いない。そのような状況を鑑みれば、学科として力を入れるべき方向性は明確だろう。言語や文化・文学を通して、人間とは何かという問題について深く考える機会を十分に持つことである。「専門セミナー」を含め、英米語学科のリサーチ科目のさらなる拡充を強く望む次第である。

3. 外国語学部 40 周年年譜

常葉大学外国語学部年譜－ 40 年の歩み－

市川 真矢

「大学名＊」は本年譜編纂時点で提携が終了している

西暦	和暦	月	日	
1974	昭和 49	8	20	静岡市瀬名と清水市鳥坂の隣接地に常葉学園大学用地 12,418 m ² を買収
1978	昭和 53	3	7	常葉学園大学体育館用地として鳥坂に 3,970 m ² を買収
1979	昭和 54	5	5	常葉学園大学地鎮祭
1980	昭和 55	1	8	常葉学園大学教育学部の設置認可
1980	昭和 55	4	1	常葉学園大学初代学長に諏訪卓三就任(1980.4.1～1990.3.31)
1980	昭和 55	4	23	第 1 回常葉学園大学入学式[教育学部(初等教育課程)]在籍数 139 名
1980	昭和 55	4	27	常葉学園大学本館竣工
1980	昭和 55	6	8	常葉学園大学開学式・学園創立者銅像序幕式
1981	昭和 56	11	19	常葉学園大学体育館地鎮祭
1982	昭和 57	10	9	常葉学園大学体育館落成式典
1983	昭和 58	2	8	常葉学園大学外国語学部高 2 中 1 免許認可
1983	昭和 58	12	20	常葉学園大学 1 号館竣工し本館 7・8 階内装工事完成
1983	昭和 58	12	22	常葉学園大学外国語学部設置認可
1984	昭和 59	2	18	常葉学園大学同窓会発足
1984	昭和 59	4	1	常葉学園大学に外国語学部(英米語学科、スペイン語学科)開設
1984	昭和 59	4	1	外国語学部長に鈴木實就任(1984.4.1～1988.3.31)、 英米語学科長に桜庭一郎就任(1984.4.1～1988.3.31)、 スペイン語学科長に佐々木孝就任(1984.4.1～1989.3.31)
1984	昭和 59	4	6	外国語学部第 1 期生 153 名が入学
1984	昭和 59	10	20	第 1 回「静岡県高等学校英語対話弁論大会」(常葉学園大学 外国語学部主催・静岡県教育委員会後援)を開催
1984	昭和 59	11	2	常葉学園大学創立 5 周年及び外国語学部開設記念式典を挙 行、高円宮憲仁親王殿下来学
1984	昭和 59	11	2	第 1 回「学内英語弁論大会」を開催
1984	昭和 59	11	2	第 1 回「スペイン語スピーチコンテスト」(常葉学園大学イ スパノ・アメリカ文化研究会主催)を開催、出場者 20 名
1985	昭和 60	3	1	『常葉学園大学紀要－外国語学部』第 1 号を刊行
1985	昭和 60	3	1	『Retama』創刊(スペイン語学科＝常葉学園大学イスパノ・ アメリカ文化研究会の機関誌)

1985	昭和 60	7	15	常葉学園大学、アメリカへの初の海外語学研修実施(～8月4日)
1986	昭和 61	9	17	常葉学園大学、スペイン国立グラナダ大学* (スペイン) Universidad de Granada と提携協定を調印
1986	昭和 61	10		常葉学園大学英語・英文学会を発足
1986	昭和 61			第3回「スペイン語スピーチコンテスト」を第1回「静岡県スペイン語弁論大会」として学外からの参加者8名も加え開催(近畿日本ツーリスト後援)、以後2013年まで開催
1987	昭和 62	10	24	常葉萬葉植物園開園式
1988	昭和 63	3	1	『Albion』創刊(英米語学科＝常葉学園大学英語・英文学会の機関誌)
1988	昭和 63	3	15	外国語学部第1期生131名卒業(英米語学科100名、スペイン語学科31名)
1988	昭和 63	4	1	外国語学部長に海野泰男就任(1988.4.1～2002.3.31)、英米語学科長に安永義夫就任(1988.4.1～1991.3.31)
1988	昭和 63	8	18	常葉学園大学、クレイトン大学(アメリカ) Creighton University と留学協定書を調印
1989	平成元年	3	9	常葉学園大学、エバンズビル大学(アメリカ) University of Evansville と協力協定を調印
1989	平成元年	4	1	スペイン語学科長に大久保光夫就任(1989.4.1～1999.3.31)
1989	平成元年	7	6	留学制度によるクレイトン大学(アメリカ)への最初の常葉学園大学留学生4名に許可伝達を行う
1989	平成元年	7	7	常葉学園大学、スペイン国立グラナダ大学* (スペイン) と協力協定を調印(再)
1989	平成元年	10	28	常葉学園大学創立10周年記念式典を静岡市民文化会館で挙行し磯村尚徳氏の記念講演
1990	平成 2	4	1	常葉学園大学第2代学長に吉川晴夫就任(1990.4.1～1994.3.31)
1991	平成 3	4	1	英米語学科長に佐野實就任(1991.4.1～1998.3.31)
1992	平成 4	3	7	常葉学園大学初代学長諏訪卓三の胸像除幕式(堤直美製作)
1994	平成 6	3	9	常葉学園大学に英語検定優秀団体賞が授与される
1994	平成 6	4	1	常葉学園大学第3代学長に理事長木宮和彦が就任(1994.4.1～1994.6.30)
1994	平成 6	4	23	常葉学園大学オープンユニバーシティを開設し第1回講師に静岡県知事石川嘉延氏を招く
1994	平成 6	5		エバンズビル大学の教授陣と学生を迎え、第1回日本文化セミナーを開催(以降、1995、1997、2000、2001、2002、2004と続く)
1994	平成 6	7	1	常葉学園大学第4代学長に齋藤諒淳就任(1994.7.1～2002.3.31)
1994	平成 6	9	5	常葉学園大学、デ・モントフォート大学(イギリス) De Montfort University と友好協定を調印
1995	平成 7	2	27	常葉学園大学、メキシコ国立自治大学*(メキシコ) National Autonomous University of Mexico と友好協定を調印

I. 3. 外国語学部 40 周年年譜

1995	平成 7	8	2	常葉学園大学、サラマンカ・カトリック大学*（スペイン）Pontifical University of Salamanca と友好協定を調印
1995	平成 7	12	22	常葉学園大学大学院国際言語文化研究科（英米言語文化専攻、国際教育専攻）設置認可
1996	平成 8	4	1	常葉学園大学大学院国際言語文化研究科（英米言語文化専攻、国際教育専攻）開設
1996	平成 8	7		インターネットに常葉学園のウェブサイトを開設
1996	平成 8	8	19	常葉学園大学、スペイン国立サラマンカ大学*（スペイン）University of Salamanca と提携協定を調印
1996	平成 8	8	30	日中友好訪中団常葉遣唐使を派遣（～9月6日）
1997	平成 9	4	5	常葉学園大学、オックスフォード・ブルックス大学*（イギリス）Oxford Brookes University と提携協定を調印
1997	平成 9	10	21	本宮ホールにて Memorial Service for Catherine Sasaki を催す（Prof. Catherine Sasaki(1954.9.24～1997.8.14 享年 42)）
1998	平成 10	4	1	英米語学科長に畑光夫就任（1998.4.1～2000.3.31）
1998	平成 10	4	1	国際交流室長に福島義之就任（1998.4.1～2008.3.31）
1998	平成 10	11	14	常葉学園大学、ビクトリア大学（カナダ）University of Victoria と友好協定を調印
1999	平成 11	3	10	常葉学園大学 2 号館起工式
1999	平成 11	4	1	スペイン語学科長にロベルト・オエスト就任（1999.4.1～2001.3.31）
2000	平成 12	5	10	常葉学園大学、オックスフォード・ブルックス大学*（イギリス）Oxford Brookes University と提携協定を調印（再）
2000	平成 12	2	14	常葉学園大学、メキシコ国立グアダラハラ大学（メキシコ）University of Guadalajara と友好協定を調印
2000	平成 12	4	1	常葉学園歴史資料館開設
2000	平成 12	4	1	英米語学科長に小川清就任（2000.4.1～2002.3.31）
2000	平成 12	4	1	常葉学園大学に英語教育センター開設。英語一貫教育部、早期英語教育部、ハイテク・メディア教育部の 3 部を置く
2000	平成 12	4	15	常葉学園大学 2 号館竣工式
2000	平成 12	4	20	常葉学園大学創立 20 周年記念式典 正面を飾る 20 鐘のカリオン演奏で祝う
2001	平成 13	4	1	スペイン語学科長に鈴木昭一就任（2001.4.1～2007.3.31）
2001	平成 13	10	2	アクトシティ浜松に常葉アクトキャンパスがオープン 昼間は高校生の「常葉アクトコース」夜間は大学社会人のための「公開講座」に活用
2002	平成 14	4	1	常葉学園大学第 5 代学長に海野泰男就任（2002.4.1～2010.3.31）
2002	平成 14	4	1	外国語学部長に鈴木薫就任（2002.4.1～2012.3.31）、英米語学科長に佐治武志就任（2002.4.1～2004.3.31）
2002	平成 14	9	1	静岡市川辺町に 5 階建常葉サテライトビル開設、「とこは保育サービスセンター」スタート 4・5 階は常葉学園大学・大学院の夜間社会人対象の教室として活用

2003	平成 15	1	26	常葉学園大学・金両基教授、前年 10 月 9 日に大韓民国文化勲章を受賞 記念講演会と祝賀会が県日韓親善協会、常葉学園大学等の共催で開催 (静岡グランドホテル中島屋)
2003	平成 15	9	4	外国語学部、グリフィス大学 (オーストラリア) Griffith University と友好協定を調印
2003	平成 15	11	21	外国語学部、クイーンズランド工科大学 (オーストラリア) Queensland University of Technology と友好協定を調印
2003	平成 15	11		学内英語弁論大会を Catherine Sasaki Memorial Speech Contest と改称し開催 (1997 年に逝去されたキャサリン・ササキ先生を追悼)
2004	平成 16	4	1	外国語学部にグローバルコミュニケーション学科を開設 (スペイン語学科を改組転換)、「国際英語専攻」「スペイン・ラテンアメリカ専攻」「日本語教育専攻」の 3 専攻をおく
2004	平成 16	4	1	英米語学科長に福島義之就任 (2004.4.1 ~ 2008.3.31)、グローバルコミュニケーション学科長に佐治武志就任 (2004.4.1 ~ 2007.3.31)
2004	平成 16	4	1	「常葉学園大学英語・英文学会」、「常葉学園大学イスパノ・アメリカ文化研究会」を統合し、「常葉学園大学外国語学部言語文化研究会」を発足させる
2004	平成 16	4	17	大学院 OB・OG、現役院生による定期的な研究会として常葉学園大学大学院研究会が発足、第 1 回研究会を開く
2004	平成 16	5	3	常葉学園大学、済州大学 (韓国) と友好協定を調印
2004	平成 16	2	28	常葉学園大学 3 号館竣工
2005	平成 17	4	1	常葉学園大学にキャリアサポートセンター (CSC)、教職支援センター開設
2005	平成 17	9	6	常葉学園大学 e-ラーニング授業開始 (エバンズビル大学 (アメリカ))
2005	平成 17	9	16	常葉学園大学 大学・大学院における教員養成プログラム (教員養成 GP) 採択
2006	平成 18	3	27	常葉学園大学、クレイトン大学 (アメリカ) Creighton University と留学協定書の調印 (再)
2007	平成 19	4	1	グローバルコミュニケーション学科長に鈴木薫就任 (2007.4.1 ~ 2008.3.31)
2007	平成 19	4	26	外国語学部、慶熙 (キョンヒ) 大学 (韓国) Kyung Hee University と友好協定を調印
2007	平成 19	5	10	外国語学部、ペンシルベニア大学 (アメリカ) University of Pennsylvania と友好協定を調印
2008	平成 20	4	1	英米語学科長に棚橋克彌就任 (2008.4.1 ~ 2010.3.31)、グローバルコミュニケーション学科長に福島義之就任 (2008.4.1 ~ 2012.3.31)
2008	平成 20	5	17	常葉学園大学外国語学部スペイン語学科の廃止届出
2008	平成 20	6	4	外国語学習支援センター開所 (センター長: 福島義之教授・グローバルコミュニケーション学科長)
2008	平成 20	11	26	教員の相互理解、研究の振興、教員の資質向上、学部の活性化を目的として、第 1 回外国語学部コロキウムを開催。講師: 鈴木薫 演題「Colloquium とは」

I. 3. 外国語学部 40 周年年譜

2009	平成 21	1	28	外国語学部コロキウム 講師：鈴木規巳洋（英米語学科） 演題「私の履歴書～私の環境と私の興味～」
2009	平成 21	4	1	外国語学習支援センター長に桑原陽一就任 (2009.4.1～2012.3.31)
2009	平成 21	6	10	外国語学部コロキウム 講師：Robert McLaughlin（英米語学科） 演題「On the Rationale for Using the iPod in Our Classes」
2009	平成 21	8	24	常葉学園大学、エバンズビル大学（アメリカ）と提携協定を調印（再）
2009	平成 21	8	26	常葉学園大学、クレイトン大学（アメリカ）Creighton University と留学協定書の調印（再々）
2009	平成 21	10	20	常葉学園大学、済州大学（韓国）Jeju National University と友好協定を調印（再）
2009	平成 21	12	19	京都外国語大学英米語学科主催 第 3 回森田杯・英文毎日杯 「ペアで紹介する日本文化プレゼンコンテスト」で外国語学部学生ペア（大村悠・明峰加奈）が上智大学や津田塾大学などの強豪を抑えて優勝
2010	平成 22	4	1	常葉学園大学第 6 代学長に角替弘志就任（2010.4.1～2013.3.31）、英米語学科長に桑原陽一就任（2010.4.1～2013.6.18）
2010	平成 22	6	9	外国語学部コロキウム 講師：増井実子（グローバルコミュニケーション学科） 演題「近世スペインにおけるモリスコ問題」
2010	平成 22	10	23	常葉学園大学創立 30 周年記念式典
2010	平成 22	11	10	外国語学部コロキウム 講師：Kevin Demme（英米語学科） 演題「Introducing Word Roots into English Classes」
2011	平成 23	6	8	外国語学部コロキウム 講師：Tekin Bingöl（英米語学科） 演題「Using TV Commercials to Teach Media and Cultural Awareness」
2012	平成 24	1	26	外国語学部コロキウム 講師：三村友美（グローバルコミュニケーション学科） 演題「ユダヤ・スペイン語現代イスタンブル方言に見られるトルコ語由来の諸要素」
2012	平成 24	4	1	外国語学部長に桑原陽一就任（2012.4.1～2013.6.18）、鈴木薫が代行（2013.6.19～2014.3.31）
2012	平成 24	4	1	グローバルコミュニケーション学科長に鈴木薫就任（2012.4.1～2013.3.31）
2012	平成 24	4	1	外国語学習支援センター長に鈴木薫就任（2012.4.1～2013.3.31）
2012	平成 24	4	1	グローバルコミュニケーション学科、社会人基礎力養成を目指して「協働研究セミナー」をカリキュラムに導入
2012	平成 24	4	14	外国語学部コロキウム 講師：鈴木薫 演題「USB フラッシュメモリ使用による RISO 印刷機の使い方」
2012	平成 24	5	12	常葉学園大学、提携大学の韓国・済州大学校 60 周年記念国際交流展覧会に参加（～5 月 22 日）

2012	平成 24	7	4	外国語学部コロキウム 講師：鈴木薫 演題「教材準備とプレゼンテーション Class Materials Preparation and Presentation」
2013	平成 25	3	1	『Albion』26 号が『Retama』を吸収合併し、外国語学部全体の機関誌となる
2013	平成 25	4	1	3 大学（常葉学園大学・浜松大学・富士常葉大学）を統合し「常葉大学」とする。常葉大学長・浜松大学長・富士常葉大学長に西頭徳三就任（2013.4.1～2017.3.31）
2013	平成 25	4	1	グローバルコミュニケーション学科長に鈴木昭一就任（2013.4.1～2015.3.31）
2013	平成 25	4	1	外国語学習支援センター長に良知恵美子就任（2013.4.1～2017.3.31）
2013	平成 25	4	6	第 1 回常葉大学入学式をグランシップで举行
2013	平成 25	4	20	外国語学部、銘伝大学（台湾）Ming Chuan University と友好協定を調印
2013	平成 25	4	23	常葉大学開学記念式典を静岡市民文化会館で举行
2013	平成 25	10	31	外国語学部、アリカンテ大学（スペイン）University of Alicante と友好協定を調印
2013	平成 25	11	27	外国語学部言語文化研究会講演会 講師：小嶋茂（JICA 横浜 海外移住資料館学芸担当）演題「日本人海外移住の歴史と日系人」
2014	平成 26	1	22	外国語学部コロキウム 講師：戸田勉（英米語学科） 演題「アイルランドの社会と文化－遠くて近い国」
2014	平成 26	3	1	『常葉学園大学紀要－外国語学部』を『常葉大学外国語学部紀要』と改称、第 30 号（統合記念号）として刊行
2014	平成 26	4	1	外国語学部長に鈴木薫就任（2014.4.1～2016.3.31）、英米語学科長を併任（2014.4.1～2015.3.31）
2014	平成 26	5	1	外国語学部、カリフォルニア大学アーバイン校（アメリカ）University of California, Irvine と友好協定を調印
2014	平成 26	5	21	外国語学部言語文化研究会講演会 講師：高塚素乃己（英米語学科卒業生・日本語学校校長）、兵藤匡祥（英米語学科卒業生・塾講師） 演題「海外へ飛び出そう！」
2014	平成 26	6	4	外国語学部、ビクトリア大学（カナダ）University of Victoria と友好協定を調印
2014	平成 26	6	18	外国語学部コロキウム 講師：山田昌史（英米語学科） 演題「述語のアスペクト特性に関わる普遍性と個別性－形態統語論的アプローチからの分析－」
2014	平成 26	12	16	外国語学部創設 30 周年を記念して、第 1 回「多言語レシテーション大会」をたちばなホールにて開催、4 言語合わせて 60 名が会場
2015	平成 27	3	10	外国語学部、ロンドン大学ユニバーシティ・コレッジ（イギリス）University College London と友好協定を調印
2015	平成 27	4	1	英米語学科長に一言哲也就任（2015.4.1～2016.3.31）、グローバルコミュニケーション学科長に戸田裕司就任（2015.4.1～2017.3.31）

I. 3. 外国語学部 40 周年年譜

- 2015 平成 27 6 17 外国語学部コロキウム 講師：若松大祐（グローバルコミュニケーション学科） 演題「台湾にとつての日本：出頭天するために他者となり自己となる重層的手段」
- 2015 平成 27 10 21 外国語学部言語文化研究会講演会 講師：李洙任（リー・スーイム）（龍谷大学経営学部教授） 演題「国籍ってなに？」
- 2016 平成 28 1 20 外国語学部コロキウム 講師：江口佳子（グローバルコミュニケーション学科） 演題「音楽運動トロピカーリアと「食人宣言」」
- 2016 平成 28 2 18 常葉大学・同短期大学部の新校舎用地として静岡市駿河区弥生町に 43,200.01 ㎡の土地を買収（ポーラ化成工業株式会社のポーラ静岡工場跡地）
- 2016 平成 28 4 1 外国語学部長に一言哲也就任（2016.4.1～2019.3.31）、英米語学科長に良知恵美子就任（2016.4.1～2020.3.31）
- 2016 平成 28 6 29 外国語学部言語文化研究会講演会 講師：ナレス・マハラジャン（ネパール語通訳） 演題「ネパールを知ろう！」
- 2016 平成 28 7 20 外国語学部コロキウム 講師：佐野富士子（英米語学科） 演題「リサーチに基づいた英語教育」
- 2017 平成 29 1 18 外国語学部コロキウム 講師：江藤秀一（英米語学科） 演題「18 世紀のスウェーデン・スウェーデン族社会の崩壊と移民ブーム」
- 2017 平成 29 1 2 外国語学部、リスボン大学（ポルトガル）Universidade de Lisboa と友好協定を調印
- 2017 平成 29 4 1 常葉大学長に江藤秀一就任（2017.4.1～2025.3.31）
- 2017 平成 29 4 1 グローバルコミュニケーション学科長に増井実子就任（2017.4.1～2021.3.31）
- 2017 平成 29 4 1 外国語学習支援センター長に谷口茂謙就任（2017.4.1～2019.3.31）
- 2017 平成 29 7 5 外国語学部言語文化研究会講演会 講師：エフィ・グスティ・ワフユニ（インドネシア語通訳） 演題「イスラム教と日本で暮らすイスラム教徒」
- 2017 平成 29 7 12 外国語学部コロキウム 講師：阪東哲也（英米語学科） 演題「情報コミュニケーションのあり方を探るーワールドカフェの試みー」
- 2017 平成 29 12 6 外国語学部コロキウム 講師：若松大祐（グローバルコミュニケーション学科） 演題「近現代台湾史～日本と中国の意味～」
- 2018 平成 30 3 1 『Albion』第 31 号から『とこはことのは』に改称
- 2018 平成 30 4 1 静岡瀬名キャンパスより静岡草薙キャンパスに移転
- 2018 平成 30 7 4 外国語学部コロキウム 講師：本沢彩（英米語学科） 演題「英語音声学の未来：これまでの教育経験と研究結果から考えてみたら」
- 2018 平成 30 11 3 静岡草薙キャンパスの大学祭として第 1 回心薙祭（こなぎさい）を開催
- 2018 平成 30 11 24 京都外国語大学で開催された第 36 回全日本学生ポルトガル語弁論大会にて亀井李佳（グローバルコミュニケーション学科 3 年）7 位入賞、「京都ラテンアメリカ文化協会賞」を受賞

2018	平成 30	12	1	第 7 回静岡韓国語スピーチ大会（在横浜大韓民国総領事館、在日本大韓国民団静岡県地方本部主催）の自由スピーチ部門にて、伊川亜祐菜（グローバルコミュニケーション学科 1 年）が 3 位に入賞
2019	平成 31	1	9	外国語学部コロキウム 講師：小池理恵（英米語学科） 演題「Vladimir Nobokov ↔ Bharati Mukherjee Mauritius: 文学、言語政策、チャゴス難民、そして 50 周年」
2019	平成 31	3	1	外国語学部言語文化研究会の事業内容を整理し、規約を策定
2019	平成 31	4	1	外国語学部長に戸田裕司就任（2019.4.1 ～ 2023.3.31）
2019	平成 31	4	1	外国語学習支援センター長に戸田勉就任（2019.4.1 ～ 2020.3.31）
2019	令和元年	7	6	京都外国語大学で開催された第 38 回関西学生ポルトガル語暗誦大会の〈初級の部〉で渡邊光砂（グローバルコミュニケーション学科 2 年）が、〈中級の部〉で大塚彩乃（グローバルコミュニケーション学科 3 年）が共に優勝
2019	令和元年	8	27	外国語学部、ダルハウジー大学（カナダ）Dalhousie University と友好協定を調印
2019	令和元年	9	1	外国語学部、閩南師範大学（中国）Minnan Normal University と友好協定を調印
2019	令和元年	10	9	外国語学部言語文化研究会講演会 講師：鐸木昌之（特定非営利法人地域開発協議会代表理事、赤穂観光大使） 演題「北朝鮮はどんな国？－政治・外交・経済・文化」
2019	令和元年	11	23	京都外国語大学で開催された第 37 回全日本学生ポルトガル語弁論大会にて川村味奈美（グローバルコミュニケーション学科 3 年）が 2 位となり、「京都外国語大学総長杯」を受賞
2019	令和元年	11	24	静岡日韓友好フェスティバル（駐横浜大韓民国総領事館、在日本大韓国民団静岡県地方本部主催）の第 1 部「韓国語スピーチ」の自由スピーチ部門にて小池茉衣（グローバルコミュニケーション学科 1 年）が「銅賞」を受賞、第 2 部の「日韓友好ステージ」では、グローバルコミュニケーション学科 1 年生の「k-pop カバーダンスサークル」が出演し、Twice の FANCY、TT、feelspecial のメドレーのダンスを披露
2020	令和 2	2	19	外国語学部コロキウム 講師：良知恵美子（英米語学科） 演題「学内共同研究「多文化ファシリテーター育成の基礎的研究」成果報告」
2020	令和 2	3	1	『常葉大学大学院国際言語文化研究科紀要』を創刊
2020	令和 2	3	13	新型コロナウイルス対策の特別措置法が成立
2020	令和 2	3	15	新型コロナウイルス感染症蔓延に鑑み、卒業式を学内実施、卒業記念パーティーを中止
2020	令和 2	4	1	英米語学科長に山田昌史就任（2020.4.1 ～ 2024.3.31）
2020	令和 2	4	1	外国語学習支援センター長に小池理恵就任（2020.4.1 ～ 2023.3.31）
2020	令和 2	5	11	新型コロナウイルス感染症蔓延による緊急事態宣言を受け、1 ヶ月遅れて前期開講

I. 3. 外国語学部 40 周年年譜

- 2020 令和 2 9 23 外国語学部コロキウム 講師：崔慶原（グローバルコミュニケーション学科） 演題「日韓関係における「リンケージポリティクス」の展開－歴史摩擦、輸出規制の強化、GSOMIA 問題を中心に－」
- 2020 令和 2 12 1 Catherine Sasaki Memorial Speech Contest を Tokoha University English Speech Contest と改称し開催（在職中に逝去された先生方を追悼）
- 2021 令和 3 4 1 グローバルコミュニケーション学科長に谷誠司就任（2021.4.1～2025.3.31）
- 2021 令和 3 9 22 外国語学部コロキウム 講師：那須野絢子（英米語学科） 演題「ラフカディオ・ハーンの怪談解析」
- 2021 令和 3 11 19 第 6 回学生知財活用ビジネスアイデアプレゼン大会（主催：公益財団法人静岡県産業振興財団）にてグローバルコミュニケーション学科 3 年生のペア（佐野恭香・杉山明日香）が静岡県内の 4 大学 11 チームの中で最優秀賞を獲得
- 2021 令和 3 12 15 外国語学部コロキウム 講師：石川芳恵（英米語学科） 演題「英語学習における語彙の指導」
- 2022 令和 4 4 1 グローバルコミュニケーション学科、「協働研究セミナー」のカリキュラムを改訂し、日本社会が抱える課題を「問題解決型学習法」「チーム基盤型学習法」を通して理解するものとする
- 2022 令和 4 6 29 外国語学部コロキウム 講師：戸田勉（英米語学科） 演題「ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』とナショナリズム－『ユリシーズ』が出版され、アイルランドが自由国となった 1922 年をめぐる－」
- 2022 令和 4 9 21 外国語学部言語文化研究会講演会 講師：ちゃっきり（茶喜利）ほか共演者 1 名 演題「吟遊音楽へのいざない」
- 2022 令和 4 11 30 外国語学部コロキウム 講師：柳采延（グローバルコミュニケーション学科） 演題「韓国における教育する母－家父長制と構造化される選択」
- 2023 令和 5 2 8 外国語学部コロキウム 講師：清ルミ（グローバルコミュニケーション学科） 演題「医療における異文化コミュニケーション的ホリスティックケア紹介と臨床事例」
- 2023 令和 5 4 1 外国語学部長に増井実子就任（2023.4.1～）
- 2023 令和 5 4 1 外国語学習支援センター長に有富智世就任（2023.4.1～2025.3.31）
- 2023 令和 5 5 31 外国語学部コロキウム 講師：天野剛至（英米語学科） 演題「アジア系アメリカ児童文学にみるトランスナショナルな語り－時間的・空間的・精神的＜中間＞における自己（再）表象」
- 2023 令和 5 7 12 外国語学部言語文化研究会講演会 講師：小倉優子（タレント） 演題「今だからわかる大学で身につける教養の大切さ」
- 2023 令和 5 11 29 外国語学部コロキウム 講師：坂本勝信（グローバルコミュニケーション学科） 演題「やさしい日本語－小中学校の教職員対象の研修会における実践を例に－」

2024	令和 6	1	9	外国語学部言語文化研究会講演会 講師：サリータ・パディ 演題「パディ族に生きる」
2024	令和 6	2	7	外国語学部コロキウム・退職記念講演 講師：戸田勉（英米 語学科） 演題「イギリス小説・・・ジョイス・イシグロ」
2024	令和 6	4	1	英米語学科長に新妻明子就任（2024.4.1～）
2024	令和 6	5	29	外国語学部コロキウム 講師：小口一郎（英米語学科） 演 題「抽象から印象へーウィリアム・ハズリットの美学論」
2024	令和 6	10	23	外国語学部コロキウム 講師：戸田裕司（グローバルコミュ ニケーション学科） 演題「裁判から見た地域社会ー中国宋 代の判決文集「清明集」の世界ー」
2024	令和 6	11	12	外国語学部言語文化研究会講演会 講師：蒲元樹（株式会社 マザーハウス 地方中核都市エリアマネージャー） 演題「途 上国から世界に通用するブランドをつくる」
2025	令和 7	2	5	外国語学部コロキウム 講師：Peter Hourdequin 演題 「Ecolinguistics and the new literacies of place, practice, and play」

参考文献

- ・常葉学園 50 年史編集委員会（編）（1996）『目でみる 50 年史 日々是好日 別冊資料編』
- ・常葉学園大学外国語学部創立 20 周年記念誌編集委員会（編）（2003）『明日開く 国際交流 20 年 常葉学園大学外国語学部創立 20 周年』
- ・常葉学園大学創立 30 周年史編集委員会（編）（2010）『常葉学園大学 30 年史』
- ・常葉学園史編集委員会（編）（2017）『より高きを目指して【第二版】』

このほか、『Albion』、『Retama』、『とこはことのは』、『Campus Browser』、常葉（学園）大学卒業アルバム、常葉大学公式ウェブサイト <https://www.tokoha-u.ac.jp>、外国語学習支援センター及び常葉大学学生課で管理している海外提携校との協定書及びその関連資料、外国語学部コロキウムのハンドアウト等を参照している。

謝辞

本年譜の編纂に際し資料をご提供くださいました常葉大学外国語部の先生方、常葉大学法人本部総務課・人事課、常葉大学事務局、常葉大学草薙学生課、常葉大学瀬名事務課学生担当、常葉大学外国語学習支援センター、常葉大学草薙図書館、常葉大学瀬名図書館の皆様に厚く御礼申し上げます。

Ⅱ 外国語学部共通

1. 教員エッセイ

小林伝兵衛住宅を訪ねて

天野 剛至

2024 年 9 月 5 ～ 7 日、筆者はカナダ・ブリティッシュコロンビア (BC) 州の内陸部へ初めて足を延ばすことになった。ことの経緯^{いきさつ}は次の通りである。筆者が参加している研究グループは、第二次世界大戦以前にカナダに移民した日本人、いわゆる日系カナダ人の俳句活動について調査している。調査の過程で知り合ったのが、日系カナダ人三世のシャロン・ホープさんだ。彼女の祖父、小林伝兵衛 (1878 ～ 1968) は戦前から戦中、さらに戦後にかけて、カナダにおける日本人移民の俳句界の指導者として名声を得た人物である。伝兵衛は日系カナダ移民研究者の間でもほとんど無名に近い存在だが、BC 州内陸部のオカナガン溪谷で果樹農業を成功させ、日系人のみならず地元の白人住民からも尊敬を集めた立志伝中の人物だ。今回の旅は、シャロンさんが彼女の祖父に深い関心を寄せる私たち研究グループ (筆者の元同僚で日本在住のカナダ人ジャン＝ピエール、彼の幼なじみでバンクーバー郊外在住の作家ジャクリーン、それに筆者) に、「よかったらオカナガン溪谷を案内してあげましょう」と申し出てくださったことで実現した。こうして、私たちはシャロンさんの夫テッドさんの運転する SUV に乗り込み、総走行距離 900 キロメートルに及ぶロードトリップに出発したのだった。

9 月 5 日午前、私たちはバンクーバー郊外を出発し、オカナガン溪谷を目指した。車窓から広がる BC 州内陸部の景色は雄大そのもので、場所によって異なる表情を見せてくれる。花崗岩の岩肌がむき出しになった荘厳な山々が現れるかと思えば、一面を灰緑色の低木セージブラシが覆う乾燥した草原が続く。ただ、この地域は夏になると山火事が頻繁に発生するため、禿げ山ばかりが目立つ景色には幾分興ざめするところもあった。

片道 5 時間ほどの車中は、小林家の歴史を振り返る話題に費やされた。小林伝兵衛は、明治 11 (1878) 年長野県小泉郡小泉村 (現・上田市小泉) に生まれた。農家の三男三女の次男で、村の学校を卒業すると 16 歳で製糸場に就職し、長野県内から岐阜・富山まで行脚^{あんぎゃ}して蚕種^{さんしゅ} (卵) を販売・集金する仕事に従事した。

なお、この仕事が縁で、後年養蚕業を営む柳澤家の末娘ひろ（1889～1960）と婚約することになる。また、一攫千金^{いっかく}を夢見て、一時期北海道で砂金掘りに従事した経験もある。冒険心に駆られた伝兵衛は、ついに海外へ渡航する決意を固め、1906 年、28 歳で単身カナダに渡った。サケ漁や鉄道敷設の仕事を経て、1907 年にオカナガン溪谷で果樹園業に従事するようになると、伝兵衛はカナダに骨を埋める覚悟を決め、1908 年に市民権を獲得。その後もリンゴ園の開墾を続け、白人経営者からの信頼を得て農園の運営を任されるまでに至った。伝兵衛は 1913 年、7 年ぶりに日本に一時帰国し、ひろと結婚。翌年には花嫁を連れてカナダに戻り、家族とともに果樹園業に励んだ。

翌 9 月 6 日、私たちはシャロンさんの案内で伝兵衛がかつて所有していた住宅を訪れた。オカナガン湖のビーチに車を停めて、付近を散歩した。初秋であったがビーチにはまだ人出があり、人びとは思い思いに日光浴や泳ぎを楽しんでいた。「子どもの頃、夏は午前中に果樹園の仕事を手伝った後、毎日このビーチに泳ぎに来たものよ。冬は湖が凍るので、学校の行き帰りにスケートをするのが楽しかったわ」と、シャロンさんが幼少期の思い出を語ってくれた。私たちは湖に架けられた栈橋を先端まで歩いていった。岸の方を振り返ると、丘の中腹に立派な邸宅が建っているのが目に入った。「あれが祖父(伝兵衛)の所有していた家です。これからあそこに行きますよ」と、シャロンさんが教えてくれた。

セキュリティゲートを通り抜けた先に、その邸宅が姿を現した。現在の所有者であるピーター&ヴァージニア・パルマ夫妻が温かく迎えてくださった。玄関先

に足を踏み入れると、真っ先に目に留まったのは、“Kobayashi House, Est 1889, Historical Site”と記されたプレートだった(図 1)。このプレートは、住宅がオカナガン溪谷の歴史や日系カナ



図 1: Kobayashi House のプレート
(筆者撮影 2024 年 9 月 6 日)

ダ移民史において重要な文化財であることを示している。この邸宅は、1889 年

II. 1. 教員エッセイ

に初代所有者によって建てられた。オカナガン湖を眼下に一望できる一等地に建つ瀟洒な建物で、地域の人びとからは敬意と羨望を込めて「丘の上の邸宅 (the House on the Hill)」と呼ばれていた (図 2)。それはまた、地元の名士たる地位を象徴する存在でもあった。1924 年、白人の果樹園経営者であるパーヴズ氏がビジネスを手放すことを決め、伝兵衛に 24 エーカーの果樹園とともに住宅の購入を持ちかけた。こうして伝兵衛は「丘の上の邸宅」の主となったのだ^{あるじ}った。



図 2 小林伝兵衛住宅 (1920 年代後半)
Courtesy of the Kobayashi Family

玄関脇を通り、裏庭に続くポーチには途中で木造の階段が設けられ、樹木や花々に囲まれた庭へと降りられるようになっている。この階段こそ、小林家の数多くの集合写真が撮影された象徴的な場所

である。実は、この階段は 1980 年代末に、小林家が住宅を手放した後の所有者によって一度撤去されている。しかし、その後パルマ夫妻がこの家を購入し、階段を再現したのだ。というのも、その階段は現所有者のヴァージニアさんにとっても特別な思い出のある場所だったからである。彼女は子どものころ、この邸宅が建つ丘の麓^{ふもと}に家族と暮らしており、憧れのこの住宅を何度か訪れたことがあった。また、彼女はオカナガン渓谷における日系移民の歴史や、小林伝兵衛という人物についてもよく理解していた。そのため、夫ピーターさんとこの住宅を購入した際、建築家から老朽化を理由に解体を提案されたものの、それに耳を貸すことはなかった。代わりに、可能な限り原型を保ちながらセンス良くリノベーションを施し、さらに西側にガレージを含む増築工事を行った。その結果、現在の住宅は小林家が所有した当時の約 2 倍の大きさとなり、まさに「丘の上の邸宅」と呼ぶにふさわしい威容を備えるまでに至っている。

家に入ると、シャロンさんが室内を案内してくれた。1950 年に伝兵衛の愛妻ひろが脳溢血^{いっけつ}で倒れると、彼は家事と看病を手伝ってもらうため、三女の幸代^{さちよ}と女婿^{じよせい}の小山作次、そして孫のシャロンさん一家三人を呼び寄せて同居を始めた。

シャロンさん自身も子ども時代の約 10 年間、この家で生活していたのだ。彼女は喜々として、「ここが両親のベッドルームだった」、「祖母はこの部屋で看病されていたの」、「ここが私の部屋だったのよ」と、1950 年代当時の思い出を交えつつ、各部屋を案内してくれた。一方、新たに増築された建物には、家族が集うための大きなダイニングテーブルを備えたキッチン・ダイニングスペースや、グランドピアノが置かれた玄関ホール、モダンな主寝室をはじめとする複数のベッドルームが設けられていた。また、ガレージには工具が壁一面に並べられており、狩猟を趣味とするヴァージニアさんの父親が仕留めた鹿やムースの頭部の剥製がいくつも飾られていた。

裏庭に出ると、伝兵衛が日本から持ち込んだ樹齢 100 年にもなる大銀杏^{いちよう}の木が、豊かな日陰を作っていた。かつて初夏に藤が咲き誇ったであろうあずまやも——藤はもう枯れてなくなってしまったが——、当時の姿をほぼそのままに留めている。広々とした裏庭の芝生を横切り敷地の反対側へ進むと、陶芸を趣味とするヴァージニアさんの工房があり、またその近くには芝刈り機を収納する古びた木造の小屋がひっそりと建っていた。シャロンさんの話によると、この小屋はかつてオカナガン溪谷に定住農夫としてやってきた日本人家族を一時的に住ませるための住居だったという。一大果樹園を築き上げた伝兵衛の立派な邸宅の敷地内に、掘っ立て小屋同然の簡素な住居^{たたず}が佇む——この対比は、まるでプランテーションの農園主と季節労働者の地位の違いを象徴するようであり、当時の厳然たる現実をまざまざと思い起こさせた。2 時間ほど滞在した後、パルマ夫妻の温かいもてなしに感謝しつつ、私たちは丘の上の邸宅を後にした。

ところで、1920 年代から 60 年代にかけてオカナガン溪谷で存在感を示した小林家だったが、今日この地に残る伝兵衛の子孫は、孫と大甥のわずかに二世帯のみである。リング園経営で成功した彼らであったが、農業を「正式な仕事」とはみなしていなかった。シャロンさんによれば、それはあくまで伝兵衛が成り行きでたどり着いた一時的な仕事とされ、医師や弁護士、エンジニアといった都市部での専門職こそが目指すべき職業であるという価値観が存在していた。そのため、伝兵衛の子孫たちは、子の代から孫の代にかけてオカナガン溪谷を離れてバンクーバーなど大都市へと移住していった。しかし、2000 年代に入ると、オカナガン溪谷は良質なワインの産地として大きく変貌を遂げる。かつてのリング園は

II. 1. 教員エッセイ

その多くがブドウ畑に転換され、100 を超えるワイナリーが誕生していまや一大産業を形成し、週末ともなるとワイナリー巡りを楽しむ観光客の姿が見られるようになった。もし小林家をはじめとする日系カナダ人たちがもう少し土地を手放すのを辛抱していたら——そう思うと少しばかり残念な思いがするが、これは余計なお世話というものだろう。

最終日の9月7日、私たち一行は伝兵衛をはじめ小林家やオカナガン溪谷の日系カナダ人の先人たちが眠る墓地を訪れた。オカナガン湖を見下ろす高台にある墓地で一休みしていると、心地よい風が通り抜けていった。私にとって、元同僚の誘いを受けて何気なく始めた研究だったが、BC 州内陸部に入植した日本人の研究にもう少しだけ携わるように、と導かれているような気がした。最後に、伝兵衛（俳号：芳翠^{ほうすい}）が果樹園の経営に勤しんでいた時期に詠んだ俳句を一句紹介して本稿を締めたい。

^{そうせつ}
霜雪の苦難のあとや薫る梅

芳翠

参考文献

小林伝兵衛『小林伝兵衛歌とその句』私家版，1963 年。

“Denbei and Hiro Kobayashi,” *A Century of Community*, Ed. Lake Country Museum and Archives, 2013, pp. 81-87.

Kobayashi, Allan Osamu. “The House on the Hill,” *A Century of Community*, Ed. Lake Country Museum and Archives, 2013, pp. 88-94.

Nakayama, Gordon Goichi. “Japanese Canadian Poet and Farmer Mr. Denbei Kobayashi,” *Annual Report of the Okanagan Historical Society*, Vol. 47, 1983, pp. 99-103.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 22K00331 の助成を受けている。

解釈の「協働」体－教室で英語の詩を読む

小口 一郎

はじめに

2024 年度の後期、筆者は「英語圏の文学 B」で、「文学における Romantic とは何か」と題した講義を展開している。以下では、この授業の成果の一部として、文学テキストの解釈が、クラスという「協働」体によって精緻化される事例を紹介してみたい。この講義のテーマ自体は伝統的だが、授業の方法は受講者の能動的な参加を主体とする、(筆者にとっては) やや実験的なものであった。そして彼らが作品を受容していく姿勢や解釈の内容は、期待以上に充実していた。その意味で、この授業の成果を読者の高覧に供することには意義があると考ええる。

授業の構成と展開

計 15 週にわたる授業の構成は、3 週分の講義と 12 週にわたる作品の読解である。作品の読解はグループ発表と教員のコメントにより行い、その後受講者全員がフィードバック用紙にコメントまたは質問を書き、提出、後日クラス全体で共有した。まず最初の 2 回の授業は、“Romantic” の概念についての講義である。西欧文化史の中に「ロマン主義」を位置づけることを趣旨とし、講義素材としては文学にこだわらず、音楽、思想、絵画、風景、造園、美学など、バラエティと感覚的アピールを重視した内容とした。この講義の後、ロマン主義の作品を上記のように学生との「協働」で鑑賞・読解しながら、途中の第 8 週にはやや抽象的な議論となる「ロマン主義の想像力」を、再度講義形式で解説している。読解対象としたのは以下の 6 作品である：William Wordsworth, “Lines written at a small distance from my house” (1798)、“Three years she grew” (1800)、Samuel Taylor Coleridge, *The Rime of the Ancient Mariner* (1798, 1834)、Percy Bysshe Shelley, “To a Sky-lark” (1820)、John Keats, “Ode on a Grecian Urn” (1820)、Mary Wollstonecraft Shelley, *Frankenstein; or, The Modern Prometheus* (1818, 1831)。ワーズワス、パーシー・シェリー、キーツの詩は、いかにもロマン主義らしい抒情詩、コールリッジの『老水夫のうた』は長

II. 1. 教員エッセイ

編物語詩（バラッド）、メアリー・シェリーの作品は、現代でも広く読まれている SF 的な小説である。それぞれの作品は、長さや内容に応じて、授業 1 回分から 3 回分を費やして議論した。

最初に読解の対象としたのは、ワーズワスの 2 つの抒情詩である。作品テキストに注釈をつけたハンドアウトを、事前にクラス全体の予習課題として配布し、1 作品に対して 4 人からなる 2 グループに、内容と解釈をプレゼンしてもらった。特に“Three years she grew”には、自然と人間について明示的なメッセージがこめられており、取り組みやすいと思われたが、グループ発表は、作品の本質に切り込むまであと一步といったところであった。発表、学生の反応、提出されたコメント・質問の内容から、やはり詩語としての英語表現が大きな障害になっていることが見て取れた。詩の内容を考える以前に、倒置、文法的破格、一文の長さ、詩語、古語などが、現代英語の運用と理解を学習してきた学生には酷であったようだ。

この教訓から、コールリッジの長詩については日本語訳を議論のベースとし、¹ 英語の原文は参考情報に留めることにした。結果としてグループ発表やコメント・質問は改善し、人間の無思慮な行動と自然への影響、自然と超自然など、詩の中心テーマに迫る考察を引き出すことができた。次節で詳しく報告するパーシー・シェリーの詩については、英語テキストを議論の対象とはしたが、筆者による詳しい注釈と試訳を添え、読解の一助とした。キーツについても同様である。また、メアリー・シェリーの小説は、作品のあらすじと特徴を紹介し、比較的原作に忠実な映画²を鑑賞することでアウトラインをつかみ、小説そのものの読解は発表グループのみに課すこととした。

パーシー・シェリー「ひばりに寄せて」

ワーズワスの抒情詩とコールリッジの長編バラッドで経験を積んだ後、学生の詩に対する受容的態度や理解力は明らかに向上した。パーシー・シェリーとキーツの抒情詩の解釈において、このことははっきりと見て取れた。両詩人の作品と

¹ 山中光義訳『老水夫の物語』（https://literaryballadarchive.com/wp-content/uploads/Coleridge_3_Ancient_Mariner_ja.pdf）を指定した。

² *Mary Shelley's Frankenstein*, directed by Kenneth Branagh (1994) を使用。

もに、高揚した精神を表現する ode というジャンルに属するものである。オードは感情あふれる呼びかけを基調とし、抒情詩の最高の達成ともされる詩形であり、読解や鑑賞にあたっては、読者の側にも相応の心構えを要する。しかしグループ発表や提出コメントはおおむね的確であり、オードの根幹に迫る卓見も見られた。以下、主にパーシー・シェリーの作品をめぐり、グループ発表、ディスカッション、提出されたコメントから、優れた解釈をいくつか見てみたい。³

「ヒバリに寄せて」は、日常世界を超えた聖なるレベルの存在を、空を翔るヒバリに託してうたう。鳥、飛翔、さえずり、空、などの自然事象を手がかりとしながら、象徴、比喩、逆説、アイロニー等を駆使し、超越的な領域を示唆することが試みられている。冒頭から、詩人の高揚した心は、ヒバリを自然界と超越界の境界にいるものとして呼びかける。この呼びかけは、鳥を通して鳥以上のものを、自然物を介して超自然を喚起する言語行為ではないのかという指摘が、複数の学生によってなされた。これは作品の中心テーマを把握しながら、存在するかどうか不明なものに、ことばによって存在を与えるという、オードに備わった「呼びかけ」(apostrophe) のレトリックの核心に迫った理解といってよいであろう。また、ヒバリの飛翔は、「目に映らない」「unseen」(20)、「見えなくなる」「Until we hardly see」(25) ものとして意識され、さらに視覚に代わって聴覚イメージで描かれる箇所もあるが、こうした描写は読む者の「想像力」をはたらかせ、ヒバリの象徴性を強く示唆する、とのコメントもあった。ここでは、明確な像や意味を結ばない「あいまいさ」が「想像力」を発動させ、高い次元の認識に至るというロマン主義の重要な要素が直観されている。抽象的な議論からではなく、具体的な作品テキストから想像力の本質に接近する考察へと進めたことは、学修成果として賞賛に値するだろう。

この詩が使う比喩の中で、特に視覚的理解が難しいものに、「思考の光の奥に隠れた詩人」「a Poet hidden / In the Light of thought」(36-37) がある。この光については、「詩人が創作した文学の世界を指す」という解釈が寄せられた。これは、創作世界が力強く描出され、実在性をもつと感じられるがゆえに、作品の

³ もともと研究授業として企画された講義ではないため、発言の使用許諾等とはっていない。よって、学生からのフィードバックは引用せず、趣旨を伝えるにとどめている。

背後にいるはずの創作者の姿が忘却されることを意味しているのであろう。この解釈は、ロマン主義芸術が目指した、日常世界を超える heterocosmos の構築を示唆していると言ってもいいかもしれない。またこの後に続く連では、孤独な乙女が奏でる音楽が部屋の外へとあふれ出る場面が描かれる。孤独な創造的精神が生み出す思いと情動が、光や旋律の姿をとって広がっていくことを示すこの2つの比喩の中に、詩や芸術の力は芸術家個人の内面にとどまらず、広く社会へと影響していくというメッセージを読み取った者もいた。詩の末尾の1行の「世界は耳を傾けるはずだ」“The world should listen” (105) は、まさにこの解釈と響き合う。

詩の後半では、ヒバリが象徴する聖なる領域の完全性に比べ、人間の住む現実世界がいかに不完全で悲しむべきものであるかが繰り返し話題となる。ヒバリのさえずりの完璧な美の前では、どれほど喜ばしいものであれ人間の歌など「空虚な自慢語り」“an empty vaunt” (69) にすぎない、というのだ。この話題が展開される中で、ヒバリの完全性を表すのに、あえて否定形が使われていることに着目したコメントがあった。パーシー・シェリーは、ヒバリの幸福なメロディーの源泉の1つは「苦痛を知らないこと」“ignorance of pain” (75) であると述べる。また、人間はどんな愛でも最後には飽きてしまう、「愛の哀しい倦厭」“love’s sad satiety” (80) を免れないが、ヒバリはそうした宿命を「決して知ることはなかった」“ne’er knew” (80) とも言う。この詩は、ヒバリの超越性を、ほぼ一貫してあふれ出る豊かさのイメージで描いてきた。しかしコメントの指摘によれば、この部分は、ヒバリの聖なる完全性に「無知」が内在していることが、つまり「欠損」こそが、その聖性を保証する原理の1つであることを、一種のマイルドなパラドックスによって示唆しているという。この解釈は、詩の終わり近くで展開された、人間は不完全だからこそヒバリの超越性にあこがれ、天上世界に近づくことができる、というパラドックスに満ちた主張とも響き合う。完全性の成立には欠損が不可避であるとは、作品が自らの内在的原理によって崩壊していくというポストモダン的な読みであるとともに、結論部の逆説的ペーソスへと至る詩の展開が、意識的なレトリック構造によって準備されていたことを明確に指摘した、優れた読みであると言えるだろう。

受講者によるこうした一連の解釈は、パーシー・シェリーの作品の核心に迫る

ことを可能にしたとともに、次の課題として取り上げたキーツの「ギリシャの壺のオード」の読解にも有効なフレームワークを提供してくれた。いにしえの塑造作品に彫刻された幸福の風景は、悠久の理想的次元を実現するが、その次元は、生きている人間の参入を容易にはゆるさない「冷たき牧歌」“Cold Pastoral” (45)の世界である。そうした哀しいアイロニーを前に、人は一体何をすべきなのかキーツによるこのメッセージを、パーシー・シェリーの創造的解釈を試みた者はより深く感じたに違いない。

まとめ

あわただしく時が過ぎ、自らを省みるいとまもなく日常に埋没せざるを得ない 21 世紀にあって、短く凝縮した言語作品を時間をかけて読み解くことは、あまりはやらない営みなのかもしれない。外国語による詩となれば鑑賞のハードルはさらに高く、その意義を肌で感じることは難しい。その意味で、2024 年度後期の「英語圏の文学 B」のようなオーソドックスな講義を設定することには、いくばくかの不安があった。にもかかわらず今回の取り組みでは、受講者諸君が予想を上まわる成果をあげてくれたと感じている。もちろん、学生が消化できない、独りよがりの内容を並べることは厳に慎まなければならないが、文学講義の可能性の手応えは確かにあった。試行錯誤しつつ、さらにチャレンジを続けたい。

ホセ・ムヒカ元ウルグアイ大統領の言葉と思想、これからの社会

宮腰 宏美

2024年度より担当している「国際協力」の授業では、開発途上国の状況を、ワークショップを取り入れながら学ぶとともに、JICA（国際協力機構）の担当者やNPOの方々に特別講義を頂くなどのアクティブラーニング形式を取り入れた授業を展開した。講義では、2012年6月20日から22日の間、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された、国連の「持続可能な開発会議（RIO+20）」における元ウルグアイ大統領であるホセ・ムヒカ氏の演説を取り上げる回もあった。

ムヒカ氏と言えば、大統領公邸ではなく、小さな平屋に住んでいたことや、1987年製の古いビートルを使い続けていること、大統領の月給29万ウルグアイペソ（およそ131万円：2015年6月）のうち、23万ウルグアイペソを慈善事業と所属する政党に寄付し、残りの6万ペソを貧しい子どもたちを受け入れる農業学校を創る為に貯金に充てていたことや、生活費は妻が稼ぐ1,000ドル程度で毎月生活していることで有名である（佐藤，2015，pp.18-20）¹。その質素な生活ぶりから「世界で一番貧しい大統領」として知られている。

ムヒカ氏は、自身の生活スタイルにかかる信念について、「私たち政治家は、世の中の大半の国民と同じ程度の暮らしを送るべきなんだ。一部の特権階層のような暮らしをし、自らの利益のために政治を動かし始めたら、人々は政治への信頼を失ってしまう」と述べていたと、萩（2016，p.43）²は、述べている。

さて、RIO+20での演説は、ムヒカ氏が2010年に大統領に就任した2年後に国連の会議で行われた。このRIO+20は、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された「国連環境開発会議」において採択された「環境と開発に関するリオ宣言」と、それを実現するための行動計画である「アジェンダ21」、そしてその際に採択された「気候変動枠組条約や生物多様性条約」から20周年のフォローアップ会合として開催された（外務省，2012）³。

¹ 平佐藤美由紀（2015）『世界でもっとも貧しい大統領 ホセ・ムヒカの言葉』双葉社

² 萩一品（2016）『ホセ・ムヒカ 日本人につたえたい本当のメッセージ』朝日新聞出版

³ 外務省（2012）「国連持続可能な開発会議（リオ+20）」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/>

RIO+20 では、「①持続可能な開発および貧困撲滅の文脈におけるグリーン経済、および②持続可能な開発のための制度的枠組みをテーマに話し合われ、97 名の首脳のほか、世界中から多数の閣僚、国際機関、企業、市民社会などの関係者約 3 万人が参加」したと報告されている (外務省, 2013, p.90)⁴。

RIO+20 における演説でムヒカ氏は、

「インドの全家庭が、ドイツ人の各家庭が持っているのと同じ数の自動車を持つようになったら、インドだけでなくこの地球はどうなるでしょうか。たとえば、私たちが呼吸できる酸素は、どれほど残るのでしょうか。もっとはっきり言えば、西洋社会の最も豊かな人々が享受している消費と浪費にまみれたスタイルを、世界の 70 億、80 億の人々にももたらせるだけの資源が、たった今この地球のどこにあるのでしょうか (国際情勢研究会, 2016, p.12)⁵。」

と、主張している。また、2012 年にムヒカ氏が来日した際に、東京外国語大学で行った講演においては、

「いまや経済は、哲学や倫理から分離してしまい、世界は市場経済に支配されています。誤解しないでください。市場を否定しているわけではないのです。科学が進歩したのも、芸術が花開いたのも、市場があったからです。私が問題にしているのは、過剰であることです。いまの世界は行き過ぎていると言っているのです (くさば, 2017, pp.63-64)⁶。」

と、指摘している。上述のどちらも過剰な消費社会や市場経済について苦言を呈

gaiko/kankyo/rio_p20/gaiyo.html(2024/12/04 最終閲覧)

⁴ 外務省 (2013) 「国際協力トピックス 持続可能な開発とリオ + 20」『2012 年版 政府開発援助 (ODA) 白書』https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hakusyo/12_hakusho_pdf/pdfs/12_k03.pdf(2024/12/04 最終閲覧)

⁵ 国際情勢研究会 (2016) 『世界で一番貧しい大統領と呼ばれた ホセ・ムヒカー心を揺さぶるスピーチ』ゴマブックス

⁶ くさばよしみ (2017) 『ホセ・ムヒカと過ごした 8 日間: 世界でいちばん貧しい大統領が見た日本』汐文社

II. 1. 教員エッセイ

しているが、その原因は、政治的な責任であると指摘し、RIO+20 の演説では、「我々の前に立つ巨大な危機問題は環境危機ではありません。政治的な危機問題なのです。現代に至っては、人類が作ったこの大きな勢力をコントロールしきれいていません。逆に、人類がこの消費社会にコントロールされているのです（佐藤，2015, p.6)⁷。」と説明している。

12 年前に、どれ程の人々が現在の異常気象や温暖化を予想していただろうか、今や台風やハリケーンが猛威を振るい、世界各地での洪水の発生、海水温の上昇、乾燥地帯に流れる川は、以前にも増して干上がっている。そして、この状況下に於いても尚、世界各地で戦争や紛争は絶えない。

ムヒカ氏は、これら環境危機は、政治的な問題であり、それらは過剰な消費社会により引き起こされていると述べているが、我々日本人も過剰な消費社会に支配されてはいないだろうか。

ムヒカ氏が 2016 年に来日した際に、日本について、「日本の良い日本の文化というのが、西洋化された消費文化によって埋葬されてしまって、今は見えなくなってしまった。経済を成長させていくことに躍起になり、かつての良さを見失っているようにも見える（佐藤，2016, p.17)⁸。」と感想を述べ、また、「私が日本についてもっている印象は、技術がとても進んだ社会であるということです。そこで私は聞いてみたい。みなさんは本当に幸せなんですか（佐藤，2016, p.21)⁹。」と、疑問を投げかけている。近代化を成し遂げ、消費社会の一員となった一方で、そこに生きる日本人は、真の意味で幸せであると感じているのかどうかを、ムヒカ氏は気に掛けている。日本での池上彰氏との対談においては、「モノは私たちを幸せにしてくれません。幸せは男とか女とか、親とか子どもとか友達とか、命あるものしかくれないのです。幸せにしてくれるものは生きているもの（池上，2016, p.35)¹⁰。」と説明し、消費社会への依存が幸せをもたらしてくれる訳ではないと説いている。

ムヒカ氏は、幸せについてこう述べる。「隣の人のことをよく知り、地元の人々

⁷ 佐藤美由紀 (2015)『世界でもっとも貧しい大統領 ホセ・ムヒカの言葉』双葉社

⁸ 佐藤美由紀 (2016)『世界でもっとも貧しい大統領ホセ・ムヒカ 日本人へ贈る言葉』双葉社
⁹ 前掲 8

¹⁰ 池上彰 (2016)『池上彰とホセ・ムヒカが語り合った ほんとうの豊かさって何ですか?』角川書店

とよく話し合うこと。会話に時間をかけることだとも思う (佐藤, 2016, p.40)¹¹。」

筆者が青年海外協力隊員として、ホンジュラス国へ赴任していた時に、最も好きだった時間は、住民と語り合う時間であった。赴任先のバジェ県ナカオメ市では、道に椅子を出して座って近所の人と話したり、夕方になると夕涼みをしながら、やはり道端に椅子を並べ近所の人々と話す文化があり、その文化が心地良かったことを覚えている。恐らく、日本にも同じような文化はあったに違いない。縁側で近所の人々と話したり、公園に近隣に暮らす子どもや大人が集う牧歌的な光景は、以前は日本のどこの風景にも存在した。

ムヒカ氏が初来日した翌日の記者会見の中で、多くの日本人がムヒカ氏に興味をもつ理由について、ムヒカ氏は、

「私がさまざまな場で話してきた考え方は、もしかしたら日本で昔から引き継がれてきた文化と通じるものがあるのではないのでしょうか。(中略)つまり、私のメッセージが注目されているというより、私のメッセージの底流にある日本の文化と類似性が、日本の人々の心に訴えるのではないかと思うんですけどね (くさば, 2017, p.43)¹²。」

と、回答している。

ムヒカ氏の述べる「日本文化との類似性」について、『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』の本の画家であり、僧侶でもある中川学氏がムヒカ氏と対談を行った際に、「物質の快樂ばかりを追い求めるのは間違っていると、そうしたお話しが仏教の経典にある「小欲知足」という思想に共通していて、私は共感したのです。「小欲知足」は、「足るを知る」という言葉として理解されています。」と、中川氏は述べる (くさば, 2017, p.49)¹³。

池上氏もムヒカ氏との対談の際に、前述の「足るを知る」について取り上げ、またその際に、ムヒカ氏もストア哲学のセネカ氏の言葉に触れ「貧しい者とは、少ししか持っていない人間のことでなく、もっと多くを渴望する人のことを言

¹¹ 前掲 8

¹² 前掲 6

¹³ 前掲 6

う(池上, 2016)¹⁴」、根底に在る哲学的共通性について議論を交わしている。

萩(2016, pp.166-167)¹⁵は、前記の件について、中野孝次氏が著した『清貧の思想』に於いて、

『『富んで慥貪(※欲張ること)である者を軽蔑し、貧しくとも清く美しく生きる者を愛する気風は、つい先ごろまでわれわれの国において一般的でした』という中野さんの指摘は、バブル経済にどっぷりとつかり、大量生産・大量消費の文明に浮かれ気分だった当時の日本人に、しっかりしりと迫るものでした。しかも、清貧を尊ぶ気風は一部の文人に限られた伝統ではなく、『ふつうの生活者の中にも根強くひろく行き渡っていた』というのです。『それこそ日本の最も誇りうる文化』だ』

と、日本人が伝統的にもつ思想について説明した上で、仏教書である『往生要集』にも触れ、千年も前から日本人はこのような思想をもっていると述べる。

日本には、元々「もったいない」という思想もある。この「もったいない」においては、女性として2004年に初めてのノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイ氏が、2005年に日本の「MOTTAINAI」という言葉に出会い感動し、世界中の環境を守る世界の共通語にしようと世界中でMOTTAINAIキャンペーンをスタートさせている(MOTTAINAI, 2024)¹⁶。

このように、物を大切にし、慎ましく生きる思想が根付いている日本人は、大量消費社会を原因とした地球温暖化に直面する人類に対し、何らかの提言を行うことが可能であると考えられる。

ムヒカ氏は、2018年にリリースされた映画の中で、「私のような者は、できることを模索している。資本主義では解決しない。別の道を探さねば」と述べる(クストリッツァ, 2018, 58:34-44)¹⁷。ムヒカ氏は、これまでの資本主義に代わる新た

¹⁴ 前掲 10

¹⁵ 前掲 2

¹⁶ MOTTAINAI(2024)「MOTTAINAIについて」

[https://www.mottainai.info/jp/about/\(2024/12/04最終閲覧\)](https://www.mottainai.info/jp/about/(2024/12/04最終閲覧))

¹⁷ エミール・クストリッツァ(2018)『世界でいちばん貧しい大統領 愛と闘争の男、ホセ・ムヒカ』ニューセレクト

な制度が構築されるべきであると述べ、別の道を模索し続けている。

資本主義の代わりとなる「別の道」について、ドイツ人の哲学者であるマルクス・ガブリエル氏は、現在の資本主義に代わる倫理資本主義を説いている (ガブリエル, 2024)¹⁸。倫理資本主義とは、資本主義に道徳を結びつけることにより、資本主義を実行しながら、道徳的進歩をも生み出すことが可能であるとガブリエル (POL, 2024)¹⁹ は、述べる。人間は、生存し繁栄するために環境を保護し、生態系をよりよくする必要があるという道徳的事実があり、その実行が人間が豊かに生きられることに繋がるとした際、それらを経済的な手段と結びつけたとしても、持続可能な利益を生むことができ、且つ道徳的進歩も可能である (東洋経済, 2024)²⁰。経済学で有名なゲーム理論では悪役が常に勝つとされていた際に、グローバルな領域における悪役問題の解決策は、国民国家であり、保護主義に陥ることなく、善い行いを通して経済を守る政策を運用することができると、ガブリエル (東洋経済, 2024)²¹ は、説く。

「格差社会」という言葉が、近年、日本国内外で広く耳にされるようになった。行き詰まりを見せる資本主義社会の中で、日本人の道徳性を活用することにより、新たな方向性を見出す可能性やその必要性があるのではないだろうか。未来を担う学生の皆様には、現在の日本及び世界が抱える問題を十分に理解した上で、今後、進むべき道や新たな社会の在り方について深く考察して頂きたいと願う。

¹⁸ マルクス・ガブリエル (2024)『倫理資本主義の時代』早川書房

¹⁹ POL「世界注目の哲学者「AI の内部は回路と電流だけ」…全知全能 AI は「知能がなく思考もしていない」と断言する理由」<https://president.jp/articles/-/87946>(2024/12/04 最終閲覧)

²⁰ 東洋経済「倫理資本主義の下でビジネスは成り立つのか？ エシックス (倫理) と資本主義を考える (2)」<https://toyokeizai.net/articles/-/835013?page=5>(2024/12/04 最終閲覧)

²¹ 前掲 20

戸田の造艦碑

若松 大祐

2024年4月14日(日)～15日(月)に沼津市戸田を訪ねた。造艦碑を見るためである。4月14日(日)には、ちょうど第16回戸田深海魚まつりが開催されていた。また、重要文化財の松城家住宅(擬洋風建築)が2022年11月にリニューアルされ、公開されていた。

1855年、戸田村ではブチャーチンのために、日露両国の人々が協力して洋式船を建造した。完成したヘダ号は、日本人にとって最初の洋式船であった。戸田での造船や造艦碑については、すでにさまざまな書籍で解説されている。特に『ヘダ号の建造：幕末における』¹や『戸田村史』²や『戸田村の石造物』³が有用である。

私がこのたび実見したのは、造艦碑である。1855年のヘダ号の建造を振り返り、1923年に建てられた石碑である。碑文は漢文で書いてあり、下記の通りとなっている。

造艦碑

嗚呼是露國軍艦建造之所也初露艦知耶那號游弋我近海投錨於伊豆下田港安政元年十一月東海地大震海嘯為起艦體破損焉水師提督布喳珍欲回航之戸田港以加修理而風浪復起艦將顛覆下田奉行水野筑後守發駿豆漁船數百艘救之而力不及逐沈沒於駿河灣於是移提督及皇族亞歷山須理計知於戸田寶泉寺假設屋舍收容部下五百餘人幕府更聽提督所請命船匠數百人新造軍艦一隻舉里人緒明菊三郎上田寅吉等為之主幹勘定奉行川路聖謨大目付岩瀬忠震等交監視其工事至明年三月竣工焉命名曰君澤取於當時之郡名蓋洋艦建造之濫觴也提督已下大喜北航而還三年露國返還之艦于我稱我造船術厚致禮尋幕府建造君澤形六隻於此地自是造船業大興明治中興上田氏為政

¹ 戸田村文化財専門委員会、戸田村文化財小委員会(編)『ヘダ号の建造：幕末における』(戸田村誌叢書)(静岡県戸田村：戸田村教育委員会、1979年12月)。

² 戸田村史編さん委員会、沼津市教育委員会(編)『戸田村史』(沼津：沼津市、2014年3月)。

³ 戸田村教育委員会、戸田村文化財保護審議会(編)『戸田村の石造物』(静岡県戸田村：編者、1994年)。

府所徴為横須賀造船所工長緒明氏則設造船所於東京府品川旁營運輪業迨外征兩役
起舉其船數百艘供兵員及糧食運送之用其益國家也大矣頃者村民胥議欲刻其事於石
以傳後昆予叙其梗槩并作銘曰

老松鬱鬱 維戶田郷 港灣波靜 碇泊最良 習俗淳朴
民有義方 救援溺者 千古輝光 建造巨艦 萬世流芳
大正十二年三月十日

静岡縣田方郡長從五位勲六等園田竹熊撰并書
静岡縣知事從四位勲三等道岡秀彦篆額

碑文は、碑記と碑銘に分かれている。つまり、初めに事件のいきさつを述べ、最後に漢詩（四言詩）を添えて締めくくっている。造艦碑の碑文がどのような特徴を持つのかについては、他の碑文と比べればよいだろう。例えば、本山桂川『旅と郷土の文学碑改訂版』⁴は日本における石碑を網羅した優れた書籍である。

しかしながら、私が気になるのは、造艦碑が 1923 年に建てられた理由である。実は明治 24 年（西暦 1891 年）4 月下旬に石碑の設置計画があったものの、大津事件（1891 年 5 月 11 日）の起こったために、石碑設置は中止になったという（「露艦遭難戸田造船紀念碑建設之旨趣」明治 24 年 4 月 25 日）。そもそも 1891 年という時代に何があったのか。さらには、1923 年という時代にいかなる必要があって、戸田で人々は石碑を建てたのか。

〔謝辞〕

戸田での調査に際し、水口淳氏と堤飛鳥氏から戸田の造船についてご教示いただきました。改めてお礼申し上げます。

⁴ 本山桂川『旅と郷土の文学碑：全日本文学碑大成』〔改訂版〕（東京：新樹社、1976 年）。

2. 江藤秀一外国語学部特任教授・学長の最終講義

江藤秀一外国語学部特任教授・学長の最終講義

江藤秀一教授は常葉大学の学長であるとともに、外国語学部に所属する教員である。イギリス 18 世紀文学研究の第一人者として広く知られている。その豊かな知見と経験から語られる講義は、常葉大学の同僚や学生を大きく啓発するものとなった。

このたびの最終講義は、常葉大学学長室と外国語学部が共催した。大学ホームページなどを使って学内外からの参加を広く呼びかけたところ、本学教職員、退職教員、在学生、卒業生の約 200 名の参加があった。とりわけ卒業生には、江藤教授が常葉高校の英語教諭だったときの生徒が含まれる。(若松大祐)

日 時：2025 年 1 月 16 日 (木) 15:00 ～ 16:30

会 場：草薙キャンパス A 棟 3 階 A201 教室

講 師：江藤 秀一 (学長、外国語学部英米語学科特任教授)

演 題：英語とともに歩んだ道

ーイギリス文学・文化を通して得た教訓ー

講義概要：

英語とともに歩んだ道

ーイギリス文学・文化を通して得た教訓ー

江藤秀一

1. 英語とともに 50 年

大学入学前

私の出身は福岡県の真ん中あたりにある嘉麻市という旧炭鉱町である。私の英語への興味は中学高校時代のビートルズの “I Wanna Hold Your Hands” に始まった。wanna は何だろうか、「ホールド・ユア」が「ホールジュア」になるん

だというものだった。もっと英語を知って、歌詞の意味もわかるようになるというと思った。そこで、地元の大学の文学部を受験したが、不合格となった。

中学 3 年生のときに父親が炭鉱事故で亡くなっており、予備校へ行く金銭的なゆとりはなかった。そんなとき新聞奨学生 of 広告を目にし、東京品川の新聞販売店に住み込んで新聞配達をした。予備校の費用は新聞販売店が出してくれた。そのころ、高校時代の恩師が、教員を止めて上京し、私と同じ新聞屋さんに住み込んで一緒に新聞配達をすることになった。先生はとても勉強家で、夜は先生の隣で受験勉強をした。このとき、生涯にわたって勉強する姿勢を教わった。奨学金も日本育英会と野村学芸財団からいただいた。

恩師の玉井東助先生とドクター・ジョンソンとの出会い

1970 年に明治学院大学英文学科へ入学し、3 年次と 4 年次の玉井東助ゼミで 18 世紀の英文学を学んだ。18 世紀を代表するドクター・ジョンソンの伝記文学



ドクター・ジョンソン像
(イギリス中西部リッチフィールド)

を教わり、卒業論文のテーマとした。学部時代からずっとジョンソン研究を続けてきたおかげで、ジョンソン記念館の理事も務めることになり、2009 年にはジョンソン生誕 300 年を記念して、『英国文化の巨人 サミュエル・ジョンソン』(港の人) という日本人読者向けの啓発書を研究者仲間と出すことができた。

常葉高校に就職

1974 年 3 月に大学を卒業し、4 月に常葉高校に就職した。当時の常葉高校には、1 学年 500 人ほどの生徒がいたし、教職員も 70 名ほどがいた。常葉では添削のノウハウを学ぶべく「常葉高校江藤秀子」の名で通信添削テストを受けたが、満足の成績が得られなかった。これではだめだと思い、明治学院大学院を受験し合格した。当時の校長であった山崎武校長のあと押しがあり、木宮和彦前理事長は 1 日半の研修時間を与えてくれた。山崎校長には教師の姿勢のようなものも教

わった。常葉高校では英語部の顧問を務め、登山部の顧問も務め、北アルプスへ生徒を引率したこともある。

常葉学園短期大学へ異動

1981年、第2次ベビーブームの影響で常葉学園短期大学のクラスを増やすこととなり、菊川に校舎のあった常葉学園短期大学英文科へ異動した。英文科で英作文や英文講読を担当し、教務課長補佐や教務課長を兼務した。英文科では小田久夫学科長にお願いし、海外研修をハワイからアメリカ本土へ変更し、さらに充実した研修を始めることができた。

短大時代の一歩の思い出は、受験産業で成長しはじめていた福武書店に、将来の学校経営の在り方について話を伺いに行く和彦先生のお供をし、本社のある岡山へ行ったことである。その折に、和彦先生は高校中心から大学中心への経営の転換について話してくださった。その後、常葉は大学を次々と開設し、和彦先生のお話しどおりになっていき、和彦先生の先見の明と実行力のすばらしさに感銘を受けた。今の常葉があるのは、まさにこの和彦先生のお力のお陰だと思う。

武蔵野美術大学へ

1987年、知人からの誘いがあり、武蔵野美術大学に移った。移って3年後の1990年には、初の出版となる『18世紀ロンドンの日常生活』（研究社出版）という翻訳を恩師の玉井東助先生と共訳で出すことができた。また、文部科学省検定教科書の *Legend* シリーズなど、20年近く検定教科書の編纂に携わった。さらに、出版社アルクが刊行していた *Active English* などの月間誌に短い英文の解説などを連載し、英語教育に携わりながら、さまざまに英語にかかわってきた。

武蔵美時代の1995年4月から1年間、ケンブリッジ大学にて在外研修の機会に恵まれた。主に18世紀英文学に関する講義とゼミに参加し、さまざまな行事や祭事を見て回り、文学作品に出てくる行事等を肌身で感じ、作品の理解や解釈が深まった。また、ケンブリッジで知り合った他大学の先生方と『イギリス文化・文学の誘い』（開拓社）を2000年に出すことができた。

筑波大学から常葉大学へ

武蔵野美術大学で 13 年勤めた後、筑波大学へ移った。筑波大学では日本語・日本文化学類で外国文学や異文化に関する授業科目を担当し、大学院では、現代語・現代文化専攻で 18 世紀の英文学・文化の研究と教育を行った。また、学長補佐や学類長なども務めた。ジョンソンと 18 世紀スコットランドの研究で博士(文学)の学位も得た。

2016 年 3 月に筑波大学を退職し、4 月に常葉大学へ戻ってきて、現在に至っている。一度、退職した私を気持ちよく採用していただき、また学長という得難い経験を与えてくださった木宮健二理事長には大変に感謝申し上げている。学長職は勝手気ままな働き方をしていた私に活を入れてくれた。

2. 文学作品紹介

最終講義では、次の 3 つの文学作品を取り上げた。

(1) ガリバー旅行記

『ガリバー旅行記』は 18 世紀英文学のなかでも風刺文学を代表する作品で、「リリパット(小人の国)への航海」、「ブロブディンナグ(巨人の国)への航海」、「ラピュータ、バルニバービ、ラグナグ、グラブダブドリップおよび日本への航海」、「フウイヌム(馬の国)への航海」の 4 部からなっている。

第 1 部のリリパット国では、リリパットの国にイギリスの国政や外交問題や宮廷の慣習を重ね合わせることによって、また第 2 部の巨人の国では、巨人の国の国王の口を借りて、イギリスの国政や国民を鋭く批判する。第 3 部では、ガリバーは空飛ぶ島のラピュータなど、いくつかの国を訪れるが、その中にストラルブラ

グという不死身の人間がいる国を訪問する。長生きを望むガリバーだが、90 歳になると、歯は欠け、髪は抜け、味の良し悪しなどもわからなくなり、ものの名前も親しい友人の名前も忘れてしまうという、高齢化社会の課題にもつながっていくような内容となっている。



最後の第4部では、フウイヌムという理性的な馬が人間そっくりの生き物のヤフーを支配するという話で、ガリバーは悪が存在しない馬の国で一生を終えたいと願うものの、その願いかなわず、帰国し、2頭の馬を飼って、馬との会話をを楽しむ生活を送ることになる。こうして、『ガリバー旅行記』は児童文学のジャンルを超えて、人間や人間社会への風刺たっぷりの大人の読み物となっていく。

(2) 動物農場

20世紀の作家ジョージ・オーウェルの『動物農場』も風刺文学の傑作である。この物語では、動物たちが人間の農場主を追い出し、豚のスノーボールとナポレオンをリーダーとして、すべての動物は平等であるという理想的な農場運営を目指す。ところが、いつのまにか豚が特権階級となっていき、おまけにリーダー格のスノーボールとナポレオンはことごとく対立し、ついに風車建設を巡ってスノーボールは追放されてしまう。独裁政治を始めたナポレオンは反対するものを粛清し、怪訝な顔をする動物たちがいれば、広報担当のスクイーラーが「ジョーンズがもどってくるのだぞ！それでいいのか」と詭弁を弄した演説を繰り返して動物たちを煙に巻く。やがてナポレオンは禁じられている人間との交渉を始め、豚たちと人間は仲良くするかに見えたが、トランプ遊びが元で喧嘩が始まる。動物たちがその様子を見ていると、どっちが人間でどっちが豚かわからなくなってしまう。

この寓話はロシア革命をモデルとし、オーウェルは『動物農場』を通して、スターリン体制下の共産主義、独裁主義を痛烈に風刺している。このように悪夢のような世界を描いて現実の世界を批判するディストピア文学の世界には、管理や監視が伴う。『ガリバー旅行記』の馬の国はユートピアの国のようではあるものの、



理性が強調され、さまざま面で管理されている社会である点では、ディストピア社会でもある。結局はユートピア文学とディストピア文学は、多くの研究者が指摘するように、表裏一体と言える。『動物農場』の寓話を読むと、人間とはちっとも賢くないんだと思う。

(3) ロビンソン・クルーソー

『ロビンソン・クルーソー』は『ガリバー旅行記』と同じく、18 世紀英文学の作品である。船乗りのロビンソンは奴隷貿易の航海中に難破し、無人島に漂着する。

物語の前半はロビンソンが神のご加護を信じ、創意工夫をし、勤勉と不屈の精神で生き延びる話であるが、モノづくりの歴史でもある。着々と生活を整え、孤独な中にも運命を受け入れて前向きに生きるロビンソンは、人食い人種の宴会から逃げてくる一人の青年を助ける。金曜日に見つけたのでフライデーと名づけ、身振り手振りで意思疎通をし、言葉を教える。最初に教えた英語は“master”（主人）で、ロビンソンはフライデーに、それが自分の名前であると教える。ロビンソンは嘘をついているわけだが、巧みな言葉遣いである。“I am Master.”は「私はマスター」であり「主人」でもあるわけで、従わざるを得ないことになる。Friday に 2 つの意味をもたせた“Only Robinson Crusoe could get everything done by Friday.”も、ロビンソンの物語を知っていないと面白さがわからない。

ロビンソンは、さらにスペイン人とフライデーの父を救い、無人島は 4 人の住む島になる。こうしてロビンソンは、自分が国王であり立法者になったような気分になる。また、無人島には所有者がいるかもしれないのに、その島が自分の所有物であると思う。

デフォーは積極的に海外で資産を増やすロビンソンをこの物語で描くが、『イギリス経済の構図』というエッセイでも、植民地の未開人を文明化するのはイギリス人の務めであるという趣旨のことを述べている。この「帝国の使命」を論じるエッセイを読んで、ロビンソンの、自分は君主であり立法者であるという趣旨の一節を読むと、『ロビンソン・クルーソー』が単なる冒険物語ではなく、イギリス帝国主義を支持するプロパガンダの書としても解釈することができる。

3. ドクター・ジョンソンとスコットランドの変化

(1) ジョンソンの平和主義

デフォーと違って、ジョンソンはフランスとの植民地戦争について「アメリカを巡るフランス人と我々の間の植民地争いは、旅人から奪い取った品物を二人の

盗人が取り合っているのと同じことに過ぎない」(‘Political Writings’, p. 188. 拙訳)と述べ、植民地戦争には反対の立場をとる。また、「商人と商業の国は金以外に友情関係はない。共通の利益が危険にさらされると同盟は続かない」(‘Political Writings’, p. 143. 拙訳)とも述べ、海外貿易に依存することにも反対する。18世紀英文学の著名な研究者であるドナルド・グリーンによれば、当時のイギリスは外国との貿易に頼らずに経済的に独立した小国のままか、それとも貿易や帝国を拡大していくのかの選択に迫られていたという(“Political Writings”, p. 117)。今日の日本は食料品や衣料品をはじめ、様々な物資の海外への依存度は高い。しかし、ジョンソンの言うように、共通の利益が失われて取引を停止されたらどうなるであろうか。目下の日本は円安で物価高に苦しんでいるし、昨年はコメ不足もあった。地方に行けば、過疎化で、土地はたくさんある。人口も減少する。このような状況の中で、日本は国際化にどう向き合うのか。今日の日本の状況は国の方向を定めようともがき苦しむ300年前のイギリスの状況を彷彿とさせ、18世紀英文学の研究は、今日の日本の課題につながっていく。

(2) ジョンソンの日記とジャコバイトの乱

ジョンソンは1773年にスコットランド西方諸島を旅し、旅行記を記した。その日記にスコットランドのハイランド地方や西方諸島では英語が使われてなくて、通訳が必要との記述があった。それに疑問をもったのが私のスコットランド研究の始まりだった。

そこで、ジョンソンの旅行記を手にも、3年間にわたって現地調査と文献研究を行った。その結果、当地には氏族長を中心として、牧畜などで生計を立てる独自の社会と文化があった。氏族長は裁判権も持った絶対的な権力者であった。それが、名誉革命で王位を追われたジェイムズ2世とその王家を指示する人達が起こしたジャコバイトの乱で崩壊し始める。

特に1745年のジャコバイトの乱では、ジェイムズ2世の孫のボニー・プリンス・チャーリー率いる軍は順調に行軍を続け、ロンドンまで残す所127マイル(200キロと少し)ほどのダービーに達した。チャールズ軍のあまりの勢いに、ロンドンの王室は逃亡の準備までしたという。しかし、イングランドに入ってから募兵は思いどおりにはいかず、食料調達の課題や指揮官同士の衝突もあり、チャー

ルズ軍は戦わずしてスコットランドへ引き返すこととなった。この決定にハイランドの兵たちは落胆し、戦意は失せてしまい、一方の政府軍は勢いついてあとを追いついに、カロデンというインバネス近郊の平原で、イギリス政府軍とチャールズ軍の戦いが起こる。勝負はチャールズ軍の完敗となる。

イギリス政府は内乱の元凶が氏族制度であるとして、裁判権のはく奪、民族衣装着用禁止、民族楽器（バグパイプ）禁止、ゲール語禁止といった氏族制度を解体し始める。こうして、ハイランドや西方諸島は英語化されていくこととなった。一方、裁判権を奪われ権威を失った氏族長たちは地代を上げ始めたが、その値上についていけない人たちは、新しい生活を求めてアメリカへ渡っていった。

ハイランドから移民した人たちを待っていたのは、アメリカ独立戦争であった。ハイランドから移民した人たちの多くは独立側ではなく、イギリス政府側につくこととなった。ジャコバイトの乱でチャールズの逃走を助けたフローラ・マクドナルドの夫アランも同じくイギリス政府側につくが、アメリカ独立軍に敗れ、アランは捕虜になってしまう。その後、釈放されて、フローラを伴ってカナダのノヴァ・スコシアへ移り住むが、フローラは慣れない土地での生活と心痛が重なって、体調を崩し、ふるさとのスコットランドに戻り亡くなる。このようにジャコバイトの乱で敗れ、新天地を求めてアメリカへ渡ったスコットランド人の中には、フローラのような不運な目にあった人がたくさんいたことを覚えておきたい。

（3）ハイランド・クリアランス

ジャコバイトの乱後のハイランドでは道路事情や食糧事情が少しずつよくなっていく。アメリカ独立戦争に絡むフランスとの戦争や人口増加によって牛肉の需要が高まり、牛の値段があがるし、漁業も盛んになり、西海岸には漁業を中心とした町が造られていった。昆布の一種のケルプを燃やしてガラスの原料を作るケルプ産業が栄える。ところが、ヨーロッパで化学的にガラスの原料を作ることができるようになり、ケルプ産業が崩壊する。また、戦後不況で畜牛の値段が急激に下がり、ニシンの不漁が続く。ハイランドの地主たちはこの状況を打開するために、牛の放牧に代えて羊を飼うことを考えた。中でも黒い顔をした羊は丈夫で、飼育しやすく、大量に飼うことができた。しかし、牧草の茂る広大な土地が必要となり、地主たちは、山や谷間に住んでいた多くの人たちを強制移住させた。こ

うして、「ハイランド・クリアランス」（高地清掃）といわれる農業政策が始まった。

住民との立ち退きの話し合いは結論が出ず、結局、強制立ち退きという手段が取られ、徹底的な家屋の破壊が行われた。この政策を進める人は「改良者」を意味する Improver と呼ばれていた。これに反対する人たちは「進歩を望まない人」



となる訳で、言葉のもつ恐ろしさを感じる。立ち退きをさせられた人たちは国内の海岸沿いの村や町だけではなく、遠くアメリカやカナダやオーストラリアへ移民していった。こうして、ハイランドやヘブリディーズ諸島の島々にあった独自の社会と文化と言語が完全に消えていった。

まとめ

長いこと英文学の研究に携わり、ハイランド・クリアランスのような歴史を調べた結果、どの国にも国の政策に翻弄される人たちがいることを学んだ。先の福島原発で故郷を追われた人たちも、原子力という国のエネルギー政策の一種の犠牲者であり、私の故郷の場合は福島と違って強制退去ではないが、やはり石炭から石油へという国のエネルギー政策の転換で、多くの人は新たな仕事を求めて日本中に散らばっていった。ジョンソンは旅行記で「幸福の一つの有り様に注目しすぎることは、ほかの幸福の有り様を危うくはしないだろうか」と問いかけているが、これは私の心に残る言葉となっている。

また、最終講義で述べた文学作品の解釈は、私がこれまで聞いたり調べたりしたことを踏まえた上での解釈であり、ほかの人にはまた違った解釈ができる。そこが文学作品の面白いところだと思うし、またそうした多様な解釈や考えは重要だと思う。さらに英語という外国語を長年にわたって扱ってきて得た教訓は、言葉の感覚を磨くということ、詭弁、言葉のあやなどに敏感になることである。うさん臭さに気が付くという感覚が重要で、Improver や積極的平和主義、あるいはホワイトバイトといった言葉には惑わされないようにしていきたいと思う。

謝辞

半世紀わたる私の英語との付き合いと、そこからの学び、教訓についてお話をさせていただきました。最終講義に、現役の学生さんをはじめ、教職員の皆さん、たくさんの卒業生、元同僚の皆さんも出席していただき、とても思い出に残る講義となりました。昨年冬には古巣の常葉高校で、英語の授業のお手伝いもさせていただきました。これもいい思い出になっています。これまで、たくさんの方々に親しくしていただき、また、ご支援いただき、何とかここまで務めることができました。皆様を含め、多くの方々との出会いに改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用参考文献

“Political Writings” (*The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*, v.10, ed. Donald J. Greene), New Haven: Yale University Press 1977.



たくさんの参加者がありました。

3. 外国語学部コロキウム

2024 年度外国語学部コロキウム

外国語学部言語文化研究会は、今年度もコロキウム (Colloquium) を主催した。その目的は、外国語学部教員が自身の教育研究活動の一端を発表して、外国語学部教員同士で関心を共有し、今後の外国語学部の教学へ活用しようと目指すところにある。参加者については主に外国語学部教員を想定しつつ、大学ホームページなどを使って学内外からの参加を広く呼びかけている。2024 年度は 3 回開催できた。新任教員と現職教員による研究発表である。外国語学部専任教員の他に、退職教員や在学生の参加がそれぞれ数名ずつあった。来年度は、例年のように前後期にそれぞれ 1 回ずつ開催し、より多くの参加者の来聴を願いたい。なお、コロキウム終了後に懇親会を開催した。(若松大祐)

第 1 回

日 時：2024 年 5 月 29 日 (水) 15:00 ～ 16:30

会 場：草薙キャンパス A 棟 3 階 A306 教室

講 師：小口 一郎 (英米語学科・教授)

演 題：抽象から印象へ

ーウィリアム・ハズリットの美学論ー

要 旨： William Hazlitt (1778-1830) は 19 世紀前半の文芸批評家である。多才かつ多産な文筆家であり、文芸評論を雑誌に寄稿しながら、文学に限らずさまざまなテーマのエッセイを書いている。イギリス文学における「エッセイ」ー彼自身のことばでは “family essay” (日常的随想) ーの価値を確立するのに貢献した人でもあった。彼はもともと画家志望で、人物画の実作者でありつつ、絵画評論でも名をあげている。この発表では、特に美術批評家としてのハズリットに注目し、彼の美術論と、19 世紀絵画の展開にどのような貢献したのかを考察した。精査の対象としたのは、「抽象」(abstraction) をめぐる思索、そして「反」ロマン主義的美学である。

ハズリットは抽象的・一般的概念を表現する絵画、そして絵画に抽象的テーマを読み取ろうとする鑑賞方法を痛烈に批判した。抽象・一般ではなく、際立った個性を描き出し、極端かつ強烈な印象を描くことこそ芸術の価値であると主張したのだ。前時代の啓蒙主義哲学は、ものごとを一般化する抽象化能力こそ、高度な知性のはたらきであると考えた。これに対してハズリットは、抽象化とは、所詮は不完全で恣意的な世界認識にすぎず、真の偉大な達成とは事象の個々の部分を、あるいは事象の一瞬を、極限まで明晰に認識することであると考えた。この思想は「批判的抽象論」と呼ぶことができるだろう。この認識に基づく美学は、18 世紀における美術界の権威であり、王立美術院の初代院長 Joshua Reynolds (1723-1791) の絵画論を厳しく批判することにもつながった。

批判的抽象論は、もう一つの革新へと導いている。彼が生きた 18 世紀末から 19 世紀にかけては「ロマン主義」の時代である。実際、ハズリットの友人には William Wordsworth (1770-1850)、Samuel Taylor Coleridge (1772-1834)、Charles Lamb (1775-1834) など、高名なロマン派の詩人・思想家がいた。しかし、にもかかわらずハズリットの審美感はむしろ反ロマン主義的である。ロマン主義の世界観は全体論的であり、一つ一つの個物が相互に連関をもちつつ、単なる個の集積を超えた有機的な全体を形成していると考えた。したがって、あるべき美術の姿とは、例えば具体的な自然風景を描きながら、同時に超越的な全体性や聖なる次元を、つまり世界を司る神を象徴的に表現するものとなる。しかしハズリットは、絵画の中の個々の描写が、大きな全体的な存在に収斂していくとするロマン主義美学をよしとせず、批判的抽象論が導く個性性、強烈性、そして体験の一回性を描くことが絵画の本来の姿であるとした。

このように、ロマン主義時代にありながらロマン主義を超えていたハズリットの芸術観は、19 世紀後半の新しい美学に受け継がれた。特に Walter Pater (1839-1894) の美学理論は、抽象性や普遍性を否定し、具体的表現に価値を置き、印象を直観しその個性性を強調する点において、ハズリット美学の継承者となっている。また、フランス印象派もハズリットの思想の重要な側面を実現していると考えられる。印象派は、描写する対象の抽象的な意味や本質ではなく、事物から得られる印象を、その場・その時間の 1 回限りの経験として把握し表現することを追求した。彼らもまた半世紀前の批判的抽象論に倅さしていたのである。

II. 3. 外国語学部コロキウム

ハズリットの美学には限界もある。なかでも J. M. W. Turner (1775-1851) の革命的風景画を評価できなかったことは惜まれる。しかし、時代に迎合することのなかった彼の美学は、芸術や芸術評論を次の世紀へと進める力をもっていた。今後もハズリットは、さまざまな歴史的文脈に照らして、研究に値する存在であり続けるであろう。

第2回

日 時：2024 年 10 月 23 日 (水) 15:00 ～ 16:30

会 場：草薙キャンパス A 棟 3 階 A306 教室

講 師：戸田 裕司（グローバルコミュニケーション学科・教授）

演 題：裁判から見た地域社会

－中国宋代の判決文集『清明集』の世界－

要 旨： 中国南宋時代の判決文集『名公書判清明集』の概要とその史的価値を説明し、その判決文に描かれた当時の地方行政や地方官庁の運営の実態を紹介した。豪民による地域支配のケースをとりあげ、地域において一時的には日本の武士団にも類似する領域支配の実態が存在していたことを紹介した。一方で、宋代以降の中国が一貫して中央集権的専制支配体制を維持していた点に注意を喚起し、中国社会の歴史的特質を指摘した。

第3回

日 時：2025 年 2 月 5 日 (水) 11:00 ～ 12:15

会 場：草薙キャンパス B 棟 4 階 B409 教室

講 師：Peter HOURDEQUIN（英米語学科・教授）

演 題：Ecolinguistics and the new literacies of place, practice, and play

要 旨： In this presentation I introduced the “field” of ecolinguistics, with a particular focus on the work of Professor Arran Stibbe. The word “field” is in quotations in the previous sentence because it points to one of the many metaphors that are used in language to create what Stibbe (2020) calls “stories we live by.”

Ecolinguistics is an academic discipline that analyzes texts using a kind of critical discourse analysis from an ecological perspective. In my presentation, I explained Professor Stibbe's model for ecolinguistics and then discussed my own "ecosophy." An ecosophy is a personal philosophical statement that provides the ethical foundation for evaluating texts in terms of their ecological impact. My (still evolving) ecosophy states that "Places and their people's ontologies and cultural practices matter. Place shapes who we are, how we think, and what we do in the world. Only by deeply understanding, valuing, and engaging in dialogue about our interconnections to and within places and place-based communities can we develop better, more peaceful, and harmonious relationships with each other and with the natural world that sustains us all." A bit wordy, I know.

As an educator, I aim for my teaching and research to align with my ecosophy. In the remainder of my lecture, I thus explored the theory and practice I am using in my attempts to attain this alignment. I discussed what I have been learning about "Place-based Education," and how I see this as relevant to, and very important for, our current place and time (Shizuoka, Japan in the Reiwa Era).

I ended my presentation by giving some examples of my classroom and community practices, framing these in terms of the "New Literacies Studies" (NLS) movement which forms the theoretical basis for the kind of pedagogy I try to practice.

4. 外国語学部文化講演会

2024 年度外国語学部文化講演会

常葉大学外国語学部言語文化研究会では、毎年、文化講演会を開催している。目的は、21 世紀を迎えグローバル化が常態化する今日、参加者が外国文化や多文化共生について理解を深めるところにある。2024 年度は例年どおり、1 回開催した。

日 時：2024 年 11 月 12 日（火）15 時 00 分—16 時 30 分

会 場：静岡草薙キャンパス C302 教室

講 師：蒲 元樹（株式会社マザーハウス 地方中核都市エリアマネージャー）

題 目：途上国から世界に通用するブランドをつくる

要 旨：マザーハウスは、「途上国から世界に通用するブランドをつくる」という理念で、「フェアトレード」を根本から作ろうと、バングラデシュにジュートの作業場を作るところから始まった。今では、現地で働く人々にとって「第二の家」と呼ばれるような、福利厚生の整った工場をアジア各地に作り、労働者には正当な対価を支払うシステムを基にビジネスを展開している。その根底には、徹底した現場主義がある。また、発展途上国で創り出したビジネスモデルを応用し、日本に於いて、地方の資産を活かす活動も行っている。2024 年 10 月末に松坂屋静岡支店に出店した際には、地元の企業とともに、三保の松原の松葉を修善寺和紙に混ぜてタイルにする活動なども行っており、「お店をただつくるだけでなく、その地域の歴史、文化、技術をつないでいく」という理念を、静岡においても実践している。

質疑応答では、参加した学生および教職員から次々と質問があがり、参加者の関心の高さを伺うことができた。

5. 特別研究の題目

グローバルコミュニケーション学科特別研究 共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧

日本語教育特別研究

担当 谷 誠司

21122024 小井 麻央「日韓ミュージカルの歌詞比較「ジキル&ハイド」を例に」

21122033 鈴木 陽葉「ソーシャルメディアにおける文字表記の変遷」

韓国特別研究

担当 崔 慶原

《共同翻訳文献》

原題：최승범『저는 남자고, 페미니스트입니다』생각의힘, 2021.

《サブ・レポート題目一覧》

21122014 大代 美空「脱北民イメージの再形成とアイデンティティの形成過程
—韓国在住脱北民ユーチューバーの活動に着目して—」

21122064 吉永 仁菜「韓国社会の大惨事と政治—セウォル号事件への対応を中心—」

ブラジル / ポルトガル特別研究

担当 江口 佳子

《共同翻訳文献》

原題：HOJE TEM ESPETÁCULO

Ana Maria Machado. São Paulo, Companhia das Letrinhas, 2019

《サブ・レポート題目一覧》

21122003 浅沼 芳華「継承ポルトガル語の重要性」

21122006 石川 和磨「アマゾンの動物崇拜」

21122008 井原 光希「リスボン大地震とその変遷」

21122035 諏訪 奈摘「アマゾンの労働問題と活動家マリナ・シルバについて」

21122036 芹澤 友華「日本のバレーボールが強くなった理由」

Ⅱ. 5. 特別研究の題目

～強豪ブラジルとの比較～」

- 21122042 辻井 彩「エスニック・タウンに潜む問題」
21122044 堂地 映至「ブラジルの奴隷制」
21122046 長沼 杏那「“移民の父” 水野龍と日本のコーヒー文化」
21122050 橋本 遥花「ブラジル料理の歴史」

スペイン・ラテンアメリカ特別研究

担当 増井 実子

《共同翻訳文献》

「スペイン社会の諸相を読み解く」をテーマに、スペイン日刊紙エル・pais（El País）インターネット版の記事を翻訳し、解説を試みた。

《サブ・レポート題目一覧》

- 21122002 秋山 ひより 「『ゲルニカ』から考える人権問題と戦争」
21122017 落合 沙文 「スペイン語における日本語のオノマトペ表現について
ー漫画『ジョジョの奇妙な冒険 Part3』に見るオノマトペ翻訳の難しさ」
21122034 鈴木 桜子 「スペイン語圏における日本教育の課題と指導法ースペインの学習者が直面する学習困難を中心にー」
21122043 堤 彩華 「スペインと日本における LGBT の受容とツーリズムの発展」
21122047 野副 文那 「なぜアステカ・マヤのデザインは現代アートに影響を与えているのか」
21122052 間嶋 柚月 「スペインのアニメ業界の現状と今後」

GC学科 特別研究 成果報告会 2024

日時

2025 年1月21日【火】

【補講日】

午後 **1時15分** ～

場所

B306 : ブラ／ポル**7**名
+ 韓国**2**名

B307 : スペ／ラテ**6**名
+ ブラ／ポル**2**名
+ 日本語**2**名

4年生の特別研究履修者が執筆したサブレポートの概要を報告します。全学年聴講できます。

プログラム

発表時間 : **1**名につき**20**分 (報告**15**分
+ 質疑応答と移動の時間**5**分)

報告者名とタイトルについては後日お伝えします。

主催

外国語学部グローバルコミュニケーション学科

6. 日本語教員養成課程の活動報告

2024 年度日本語教壇実習の報告

坂本 勝信

令和5年「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律」が制定されました。これを受け、認定日本語教育機関で指導ができる「登録日本語教員」という国家資格が設けられ、令和6年11月に初めての日本語教員試験が実施されました。今後、本資格の取得は日本語教師を目指す者にとって大きな目標の一つとなっていくます。

本学の日本語教員養成課程では、3年次後期に教壇実習が実施されますが、令和5年度からは、静岡県内の5つの教育機関（西部3校・中部1校・東部1校）に分かれて行っています。

本課程では、教壇実習に進むためのハードルを設けており、2年次4月に課程登録が認められた学生は、3年次前期の科目「日本語教授法」の履修条件を満たすべく様々な日本語教育関連科目を受講し日本語の言語体系や異文化コミュニケーション、コースデザイン、教案の作成方法など多岐にわたって学びを深めていきます。そして、条件をクリアし日本語教授法の履修が認められた者のうち、好成績を収めた学生が後期の科目「日本語教育実習」へと進み、教壇実習に臨むこととなります。令和6年度は、15名の実習生が11月から12月にかけて日本語学校（3校）、外国人学校（1校）、自治体の日本語教室（1機関）に分かれて、授業見学と教壇実習を行いました。

実習先は、教育対象が留学生、年少者、生活者と幅広いため、9月より「日本語教実習」内において対象者を意識した教案作成と模擬授業を重ね、教員や他の実習生からのフィードバックをもとにより良い形を探りました。教壇実習先における授業見学では、プロの日本語教師の生の現場を見せていただき、多くの刺激を受けるとともに、実際の授業で起こりうる事象や学習者の積極性を目の当たりにし、実習に臨む気持ちを高めました。また、事前に実習先の指導者に教案を送り、助言を受けた者は修正を経て一回目の実習に挑みました。各実習後に指導者との振り返りの時間が設けられ、様々な角度からフィードバックをいただけるた

め、改めて教案や教材の手直しをして二回目の実習へと向かいました。

1 月には、日本語教壇実習報告会を開催しましたが、実習生の発表からは日本人大学生相手の模擬授業では知りえない学習者のリアルな反応を体感できたという喜びの声が聞かれると同時に誤用への適切なフィードバックの難しさ、活動目的の明確化の必要性、教科書分析の大切さ、学習者に合わせた授業づくりの重要性など多角的な気づきを得た様子が窺えました。加えて、対応力、判断力、タイムマネジメント力、傾聴力、観察力、継続力などの社会性を身に付けられたとの報告がなされ、教壇実習が残りの大学生活と今後の進路を切り開く上で得難い機会となったことがわかりました。

最後になりましたが、実習生に貴重な学びの場を与えてくださった教壇実習機関及び、丁寧で熱いご指導をいただいた先生方に心より御礼申し上げます。

教師になるということ

小林 咲妃

皆さんは日本語を教えられるか？

私はこの一年間、日本語教師として、また英語教師として、人に教授するということについて学んだ。そして、11 月に日本語を学習者に教える体験として 3 日間の教壇実習（見学 1 回、授業 2 回）を行った。今回はそこから得た、「教師」にとって大切だと思った二つの学びと私の決意を書き留めたい。

まずは、日本語教師とは何か説明しておく。日本語を母語としない人や母語であるが海外生活が長くて必要な日本語力を身につけていない人に、発音や文法、読み書き、会話などの日本語能力を育む人をいう。また、教壇実習についても軽く触れておく。外部の日本語教育機関へ行き、その学校に通っている外国人学習者に日本語を教える。今回私は、沼津日本語学院で 45 分の授業を 2 回行った。

1 年生の時に日本語教員養成課程の登録を決めた私は、自分の母語である日本語を教えることは容易であると思っていた。しかし、普段感覚的に使っている言語を、理論的に説明することは困難であった。一つの授業を行うのにその指針を示した指導案というものを、事前に作成しなければならない。また、学習者の未

習語彙を省きつつ、できるだけ易しい日本語を使って作らなければならない。私は、45分授業の指導案を作成するのに、1週間以上の時間がかかってしまった。初回の教壇実習では、緊張して声も小さく、思ったような授業ができなかった。それに加えて、指導者の先生からは「教科書のコンセプトに沿っていない」「褒めが足りない」という厳しいアドバイスをいただいた。実際私は、教科書のコンセプトや見方・使い方をきちんと把握していなかった。文法教授に重きを置いているのか、会話活動に重きを置いているのか、進め方や記号の意味は何かなど、教科書にはそれぞれ特徴がある。教師は、授業を円滑に進めるために、教材を学習者以上に熟知し、上手に活用しなければならない。

また、教材だけでなく学習者の特徴や傾向についても十分な理解が必要である。私が担当した学習者は初中級だったため、教師のサポートや配慮が多くのも面で必要であった。例えば、口頭だけでなくイラストや画像を提示して視覚的にわかりやすくすることや学習者ができたことに対して、十二分に反応してモチベーションを維持させることなどである。学習者主体の授業を目指したが、当日、予想していなかった反応が出て、授業を最後まで行えなかった。教壇実習2日目は不測の事態でも対応できるように、学習者が躓きそうなところを推測して、その支援ができるように準備をした。そうすることで気持ちにも余裕が生まれ、学習者の発言に耳を傾けられた。教師の客観的にみる能力や先を読む力が授業の良し悪しを決めるといえる。

私は今回の教壇実習を通して、人に何かを教えるということは、その対象者と教育資源を研究することが非常に大切であると考えに至った。卒業後、英語教師になりたいと考えている私にとって、今回の経験は今後大いに役立つことである。教師として、「先生に出会えてよかった」と言ってもらえるように、誰かの将来を明るく照らせる存在になりたい。そのため、大学生生活の締めくくりとして残り1年も勉学を怠ることなく、言語力向上を目指し、また教師としての能力習得に向けて、力を注ぎたいと考えている。

日本語で学ぶ授業作成

22122014 落合 優音

私は小、中、高、大学とたくさんの授業を受けてきました。その他に、学習塾や英会話スクール、習い事などで受講したことがある人も多いのではないのでしょうか。私はこれまで生徒・学生として多くの先生から様々なことを学びました。教科やレベル、教師によって色の異なる授業は、私にとって楽しいものばかりでした。

大学生になって、私は日本語教育について学び始めました。日本語母語話者が何気なく使っている日本語を、第二言語として学ぶ人々の視点で考えるのが日本語教育です。周りの人に「日本語教育について学んでいる」と説明すると、よく国語の勉強だと勘違いをされます。しかし、日本語を母語とする者が義務教育で学んだような国語教育と、日本語を母語としない学習者が学ぶ日本語教育とは学び方が異なります。品詞の分類だけ見ても、国文法では形容詞・形容動詞とされるものが、日本語教育文法ではイ形容詞・ナ形容詞と分類され、日本語を知らない学び始めた人たちでもわかりやすい名前になっています。日本の国語教育において学ぶ動詞の活用も、日本語を母語とする者だからこそ理解しやすい分類なのであって、日本語学習者に五段活用と説明しても、理解してもらうのはとても難しいでしょう。日本語を全く知らない人の視点に立った日本語は、案外難解で面白いものなのです。

常葉大学外国語学部には、日本語教員養成課程があります。日本語教育について学び、日本語教員としての卒業資格が得られる課程です。1年次の「日本語教育入門」から始まり、2年次には外国語としての日本語と語学の授業を学ぶいくつかの必修科目と、外国語学習や外国文化などを学ぶ選択科目の履修が始まります。3年次に入ると、前期に「日本語教授法」という科目で教え方について学び、日本語の学習者役をする日本人学生を前に模擬授業を行います。私は15分という短い授業を作るのに10時間以上かかりました。後期になると「日本語教育実習」という科目があり、この中で実際に日本語学校の教壇に立ち、学習者に授業を行

うことになります。私はこの科目で数多くのことを学びました。

私の場合は後期の10月初めに教壇実習先である日本語学校へ見学に行きました。初めて実際の日本語教育の現場を見て、学習者の方々の元気の良さに圧倒されました。教師の問いかけに対し全員が積極的に応えているのを見て、授業の明るい雰囲気感動しました。受け入れ先の教師の方々も大変優しく、見学の際に授業のサポートとして少し学習者とお話することもできました。どの学習者も日本語の勉強は楽しいと話していて、改めて私も楽しいと思ってもらえる授業を作りたいと感じ、模擬授業と11月の教壇実習に向けた準備にいっそう真剣に取り組むようになりました。

授業準備においてまずはじめに気を使わなければならないのは、語彙のコントロールです。教師は授業内で使う単語や文法を学習者のレベルに合わせる必要があります。そのため、授業準備では自分が話す内容を細かく決めなければなりません。そして二つ目に、いかに学習者の発話量を増やすかということも重視する必要があります。外国語学習においてアウトプットは非常に重要で、クラスの全員がなるべくたくさん発話できるような問いかけや練習を考えます。これらを前提として、自分の担当する授業の学習内容をわかりやすく、定着しやすいように考えて授業を構成していきます。学習事項である文法をどのように説明するか、どのように板書するかという点は、私が一番難しいと感じた点でした。

模擬授業における反省やもらったフィードバックをもとに少しブラッシュアップして、11月の2回の教壇実習(1回45分)に臨みました。一回目、私はその授業をこなすことだけで精一杯でした。長時間かけて一言一言まで練った教案を持っていきましたが、やはりその場の学習者の反応に合わせてアドリブをしなければいけない場面は多く、また、想定通り進まなかったり、伝えたいことがうまく伝わらなかったりと、時間内に終えなければならない活動を終えることすらやっとでした。終了後、実習機関の先生からフィードバックをいただきました。大学の先生方と実習先の先生方では授業作成で何に重きを置いているかが異なるため、新たな視点で自分の授業を振り返ることができました。一週間教案の修正に時間を費やし、二回目に挑みました。アドバイスを沢山いただいたこともあり、緊張はそこまでしませんでした。特に一番の反省点だった時間配分と学習者の理解度に気を配りながら進める余裕ができました。発話練習を一回目よりもスムー

ズに行うことができ、学習者の発話が上達する様子を授業をしながら実感でき、嬉しく思いました。授業後には再びフィードバックの時間を設けていただきました。一度目は緊張や反省でフィードバックを聞くのみでしたが、この時間では授業や日本語学校のことについていくつか質問をすることもできました。一番印象に残っているのは、パワーポイントの情報量が多すぎるとかえって印象に残りにくくなってしまうというお話です。私の授業はパワーポイントが主体で、板書よりも短時間で濃い内容を学習者に示せるため、つい沢山情報を盛り込んでしまっていました。しかし、学習者が思い出しやすい授業を展開するためには提示資料を減らすことも大切だと気付かされました。また、板書は書くのに時間がかかる分情報は絞られるため、記憶に残りやすいということもわかりました。パワーポイントを使う際は板書するなら何を記すかを基準に考えるとよいという授業作成のコツも教えていただきました。実際に教師として活躍している先生からのお話は貴重でとても有意義なものでした。自分自身の授業を振り返るとその他にもまだまだ反省点はありますが、色々な学びを得て教壇実習を終えることができました。

冒頭でも述べた通り、私は今まで多くの授業を生徒や学生の立場で経験してきました。しかし、これまでは何となく聴いて、見ただけだったように思います。今年度、自分が授業を作る側に立ってみて初めて今まで当たり前のように受けてきたたくさんの授業は教師の方々の細やかな工夫が凝らされているのだと知ることができました。

大学生活も残り一年、これからはもっと多角的な視点を持って授業に参加したいです。

7. 学内外での教職員や学生の取り組み

合同ゼミナール

青木 麻未
大澤 奈歩

2024 年 6 月 29 日（土）と 30 日（日）の 2 日間にわたり、南山学園伊勢海浜センター（三重県伊勢市大湊町）にて、2024 年度第 9 回南山大学・常葉大学・立命館大学合同ゼミナールを実施しました。本学からは外国語学部グローバルコミュニケーション学科の学生 2 名の参加がありました。

大学	引率教員	学生
南山大学 外国語学部	宮原佳昭	3 年生 8 名
常葉大学 外国語学部	若松大祐	3 年生 1 名、4 年生 1 名
立命館大学 文学部	宮内肇	3 年生 6 名

一、主旨とスケジュール

このゼミナールの主旨は、東アジアについて関心のある学生が自らの関心をより深め、同時に新たな分野への関心を持つように試みることにあります。そのために、参加者は自らが持つ疑問の解明に接近すべく、関係する書籍を取り上げて得られた答案を発表します。また、他の参加者の発表を聴いて質問し、議論を展開します。今年度は、田原史起『中国農村の現在』（中公新書、2024 年）に即して発表を行いました。

[1 日目] 6 月 29 日(土)	12:30	伊勢市駅に集合
	13:00	南山学園伊勢海浜センターにチェックイン
	13:30	参加者の自己紹介・趣旨説明
	14:00 ～ 15:30	グループワーク 1： 課題図書をどのように読んだのか
	15:40 ～ 18:00	グループワーク 2： グループでの研究計画を立ててみる

	18:00 ～ 19:00	夕食
	19:00 ～ 20:00	グループワーク 2 の継続・報告会の最終準備
	20:00 ～ 21:30	グループワーク報告会・講評
	21:30 ～	懇親会・自由解散
[2 日目] 6 月 30 日(日)	08:00 ～	朝食、チェックアウト
	09:30 ～ 10:30	グループ発表の表彰・まとめ・ふりかえり
	10:45 ～	グループで散策 (伊勢神宮内宮・外宮など)
	14:45	伊勢市駅にて解散

二、獲得したスキル

文責：大澤奈歩

今回の合同ゼミは、南山大学、立命館大学、本学の 3 大学の学生が参加しました。グローバルコミュニケーション学科はゼミが必須ではありません。そのため、1 冊の課題図書を細部まで読み解き、1 ヶ月以上かけて自身のレジュメを準備するという活動が新鮮でした。また、今回は同じグループになった学生は全員初対面であったため、グループワーク I にて自身の発表をする際も、大学での授業とは違った緊張感がありました。この経験は、就職活動でのグループディスカッションでも、さらには、その後の社会人生活でも大いに役に立つと思います。

グループワーク II では、発表までの準備時間が少ない中、初対面の仲間と意見を出し合い、研究計画をまとめることが出来るのかと不安に感じていました。しかし、私のグループは、初対面とは思えないほど、各メンバーがそれぞれの意見を出し、それに対する反論や付け足しなど、白熱した議論が出来ました。最終的に私のグループは、少数民族の強制移住に関する研究計画を立てました。課題図書にて、農民の都心部への移住について書いてありましたが、強制移住が行われているのは中国農村だけではなく、他の少数民族でも同様なことが行われているということがわかりました。そのため、研究テーマを「少数民族の強制移住」に設定し、研究の手順を考えました。少数民族視点の書籍と統治者視点の書籍を読み比べ、第三者の視点から対策を検討するという方法を提案しました。しかし、実際に研究を進める際には、対象となる書籍を見つけることが難しいという問題点が挙がりました。

合同ゼミナールを通して、初対面の方々と協力して作業を進める貴重な経験を

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

得ただけではなく、自分たちの未熟さにも気がつくことが出来た貴重な機会でした。

三、論点の紹介

文責：青木麻未

私は合同ゼミのグループワーク I の事前準備を通して、映画『小さき麦の花』¹に興味を持った。この映画は、課題図書である『中国農村の現在』に出てきた映画で、貧しい農民の有鉄（ヨウティエ）と障がいのある内気な貴英（クイイン）の結婚後の生活が描かれた作品である。この二人は家族の中でも厄介者として扱われ、お見合いをさせられ、家から追い出される形で結婚をする。そんな二人が、お互いを慈しみ、力を合わせ、作物や動物を育て、質素な家を作り、日々を生きていく。自然の猛威や変わりゆく時代の波にさらされながらも、互いのことを一番に考え、徐々に家族という関係を形成する作品である。この映画の作中には、「幸せ」とか「愛」とかそういったセリフは一切出てこない。しかし、主人公たちの日常を覗く中で、幸せとはなにか愛とは何かが少しではあるがわかった気がした。

下記が、実際に合同ゼミの事前準備の際に作成したレジュメの映画について書いた個所である。（課題図書の該当ページを付記した。）

(1) 関心を持った章・節

田原『中国農村の現在』の終章第 2 節に出てくる映画『小さき麦の花』に関心を持った。2022 年の夏に上映されたこの映画は中国で異例の大ヒットとなったものの、公開からわずか 2 ヶ月後の 9 月下旬に映画は突如、上映中止・配信中止になったという（p.272）。

田原によると、主人公たちは家族主義に基づく生活を送ることができない（p.272）。だが、主人公は夫婦 2 人で農作物や家畜を育てながら自然と共に生きることによって幸せを見出す（p.275）。そのような 2 人の幸せな生活を送る姿に心打たれる人が増えてしまうことに、農民工を県域・県域に集中させたい中国政府は、

¹ 李睿珺『小さき麦の花』マジックアワー、ムヴィオラ、2022 年。原題は『隱入塵煙』。日本語版公式サイト（<https://moviola.jp/muginohana/>）。

焦りを感じたのであろうという。

(2) 本書を読解後、どのようなことを考えているか。

中国政府が農民を県域・県域に配置するならば、農民の中でも特に貧困層として生きてきた人たちはどのような生活を送ることになるのか。私は、実際に映画『小さき麦の花』を観てみた。映画の中で、貧困世帯に家が分配されるという場面がある。わずか1万円で80平米以上の家を手に入れることができることを伝えられた主人公は、「俺は農民だ。町に家などいらない。どうやって暮らす？ロバや豚や鶏を飼う場所もなくなる」と言い放つ。置かれた場所で自分の幸せを見つけ出していた主人公にとって、突然町に住め、家は準備するからと言われ、町に住めたとしても、どのように生活をすればいいのかわからなくなってしまうのは当然だ。

高齢独身男性、身寄りのない高齢者、身体・精神障害者など家族を形成することができない人は一定数いる (p.276)。社会的上昇を望まず、家族主義と共鳴することができない貧困層は、農村を出て町に住むと仕事を失い、小さな幸せさえ見つけられない生活を送ることとなる。これでは、生きること自体が難しくなってしまう。

私たちは、生活する場所に合わせた力を身につける必要がある。農村で生活するためには、農作物を育てる力が必要となり、都市で生活するには、ある程度の学力と電子機器を使用する能力が必要となる。映画『小さき麦の花』では、近所の家にあるテレビに憧れを抱くシーンがあっただけで、主人公が電子機器を使用する場面は一切なかった。キャッシュレス化が進む昨今の中国では、スマホなしに都市での生活を送ることは難しいだろう。中国政府は、農民工を県域・県域に配置する前に、県域・県域で生活するうえで必要となる力を農民に修得させなければならない。

宴の後にふりかえりながら：

2024 年度静岡県青年友好代表団の参加報告

森下 真千子

私は、2024 年 9 月 1 日（日）～2024 年 9 月 6 日（日）にかけて行われた、「日中友好青年代表団 新時代交流プロジェクト」に参加した。静岡県と中国浙江省は、40 年以上もの間、友好都市として友好関係を持つ。そんな浙江省の対外友好協会が、静岡県日中友好協会を浙江省に招待した。このプロジェクトには、木内充団長（県議会議員）をはじめ、静岡県の大学生や、公務員 35 名が浙江省を訪問した。

以下、若松先生に中国滞在中に送っていたメールを掲載する。中国訪問で気づいたことを、その時の言葉で表し、よりリアリティある体験記を書き残したい。そこで、メール原文にほぼ手を加えていないで掲載する。

〈スケジュール〉

DAY1 2024 年 9 月 1 日	【上海】 富士山静岡空港→上海浦東空港着→夜景観賞→市街地探索
DAY2 2024 年 9 月 2 日	【浙江省杭州】 西湖名勝遊覧（河坊街、西湖散策）→浙江世界貿易中心→印象西湖鑑賞
DAY3 2024 年 9 月 3 日	【浙江省杭州】 企業視察（GEELY）視察→杭州アジア競技大会館→之江文化センター見学→浙江外国語大学学生交流→浙江省人民対外友好協会主催歓迎レセプション
DAY4 2024 年 9 月 4 日	【浙江省湖州】 安吉余村千万工程展示館見学→陳列館見学→湖州師範学院学生交流→湖州人民政府主催歓迎レセプション→打鉄花鑑賞
DAY5 2024 年 9 月 5 日	【浙江省嘉興市】 烏鎮国際人文交流基地訪問→桐郷茅盾実験小学校訪問→嘉興市人民政府、政治協商会議主催歓迎晩餐会
DAY6 2024 年 9 月 6 日	【浙江省→上海】 上海浦東空港→日本

2024 年 9 月 1 日 (日)

2024/9/2, 7:44 AM 送信

おはようございます。昨日、私たちは、静岡空港を発ち、上海へ到着致しました。上海では、夜景を見た後、午前 2 時頃まで自由散策をしました。(時間が夜中だったため、かなり怖かったです。) 上海の街並みは、発展が著しく、私が今まで持っていた中国のイメージと、掛け離れていました。

今日から私たちは、浙江省へ入ります。伝統芸能の鑑賞や、西湖でのクルーズなど予定が盛りだくさんです。昨日、私は中国の経済発展や都市化を感じました。これに対し、今日からは中国の古い歴史や美しい自然を見ることができるでしょうから、楽しみです。しかし、楽しみな反面、慣れない土地や食事に、身体は疲れていると感じますので、体調に留意し臨みます。また、報告いたします。

2024 年 9 月 2 日 (月)

2024/9/3, 4:25 AM 送信

おはようございます。お忙しいところ、続けて失礼します。

2 日目の今日、私たちは浙江省(杭州)に移りました。浙江省はとてもよいところで、人々も優しいです。午前中、私たちは、西湖をクルージングしました。そして、夜は印象西湖という湖上での舞台を鑑賞しました。それは、大迫力の素敵なショーで、歌い手や踊り手の美しさ、自然との融合に大きく心を動かされました。

そして、私は、今日も遅くまで散策していたのですが、遠くまで行き過ぎてしまい、道に迷ってしまいました。そこで私は、近くにいた中国人の女子 3 人に、常葉大学の授業で習った中国語を使って助けを求め、ホテルまで案内してもらいました。また、私は、彼女たちととても仲良くなることができました。そこで、彼女たちの仕事場であるバーに招いてもらい、そこではカクテルとお菓子をご馳走して貰いました。

私は、初対面の私たちに手を差し伸べてくれた彼女たちに、心から感謝すると共に、友人になれたことをとても嬉しく思いました。また、自分の中国語が通じたことが、今後の勉強の励みになると感じました。

明日は、私は歓迎レセプションにて、剣道の型を披露する予定になっています。

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

とても緊張しますが、全力を尽くします。

2024年9月3日（火）

2024/9/4, 3:06 AM 送信

こんばんは。お気遣いいただきありがとうございます。承知いたしました。

本日は3日目です。今日は、自動車工場見学、アジア大会館視察、文化センター視察、学生との文化交流と、盛りだくさんな1日でした。

剣道の型の披露は、無事に成功いたしました（文末に写真掲載）。政府関係者もいる中での披露でしたので、とても緊張しました。しかし、なんとかミスなく終えることが出来ました。その際、私は中国語で短い自己紹介をしました。常葉大学の中国語の授業でのスピーキングテストのお陰で、人前でも臆せずに話すことが出来ました。

さらに、夜は昨日友達になった小雨と小果が WeChat を通し、二人の家に呼んでくれました。青年団の活動では、中国の発展や都市化を感じる内容が多いです。対して、低所得者の人々が暮らす団地やローカルかつディープな店を見て、中国には、具体的には浙江省には色々な側面があるのだと感じました。私は、そのことをとても興味深く感じました。明日は杭州市を離れ移動してしまうので、2人に会えるのは今日で最後でした。しかし、私は、日本に帰ってからもうやり取りを続けていこうと思います。

本日も長文になってしまいました。お忙しい中、読んでいただきありがとうございます。

2024年9月4日（水）

2024/9/5, 3:09 AM 送信

こんばんは。4日目の報告をいたします。

今日、私の心に残ったことは2つあります。1つ目は、余村へ行ったことです。そこは、千万工^{プロジェクト}程によって環境が改善し、「未来村」に位置付けられた村でした。さらにインフラの設備や、環境に配慮した産業が行われ、近代化した農村でした。しかし、私は違和感を覚えました。その理由は、そこがまるでモデルルームのように生活感のない場所だったからです。他の団員たちと話し、私以外の人も同じ

ように違和感を覚えていたとわかりました。

また、疑問が2つ湧きました。1つ目は、千万工程は、先に千個の村を改善してそこでのノウハウを他の村へ適用するというものです。村によって気候や元々の汚染状態も異なるのに、本当にノウハウを適用できるのでしょうか。

2つ目は、「未来村」とはどのような基準をクリアして実現できるのでしょうか。また、団員の中には、戸籍を動かせない中国において、「千万工程の制度は、村人を株主にするものだ」と言う人がいました。村を村人が共同所有し、(村のお金で株を購入し)、儲かったお金で村全体を潤しているのだらうと推測したのです。私はそれに対し、「もしそうだった場合、それは村として本当の発展と言えるのか？」という疑問を持ちました。しかし、村全体の整備された環境を見たことで、中国共産党の絶大な力を実感しました。

心に残ったことの2つ目は、湖州師範大学の生徒との交流です。そこでは日中のカップラーメン交換をしました。また、私は彼らと、中国語で会話をしました。湖州師範大学の生徒に、若松先生の授業で教わった「月亮代表我的心」(テレサ・テン)を知っているか尋ねたところ、全員知っていたので、一緒に歌うことが出来ました。私は、交流会の最後に剣道の型も披露しました。内容は昨日お送りしました動画とあまり変わりませんでしたが、今回は最後までメモ用紙を見ずに自己紹介を出来ました。

明日は交流活動の最終日です。より沢山の思い出、中国人の友人をつくり、帰国したいと思います。今日もお忙しい中、読んでいただきありがとうございます。

2024年9月5日(木)-2024年9月6日(金)

2024/9/9, 18:24 送信

一昨日に帰国し、普段の生活に戻りました。急にメールでのレポートが途絶えてしまい、ご心配をおかけしすみません。

5日目、私たちはまず、烏鎮を観光しました。そこは古い町並みの、美しい場所でした。そこでは、古来の染物を作る工程や、伝統的な結婚式の慣習などを知りました。中国時代劇ファンとしては、とても興奮しました。

更に、私達は桐郷茅盾実験小学校を訪問しました。そこは、とても近代的な小

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

学校であり、設備が充実しております。それが公立の小学校と聞き、驚きました。また、生徒の皆さんもとても歓迎してくれました。彼らは、手を振りながら私たちを迎えてくれ、手作りのうちわをプレゼントしてくれました。さらに、出し物の時間もあり、小学生とは思えないような素晴らしいバイオリン演奏、民俗芸能のショーもありました。

2日目に杭州で道案内をしてくれて、友人になった小雨は、学校に通っていなかったため、簡単な英語も分からないようでした。（パスポートを作れないと言っていたので、戸籍がないのかもしれませんが。）それに対し、このような充実した環境で教育を受けることの出来る小学生たちを見て、中国は教育格差の大きい国だと感じました。

その後、私たちは、南湖紅船・嘉興南湖国際人文交流基地を訪問しました。そこには、100年以上前に、中国共産党が初めて会議を開き会場になった船がありました。そのころの中国では、共産主義者は迫害される身だったため、この船の上での会議ですら行えないほどだったようです。もしその会議が行われず、中国が社会主義国にならなかった場合、どのような国になっていたのか、果たして発展していたのかと、団員同士話しました。また、現場を案内してくれた人が、「今日からあなたも共産党員になりたいですか？」と冗談めかして聞いてきました。

その後、私たちは、最後の晚餐会に臨みました。毎食、油の効いた中華料理だったため、胃もたれが激しく、苦しかったです。しかし、鴨舌、きゅうりジュースなど、日本では食べられないものが沢山出され、日本では「グロい」と言われそうなものが、中国ではご馳走であり、こうした食文化の違いが、興味深かったです。

6日目は、3時間バスに乗って上海空港に到着し、航空機で日本へ帰ってきました。

私は、中国を実際に訪問したことにより、日本の良さに気付きました。中国と日本を比べた時、中国には、圧倒的に足りないものがあると感じました。それは、日本の「丁寧さ」です。日本の製品や接客マニュアルは、お客さんの快適さのために、沢山の工夫が施されています。私は日本での生活は当たり前のものだと思っていました。しかし、中国ではそれは当たり前ではありませんでした。また、ト

イレや水道のインフラ設備も、日本のものはとても綺麗で使いやすいものなのだと感じました。

この研修で私は、中国の近代化を強く感じました。特に、どこに行っても静岡にはないような高層ビル群が連なる景色は印象的でした。しかし、余村訪問や、小雨、小果との出会いを通して、中国政府が私たちに见せる「発展した中国」、「近代的になった中国」とは本当に現実なのかという疑心が芽生えてしまいました。これについて、代表団の人々と話し合いをした際、私の中で腑に落ちたのは、「中国は格差社会であり、上層は素晴らしい近代化をしているが、国としてはまだ、発展途上である」という言葉でした。雲南省では、未だに道が整備されず、小学生も学校に通えていない人数が一定数いるようです。社会主義の中国は貧富の差のない社会を目標としているのに、資本主義の日本よりも格差が大きい気がするの、何故でしょうか。そのような疑問が湧きました。

6日間、今までにないような経験をしました。本当に充実した時間を過ごすことができました。これからも、中国語の学習を続け、小雨や小果、交流で出会った友人たちともっと流暢な中国語で話せるようになりたいと思いました。また、日本では中国はあまり良いイメージを持たれないことが多いため、私は中国を訪問し、中国の人々の温かさに触れた人間として、自分の家族や友人に、中国での話を沢山していこうと思いました。そのような小さなことが、日中関係の友好促進に少しでも繋がっていくはずです。

短くまとめようとしたつもりですが、とても長くなってしまいました。お忙しい中、読んでいただいてありがとうございます。今後もしよろしく願い申し上げます。

<帰国4ヶ月後>

中国から帰国4ヶ月後、若松先生に中国を訪問した感想について改めて問われた。私は、中国の発展に驚いたと話した。すると、「発展とは何ですか?」という難題を投げられた。「発展」という言葉の意味など考えたこともなく、ぼやとしたイメージで使っていた言葉であったため、戸惑った。若松先生は、そんな私に対し、その言葉の内容を三つほどの要素で示すことによって定義することを、教えてくださった。例えば、嫌いな食べ物について話す際、ただ「好みではない」

Ⅱ. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

という一方的な感情だけで終わらせるのではなく、嫌いな内容に、「①苦い②歯ごたえが強すぎる③においがきつい」という具体的な要素を提示することにより、整理するというものである。私はこの方法により、自分の使う「発展」という言葉の意味を改めて見なおした。そこで私は、「発展」の要素に、「①科学技術による便利かつ豊かな暮らし、②精神、言論の自由がすべての人に保障されていること、③格差のない（小さい）社会であること」を挙げた。このうち、中国社会は、①には大いにあてはまるものの、②と③は完全に当てはまらないと思った。そのためこの定義は、私が中国訪問時に得た「中国はなおも発展途上な一面もある」という見解を裏付けるものとなった。しかし、若松先生は、私の示した要素の不完全な点も指摘してくださった。「発展」という概念の意味を、中国共産党がどのように提示しているのかを知らずに、自分にとっての意味のみを提示し、「中国はなおも発展途上な一面もある」と一方的に議論を展開してはならない。というのも、中国共産党が「発展」の要素に、私が鑑みなかった④や⑤の要素を採択しているはずだからである。私は、自分とは異なる、相手のスタンス、考えを知り、理解して初めて、自らの意見に説得力が増すのだと気づいた。社会主義という、日本と全く異なる政治体制の中国共産党ではある。文献を読み、実際に訪れることにより、少しずつでも中国を理解していきたいという思いが芽生えた。このような学びの機会を得られたことに深く感謝し、今後の糧にしていきたい。



歓迎聆聴：2024 年度公開講演を実施して

若松 大祐

2024 年度は、自身の授業の一環として合計 3 回の公開講演を実施しました。いずれの講演も、授業担当者である若松の不足を補って余る内容でした。受講者は講演を通じて新たな知識を得たり、物事について考えるきっかけを得たりできたはずで

す。講演は公開しており、本来の授業の受講者のみならず、他の学生や教職員の参加がありました。とはいえ、授業の受講者以外の参加者はまだまだ多くあります。2025 年度も引き続き公開講演を実施します。この記事を読んだあなたのお越しをお待ちしています！

なお、ゲストスピーカーを招聘するにあたり、常葉大学教材費の支援を受けました。改めてお礼申し上げます。

< 公開講演の一覧 >

(1) 2024 年 7 月 2 日 (火) 10:45-12:15、教室 B301 (授業名：中国文化入門)

約 60 分の講演、約 20 分の質疑応答

黄 維邦 (HUANG, Wei-pang)、台湾味・料理長

「在日本的経験與廚藝的心得」(日本での経験と調理の心得)

本講演では、厨师(料理人)になるためのキャリア形成と、中華料理の持つ魅力とを紹介します。講師は点心づくりを得意とする台湾人であり、30 歳を直前にして五十音も知らないのに夫婦で日本へやってきました。現在は清水に住み、中華点心(主に冷凍餃子)をインターネットで販売しています。受講者は料理を通じて、中華文化への理解に近づくことができます。また、黄維邦という人間の経験を通じて、日本における外国人の境遇を知ることができます。(なお、本講演は「異文化コミュニケーション A」(清ルミ)と合同で実施します。講演はすべて中国語で行われ、若松が日本語へ通訳します。)

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

(2) 2024 年 12 月 3 日（火）10:45-12:15、教室 B503（授業名：中国語会話入門）

約 50 分の講演、約 30 分の質疑応答

市川 美奈子 (ICHIKAWA, Minako)、静岡県台湾事務所・所長

「中国語で働くー北京と台北での暮らし・仕事で感じたことー」

本講演では、講師と中国との関わりを踏まえ、中国語を使う仕事のあれこれを紹介します。講師は大学で中国を学び始めました。卒業後は北京へ留学して北京で働き、2013 年より静岡県庁で働き、2023 年より台北へ赴いて静岡県台湾事務所の所長を務めています。20 数年間で大きく変わった中国社会を紹介するとともに、中国語で働く仕事にどのようなものがあるのか挙げてみましょう。（なお、本講演は「中国語会話入門」（戸田裕司）と合同で実施します。ZOOM を利用したオンライン講演になります。）

(3) 2024 年 12 月 12 日（木）16:45-18:15、教室 A424（授業名：国際関係論 B）

約 80 分の講演、約 30 分の質疑応答

鐸木 昌之 (SUZUKI, Masayuki)、尚美学園大学・名誉教授

「謀を考えるー陰謀論と陰謀ー」

本講演では、とりわけ 2020 年春からの新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延以来の今、世界で何が起きているのかを、受講者とともに考える。その際、我々に陰謀論と陰謀を分けて考える態度の必要なことを指摘する。また、「謀」に深く関わる「間」（スパイ）に注目しなければならず、そこで『孫子』「用間篇」をひもとく。人は物事の真偽を疑い、その真偽を自ら考えなければならない。（付記、当日は文筆家の本郷矢吹氏の参加もありました。質疑応答が続き、18:40 に終了しました。）

Ⅲ 英米語学科

1. 高校生対話弁論大会

第 40 回 静岡県高等学校英語対話弁論大会報告

『常葉大学主催・静岡県教育委員会後援 第 40 回 静岡県高等学校英語対話弁論大会 (The 40th Shizuoka Prefectural Inter-High School English Dialogue Speech Contest)』が、令和 6 (2024) 年 11 月 30 日 (土曜日)、静岡草薙キャンパスにて開催されました。

本大会は、4 分以内の時間制限のもと、社会問題や日常生活の話題を二人 1 組のスキット形式で英語表現するユニークなコンテストです。静岡県教育委員会の後援を受け、県内高校生に英語発表の機会を提供することで、英語教育の充実を図ることを目的としています。常葉大学外国語学部の創設時から毎年開催されており、今年で 40 回目の節目を迎えました。

令和 6 年度は静岡県内 6 校から 8 組 16 名がエントリー出場し、日々の練習で培った熱意あふれるパフォーマンスを披露しました。

大会結果

優 勝	“Thrills of Our Cheering Squad” 梅原 涼さん、本山 柊亜さん (静岡県立静岡商業高等学校)
準 優 勝	“Where’s My Money?” ノガミ ニコラスさん、ハンガドリシン ヨキさん (静岡県立浜松江之島高等学校)
第 3 位	“Are You Prepared?” 蝦名 ひなみさん、木川 音輝萌 さん (常葉大学附属常葉高等学校)

【出場高校】(五十音順)

静岡県立掛川西高等学校、静岡県立静岡商業高等学校 (2 組)、静岡県立清水東高等学校、静岡県立浜松江之島高等学校、常葉大学附属橘高等学校 (2 組)、常葉大学附属常葉高等学校

なお、本大会の運営は、英米語学科の学生スタッフによる献身的なサポートのもと行われました。MC の進行、モデル・スキットの発表 (“Fast Food”)、学

部長による歓迎の言葉の通訳など、学生たちは授業で培った英語運用能力を活かし、円滑な大会運営に貢献しました。

【学生スタッフ（英米語学科）】

MC： 狩野 太陽（3 年）、村上 月花（2 年）

通訳： マハナマゲ カウヤ（1 年）

タイムキーパー： 渡邊 心結（1 年）

モデル・スキット： 小林 咲妃、河合 普英（3 年）

受付・会場： 金 桃圭、中村 優（2 年）、高林 煌叶（1 年）

カメラ： 町田 幸希（1 年）

【教員スタッフ（英米語学科）】

天野 剛至（大会責任者）、良知 恵美子、小池 理恵、スティーブ・ユーリック、
佐藤 由美

【審査員（英米語学科教員）】

ケビン・デミ、ピーター・ハーディケン、スティーブ・ユーリック

2. 教員採用試験合格者

未来の子どもたちに誇れる仕事をするために

杉山 大悟

2024年8月に令和7年度静岡県教員採用選考試験に合格し、中学生であった私が掲げた目標のスタート地点に立つことができました。そして同年11月には常葉大学教職大学院入学試験に合格することができました。その過程は決して順風満帆と言えるものではありませんでした。しかし、私は幸運にも周囲の方々に支えて頂き、さまざまな経験を積み重ねることができたおかげで、教員となるための学修を継続することができたと感じています。

私が教員になりたいと感じたきっかけは、中学校1年生の時、教育実習生の先生から最終日に手紙を頂いたことです。このときに「将来、私自身も教育実習生として母校の生徒へ手紙を送り、その後は未来の子どもたちに誇れる教員として活躍したい」と子どもながらに強く思ったことを今でも覚えています。しかし、そこから現在までのおよそ10年間は非常に苦しいものでした。特に、常葉大学外国語学部での教職課程におけるこの4年間で、私は教員という仕事に向いていないのではないかと感じる日も非常に多かったです。それでもここまで教職課程での学修を継続できたのは、きっかけをくださった手紙に加え、2つの要因があります。

その要因の1つは私が大学3年生の夏に、「2023年度夏季ダルハウジー大学海外語学研修プログラム」に参加し、貴重な経験・学びを得たことです。高校卒業まで部活動に青春を捧げ、感染症にも抑圧されていた私にとって、カナダのハリファックスでの経験はどれも新鮮で、美しい思い出ばかりです。ハリファックスの歴史と現代技術が融合する街並み、活気に溢れた優しい人々、そして地平線に沈む夕日を家族と共に見たことは、生涯忘れることはありません。また、ダルハウジー大学で、私は教職コースを選択し、英語の教授法、実践的な英語授業構成、生徒への話し方・接し方に至るまで非常に多くの学びを得ました。当時、聞き取れないほどの速さで話す友人・教授の英語に食らいついて理解しようと試み、なんとか講義の進度にも遅れず理解することができるようになりました。何より印

象的で思い出に残っているのは、家族と共に過ごした全ての時間です。これらの経験を通じて、私自身成長させて頂けたおかげで教員採用選考試験に合格できたと言っても過言ではありません。今度は私が教員として、受け持った生徒が、かけがえのない経験を得られるように支えていきたいと感じています。

もう1つの要因は、さまざまな方々から頂いた言葉に支えられ、励まされてきたことです。一例として、ダルハウジー大学へ向かう道で友人とダンスについて語り合った際、「ダンスに失敗や正解などないのだから、あなたも躊躇せず自由に踊ったらいい。もし失敗があるとしたら、それは踊らないことだよ」と言ってくれたことです。その言葉は私の肩の荷を下ろしてくれた同時に、さまざまな場面に精通した言葉だと感じました。また、教員採用選考試験合格後、さまざまな課題に取り組み息苦しさと同時に、教員としての未熟さを感じていた際に、ある先生が親身になって相談にのってくださいました。その際の「多くの場面で活躍するピッチャーであっても、球を投げ続けた後にさまざまな球種を覚えるように、教員として授業経験、年数を重ねるごとに洗練され、多くのことを覚えていく。だから、現時点で気にしすぎることはないよ」と言ってくださいました。今度は私が教員として、受け持った生徒に対して寄り添った言葉を投げかけられるように研鑽を続けていきたいと感じています。

私は教員として生涯、生徒にとって彼らの心を輝かせる多くの経験と言葉を収録した一冊の本であり続けたいと思います。私が中学生、高校生であった時は「後輩の手本になること」が私の目標でした。思い出が経験に変わり、さまざまな探究活動を通じて、多くの恩師に出会えた現在では、「未来の子どもたちに誇れる仕事をする」ことが私の目標です。これからは、何事にも尊敬と感謝、そして謙虚な姿勢を忘れず本のページを増やしながら前に進み続けます。

IV グローバルコミュニケーション学科

1. 海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)

海外事情談話会

グローバルコミュニケーション学科では有志の教員を中心にして、毎月、海外事情談話会の開催を目指している。いわばグローバルコミュニケーション学科のコロキウムである。そもそもは、学内共同研究「外国語学部グローバルコミュニケーション学科の教学内容の向上のための比較地域研究」(平成 27 (2015)-29 (2017) 年度) の一環として、2017 年度より始まった。目的は、学科教員が近年の研究内容や出張内容を報告し、自身の関心を参加者と共有するところにある。2017 年度は 5 回、2018 年度は 3 回、2019 年度は 1 回、2020 年度は 2 回、2021 年度は 4 回、2022 年度は 3 回、2023 年度は 2 回というふうを実施してきた。

2024 年度は、残念なことに 1 回も開催できなかった。来年度は、より多くの教員がより多く開催できるように尽力したい。

2. 多言語レシテーション大会

第 11 回多言語レシテーション大会

若松 大祐

多言語レシテーション（暗唱・朗誦）大会が、2024 年 12 月 14 日（土）に本学静岡草薙キャンパス A 棟 2 階 A201 教室で開催されました。目的は、古今東西の詩歌を詠みあげて、その詩歌を生み出したその時その場所を、今ここ静岡に再現することにあります。大会で登場した詩歌はどれも、それぞれの言語が持つ時間の長さや空間の広がりなどを私たちに伝えてきたことでしょう。

この大会は、常葉大学外国語学部グローバルコミュニケーション学科が主催するものです。そもそもは外国語学部創設 30 周年を記念して 2014 年に始まり、今年で第 11 回を迎えました。学部創設以来の伝統と定評ある英語やスペイン語の教育だけでなく、中国語、韓国語、ポルトガル語の教育をも加えた外国語学部でのグローバルな学びを、参加者が互いに励み共に楽しむことのできるイベントとして、毎年 12 月に実施されています。出場者は中国語、韓国語、スペイン語、ポルトガル語の課題文（詩歌や文学作品の一節）を暗唱・朗誦し、発音や表現力を競います。

昨年度の第 9 回大会から、「ソロ部門」（独演）と「ペア部門」（対話）という部門を新設しています。これに伴い、「レベル 1」と「レベル 2」というレベル分けを廃止しました。課題文の難易度は、「ソロ部門」が旧「レベル 1」に、「ペア部門」が旧「レベル 2」に対応します。

こうした開催形態の下、スペイン語、中国語、ポルトガル語、韓国語の四言語をあわせ、のべ 44 名（ソロ部門 20 名、ペア部門 12 組 24 名）の出場があり、うち 3 名（岡本タロウ、加藤もか、山本花瑠）はグローバルコミュニケーション学科のカリキュラム「二言語学習」でのレシテーションに挑戦しています。さらに参加者の内訳を見ますと、外国語学部グローバルコミュニケーションの学生（29 名）のみならず、静岡県内の高校生（14 名、静岡城北、吉原）も参加しています。

ただし、昨年（2023 年）と同じく、出場者数が少ないままでした。ちなみに、昨年の第 10 回は対面形式で実施し、出場者がのべ 48 名（ソロ部門 28 名、ペア

IV. 2. 多言語レシテーション大会

部門 10 組 20 名、うち二言語出場者 3 名、静岡県内高校生 20 名) でした。また、一昨年 (2022 年) の第 9 回は対面形式で実施し、出場者がのべ 53 名 (ソロ部門 31 名、ペア部門 11 組 22 名、うち二言語出場者 2 名、静岡県内高校生 14 名) でした。2021 年の第 8 回は無観客の対面形式で実施し、出場者がのべ 76 名 (Level I が 56 名、Level II が 20 名、うち二言語出場者 7 名、静岡県内高校生 29 名) でした。

常葉大学に集い外国語を学ぶ若者たちの熱演に対し、審査員が暗唱力、発音、表現力を審査します。会場では出場者、主催者、観客が大きな拍手を送りました。なお、1 月 15 日 (水) には草薙キャンパス内で表彰式を開催し、上位入賞者に賞状と賞品を授与しました。

また、特別企画として、大会開始前に出場する高校生から希望者を募り、学生実行委員が常葉大学草薙キャンパスを案内しました。大会終了後には、有志を募って交流会を開催し、参加者がグローバルコミュニケーション学科の授業内容に関連するクイズを楽しみました。このように、レシテーション大会は在学生同士の、また大学生と高校生の交流の場でもあります。

本誌には、出場者の感想を掲載してきました。しかしながら、昨年度に続き今年度もまた寄稿がありませんでした。来年度は多くの投稿があるのをお待ちしております。

< 入賞者一覧 >

韓国語 Solo 課題: 박 노해 「별은 너에게로」

- | | | |
|-----|-------|---------------------------|
| 1 位 | 二羽 杏実 | 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年 |
| 2 位 | 瀧花 唯瑠 | 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年 |
| 3 位 | 山本 花瑠 | 静岡県立静岡城北高等学校 2 年 |

韓国語 Pair 課題: 홍 수희 「그늘 만들기」

- | | | |
|-----|-------|---------------------------|
| 1 位 | 슈퍼행복팀 | |
| | 鈴木 李香 | 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年 |
| | 三俣 花 | 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年 |
| 2 位 | 부석 | |

	福田 りお	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
	磯部 遙菜	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
3 位	髙三	
	義村 日和	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
	畠中 里佳	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

スペイン語 Solo 課題：Pablo Neruda “20 poemas de amor y una canción desesperada”

1 位	依田 彩花	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 4 年
2 位	なし	
3 位	なし	

スペイン語 Pair 課題：Nicolás Guillén “LA MURALLA”

1 位	Las Fresitas	
	大木 萌々華	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3 年
	望月 来瞳	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3 年
2 位	なし	
3 位	なし	

中国語 Solo 課題：鲁迅《故乡》结尾

1 位	落合 優音	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3 年
2 位	吉村 莉乃彩	静岡県立静岡城北高等学校 2 年
3 位	加藤 もか	静岡県立静岡城北高等学校 2 年

中国語 Pair 課題：余光中《乡愁》

1 位	中国行っちゃいな	
	森下 真千子	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年
	市原 万奈	外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年
2 位	Ling Xiao	
	杉岡 凌太	静岡県立静岡城北高等学校 3 年
	濱松 心咲	静岡県立静岡城北高等学校 3 年

IV. 2. 多言語レシテーション大会

3 位 黄河

佐藤 里佳 静岡県立吉原高等学校 2 年

唐井 麻琴 静岡県立吉原高等学校 2 年

ポルトガル語 Solo 課題：Carlos Drummond de Andrade “Mãos dadas”

1 位 川口 哲平 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

2 位 佐野 涼太 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

3 位 山村 サラ 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

ポルトガル語 Pair 課題：César Obeid “Desafio do Trava-Línguas”

1 位 ゆきみだいふく

榎下 友菜 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年

植田 晴名 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年

2 位 Sabiá laranjeira

浅沼 芳華 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 4 年

小井 麻央 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 4 年

3 位 melão inteiro

渡邊 望 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

依田 麻唯 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

< 審査員 >

韓国語：崔 慶原（常葉大学教員）、柳 采延（常葉大学教員）

スペイン語：岩崎 ラファエリーナ（常葉大学非常勤講師）、三村 友美（常葉大学教員）

中国語：盧 思（画家・京劇俳優）、戸田 裕司（常葉大学教員）

ポルトガル語：ホザンジェラ 岩瀬（常葉大学非常勤講師）、江口 佳子（常葉大学教員）

< 学生実行委員 >

[実行委員長] 佐口健心

[実行委員] 中村真大、谷津亜門、鈴木来奈、清水美緒、一圓天舞、佐野嵩真

[ビデオ撮影] 木村菜々美

[ボランティア] (3 年) 松田千潤、(2 年) 見機羅良

(1 年) 磯部遥菜、大畑育海、木下可南子、福田りお

(以上、本学外国語学部グローバルコミュニケーション学科生)

< 教職員 >

市川真矢 (編集)、江口佳子 (統括、学生補助)、谷誠司 (審査、編集)、崔慶原 (編集)、増井実子 (高校)、三村友美 (会計)

< 公式サイト >

常葉大学多言語レシテーション

https://www.tokoha-u.ac.jp/language/recitation_contest/

<https://sites.google.com/site/tokoharecitation>

パンフレット巻頭言より再録

四言語で描く多彩な世界

外国語学部長 増井 実子

この度は多言語レシテーション大会にご出場いただき、誠にありがとうございます。本大会は、グローバルコミュニケーション学科で学べる韓国語、中国語、ポルトガル語、スペイン語という四つの言語の課題文（詩や文学作品）の暗唱を通じて、その言語の魅力を深く感じていただく機会になっています。

今年も、大学生と高校生が一堂に会し、ソロ部門とペア部門で競い合います。それぞれの言語の響きやリズム、そしてその背後にある文化を感じ取っていただけることと思います。魅力的な課題文が揃っておりますので、皆さんの暗唱がこれらの作品に新たな命を吹き込むことを楽しみにしています。

私は、常々「美しい暗唱は美しい音楽のようだ」と感じています。たとえば私はスペイン語教員ですので、スペイン語部門の詩の内容は理解できますが、韓国語はわかりません。それでも、韓国語部門の出場者の声や演技力を通じて、その表現が上手いのかそれともそうではないのかをなぜか感じ取れてしまうのです。言葉の内容はわからなくても、感情や表現の深さが伝わってくる瞬間は、まさに言語の枠を超えたものだと思います。今日はぜひ、皆さん一人ひとりが表現者として、言葉を通じて自分の世界を存分に表現してください。

また、この大会に向けて懸命に練習を重ねてきた全ての出場者に、心からの敬意を表します。ソロ部門は自分の力で言葉の美しさを表現する孤高の場ですし、ペア部門は二人の相乗効果により詩の世界を広げる場となるでしょう。皆さんがこの場に立つために費やした時間と努力は、言語学習として成果を生むと信じています。

最後に、大会の成功にご尽力いただいた関係者の皆様にも、深く感謝申し上げます。本大会が、出場者一人ひとりにとって有意義な経験となり、さらなる学びと挑戦の原動力となることを心から願っております。

言葉の力を感じるひとときに

グローバルコミュニケーション学科長 谷 誠司

本年度も「多言語レシテーション大会」を開催できることを大変嬉しく思っております。

この大会は単なる詩歌の暗唱・朗誦にとどまらず、各言語が持つ歴史的背景や文化的な深みを参加者全員が共に感じ取り、体験する場であります。かつて本学の学長であった西頭徳三先生の言葉¹を借りると、朗唱は単なる言葉の再現を超え、その言葉が生まれた「時空」を体験することに他なりません。

西頭先生が北陸で体験された万葉朗唱の会は、まさにその「時空」を実感する貴重な機会であり、この大会もまた詩歌の持つ力を再確認し、言葉の奥深さを感じ取る場でありたいと考えております。

日本語とドイツ語で作品を手がける作家、多和田葉子氏は『エクソフォニー：母語の外に出る旅』²でこう書いています。

「母語の外に出てみたのも、複数文化が重なりあった世界を求め続けるのも、その中で、個々の言語が解体し、意味から解放され、消滅するそのぎりぎり手前の状態に行きつきたいと望んでいるからなのかもしれない。」

「外国語を学ぶということは、新しい自分を作ること、他の自分を発見することでもある。(中略) 日本語でものを書いている限り、タブーに触れないようにする機能が自動的に働いてしまう。それが、他の言語を使っていると、タブー排斥機能が働かなくなって、普段は考えてもみなかったはずのことを大胆に表現してしまったり、忘れていた幼年時代の記憶が急に蘇ってきたりもする。」

母語の枠を超えて、多様な言葉が飛び交う場を共にすることで、言葉の力を再認識し、皆様にとって貴重なひとときとなることを心より願っております。どうぞ素晴らしい時間をお過ごしください。

¹ 西頭徳三「巻頭言 私の朗唱体験」『2016年度第3回常葉大学多言語レシテーション大会』(大会パンフレット)、2016年12月。→ <https://sites.google.com/site/tokoharecitation/purpose>

² 多和田葉子『エクソフォニー：母語の外へ出る旅』岩波現代文庫、2012年。

審査委員講評

韓国語審査員講評

審査員：崔慶原、柳采延

[ソロ部門]

レシテーション大会の韓国語審査を担当した常葉大学外国語学部の崔慶原と柳采延です。緊張感が漂う中でも、皆さんしっかりと実力を発揮してくれました。発表者の熱意が伝わってきて、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。ありがとうございます。

今回皆さんが朗読してくださったパク・ノへの「별은 너에게로(星はあなたへ)」は、人生という道に対して不安と恐れを抱きながら歩んでいる人々への励ましのメッセージです。まずは自分がこの詩から受け取った慰めや勇気を他の人に伝えようとする気持ちで朗読すれば、気持ちを乗せることができたと思います。

発音においては、「주저앉지 [주저안찌]」のように最後が濃音化する単語が多くありました。また、「ㄷ」の発音が続く「달려오고」の発音に気を付ける必要がありました。

入賞した3人は、発音だけでなく表現力においても優れていました。相手に語りかけるような口調で発表してくれたので、現実の難しさに挫けることなく、希望をしっかりと持って歩んで行こうという気持ちにさせてくれました。「절망하지 말아라」, 「주저앉지 말아라」, 「구름 때문이 아니다」, 「불운 때문이 아니다」の部分では力強さが、「간절하게 길을 찾는 너에게로」では優しい心が伝わってきました。こうした表現力が順位の決定に大きく影響しました。1位の二羽杏実さんは詩を完璧に覚えただけでなく、滑らかな発音と、落ち込んでいる人を優しく励ますような優しい口調で、朗読してくれました。2位の瀧花唯瑠さんは、よく準備されたジェスチャーとともに上手に抑揚・強弱をつけながら、朗読してくれました。完璧に暗記できていたら、更に良かったと思います。3位の山本花瑠さんは、韓国語を独学で学んで来たと聞きましたが、発音がとても綺麗だったので聞きやすかったです。詩人が表現しようとしたメッセージを考えながら表現できれば、更に良かったと思いました。

これからも韓国の詩を楽しみ、自分の感情を表現する面白さを味わいながら、

韓国語の学習を続けて下さればと思います。どうもありがとうございました。

[ペア部門]

レシテーション大会の韓国語審査を担当した常葉大学外国語学部の崔慶原と柳采延です。ペア部門の朗読には5組が参加してくれました。皆さん、本当にお疲れ様でした。

今回皆さんが朗読してくださった洪・スヒ「그늘 만들기 (日陰づくり)」は、悲しみや喜びを分かち合う友の大切さを描いた作品です。友の存在に感謝し、その温かさを思い浮かべながら朗読すると良いでしょう。

発音においては、濃音が入っている‘땡벌’や‘손깍지’、‘끼워’が難しかったかもしれません。나뭇잎と나뭇잎이는、鼻音化とㄴ挿入が起こり、나뭇잎[나문닙]と나뭇잎이[나문니피]と発音されます。それ以外にも、ㄴ挿入現象が起こる‘한여름[한녀름]’、‘끼워’や‘쉬어’のように‘어’と‘워’の発音の区別などに注意が必要でした。

入賞した3組は、このような部分を正確な発音で違和感なく朗読してくれました。表現力豊かなパフォーマンスを披露してくれました。一人では寂しく、休める陰を作れないことから2人が一緒になることが大切である、というメッセージをナチュラルに表現していることが順位の決定に非常に重要でした。1位から3位までの差はほんの僅かで、とても素晴らしいパフォーマンスでしたので、順位をつけるのがとても難しくて悩みました。1位の허영복팀が息をあわせて一緒に詩を朗読する楽しさを最もよく表現してくれました。朗読している2人が楽しんで発表していることが伝わってきて、観ている側もとても楽しかったです。2位の부석은は2人で陰を作ることを、立つ位置を変えながら表現したのが印象的でした。もう少し息を合わせて発表してくれたら更に良かったと思います。3位の썬은は発音が滑らかで聞きやすかったです。緊張感を乗り越えて、よりナチュラルな表現ができた良かったと思いました。

これからも韓国のあらゆる作品を楽しみ、自分の感情を表現する面白さを味わいながら韓国語の学習を続けて下さればと思っています。どうもありがとうございました。

スペイン語審査員講評

審査員：三村 友美、岩崎 ラファエリーナ

[ソロ部門]

(三村)

ご発表はとても良かったです。作品をよく理解した上で、的確に暗唱できている様子がよく分かりました。聴衆にとっても、ステキな「鑑」になったことでしょう。今回の成功体験を機に、今後もスペイン・ラテンアメリカ文学の珠玉の暗唱・朗唱に積極的にチャレンジなさるよう、審査員一同期待いたしております。ありがとうございました。

(ラファエリーナ)

Muy buena tu presentación. Has memorizado y comprendido el significado de ese poema. Espero que el próximo te animes y participes otra vez.

[ペア部門]

(三村)

お二人のご発表、素晴らしいものでしたね。テキストの暗記も正確なものだし、発音も良く、息もピッタリ合った、申し分のないご発表でした。ご尽力ありがとうございました。この調子で、今後ともスペイン語作品の暗唱を、皆の範としてお続け頂きますよう、切にお祈り申し上げます。

(ラファエリーナ)

Vuestra presentación en grupo ha sido muy buena. Habéis hecho un excelente trabajo. Espero que continuéis motivadas con estudio del español.

中国語審査員講評

審査員：盧 思、戸田 裕司

[ソロ部門]

今年の参加者はみなより良く中国語を話すことに努力していました。これは確かに大切なことで、良い発音は中国語を話すために最も重要な基盤です。ただ、一部の皆さんに1字1字の発音にとらわれるあまり、語句や文全体の流れを見失っている傾向が見られたことは残念です。今回の皆さんの順位の差は、主にこの部分でついたものです。

参加者の皆さんの真剣な態度は、今後の更なる発展を期待させるものでした。皆さんが更に研鑽に努め、文字の内容を伝えることだけでなく、文字の背後の情感を理解し、さらに深く作品そのものを体現できるようになることを期待しています。自分を信じて学習すれば、皆さんはきっとそれを達成できます。

[ペア部門]

今年の参加者はみな作品を十分に暗記し、それを正確に再現することに多大な努力を費やしてきたことを、窺い知ることができます。基礎をゆるがせにしない態度は大いに称賛されるべきものです。

発音の正確さは追求されなければなりません、作者が作品に込めた「想い」をいかに表現するかという点はさらに重要です。1位を獲得したグループは、この点で最も優れたパフォーマンスを見せてくれました。

ソロ部門参加者同様、ペア部門参加者の皆さんの真剣な態度は、今後の更なる発展を期待させるものでした。皆さんが更に研鑽に努め、文字の内容を伝えることだけでなく、文字の背後の情感を理解し、さらに深く作品そのものを体現できるようになることを期待しています。自分を信じて学習すれば、皆さんはきっとそれを達成できます。

ポルトガル語審査員講評

審査員：ホザンジェラ 岩瀬、江口 佳子

ポルトガル語部門に出場してくださった学生の皆さん、ポルトガル語の詩やコルデル（ブラジルの口承詩）の朗唱に取り組んでくださり、ありがとうございます。審査は、ホザンジェラ岩瀬マルチンスと江口佳子が行いました。皆さんは、モデル音声を繰り返し聴いて、課題文を声に出し、発音を確認しながら本番に備えたと思います。また、ペア部門の出場者は、パートナーとのやり取りやリズムの練習を重ねたことでしょう。

ホザンジェラから皆さんへのメッセージをお伝えします。

（全員へ向けて）

Todos vocês lutaram muito para enfrentar seus medos e desafios, e só por isso, já estou muito orgulhosa de todos vocês. E para continuarem progredindo em seus aprendizados, estarei aqui para apoiá-los nesse caminho. Meus parabéns a cada um de vocês.

（皆さんは、自らの不安と挑戦に立ち向かうために努力をしました。だからこそ、全員を誇りに思います。皆さんの学びが向上し続けるために、私はその道を応援します。あなた方一人ひとりにおめでとうの言葉を伝えます。）

〔ソロ部門〕 “Mãos dadas” Carlos Drummond de Andrade

第1位 川口 哲平さん

Fiquei muito impressionada com a capacidade expressar as emoções na entonação de sua voz, além dos seus gestos e postura.

（ジェスチャーや姿勢だけでなく、声のイントネーションで、感情を表現することができており、感動しました。）

第2位 佐野 涼太さん

A expressão de sentimento da poesia foi tímida, mas demonstrou firmeza na voz e pronúncia perfeita.

(詩の感情表現は少し弱かったですが、声は揺ぎなく、発音は完璧でした。)

第 3 位 山村サラさん

A expressão foi muito boa e transmitiu sentimentos. Mas precisa melhorar algumas pronúncias.

(表現力はとても豊かで、感情を伝えられていましたが、いくつかの発音を良くする必要があります。)

第 4 位・第 5 位

二人とも暗記が完璧で、安定して確かな発音でした。表現力が伴えば、さらに良くなります。二人が挑戦した勇気を称えます。

[ペア部門] “Desafio do Trava-Línguas” César Obeid

第 1 位「ゆきみだいふく」(榎下友菜さん、植田晴名さん)

Sei que lutaram contra a própria timidez, e eu as admiro muito por isso. A pronúncia, a memorização e as expressões foram perfeitas.

(二人が自らの内気な部分を乗り越えたことがわかります。だから、あなたたちを心から称賛します。発音、暗記、表現が完璧でした。)

第 2 位「Sabiá laranjeira」(浅沼芳華さん、小井麻央さん)

Fiquei impressionada com a memória e pronúncia da Mao, que só um pouco tempo estuda português. Creio que memorizar tudo deva ter sido muito difícil. A Honoka como sempre ter um ótimo desempenho e com certeza apoiou muito a sua parceira.

(麻央さんは、ほんのわずかの期間しかポルトガル語を勉強していないのに、暗記と発音が素晴らしかったです。すべてを暗記することはとても難しかったことと思います。芳華さんは、いつものように最高のパフォーマンスでした。きっと、パートナーを支えたことでしょう。)

第 3 位「melão inteiro」(渡邊望さん、依田麻唯さん)

IV. 2. 多言語レシテーション大会

No primeiro ano já conseguir toda essa segurança e desenvoltura é impressionante. Temos que praticar mais memorização e corrigir algumas pronúncias. Estou aguardando vocês no 2o ano ansiosamente.

(二人はまだ1年生なのに、こんなに安定してのびのびと発表したことに感銘を受けました。暗記と、いくつかの発音を練習する必要があります。2年生で一緒に勉強するのを楽しみにしています。)

以上がホザンジェラからの講評です。ブラジルにはそれぞれの時代や地域の人々の心を表した詩が多く存在しています。レシテーション大会を機会に、ブラジルの“言葉の文化”にも関心を持っていただけたら嬉しいです。出場して下さった皆さんには、その努力への敬意と感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

3. 社会人基礎力養成

新卒として就職活動ができる価値についての一考察

谷口 茂謙

厚生労働省が令和 6 年 10 月に発表した「新規学卒者の離職状況」に関する資料 (<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137940.html>) によると、大学の新卒で 3 年以内に離職した者は、平成 22 年から令和 3 年までのデータ (<https://www.mhlw.go.jp/content/11800000/001318986.pdf>) で、31% 以上が続く。近年はおよそ 3 人に 1 人の割合で新卒者が離職している。

同じく同省が令和 6 年 8 月に発表した「令和 5 年雇用動向調査結果の概況」(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/doukou/24-2/dl/gaikyou.pdf>) によると、25～29 歳の男性が前職を辞めた理由の上位 2 つが、「仕事の内容に興味が持てなかった」14.1%、「労働時間、休日等の労働条件が悪かった」10.6%である。女性の上位 2 つは、「職場の人間関係が好ましくなかった」14.8%、「労働時間、休日等の労働条件が悪かった」18.4%となっている。就職する場合、希望した組織に後から自分が入っていくので、職場の人間関係を選ぶことはできない。職場に入るまでわからないことが原因なので、「人間関係が好ましくなかった」という理由は、良好な人間関係を構築する本人の努力が足りなかった恐れを差し引いても、離職の理由として理解の余地は十分にある。その一方で、「仕事の内容」や「労働条件」は、就職する前からわかっている。それを理由に離職することは、就職活動のやり方次第で避けられるはずである。そのような離職者を少しでも減らすことを目指して、学生時代に将来の理想像を描くことの重要性を考察する。

関東で人材サービスを提供する P-CHAN 就活エージェントは、2024 年 11 月 10 日付のウェブサイト記事 (<https://p-chan.jp/agent/agent-column/merit-and-demerit/>) で、新卒として就職活動をするもののメリットをいくつか挙げている。その中に「就活にかけられる時間が多い」と「現在のスキルではなく将来のポテンシャルで評価してもらえる」の 2 つが含まれている。就職活動にかけられる時間が多いことを、学生たちに実感させることは難しい。その理由は、働き

IV. 3. 社会人基礎力養成

ながら次の就職先を探す苦労を想像することができないからだと考えられる。新たな就職先を探していることは、当然のことながら、職場の仲間には秘密にする必要がある。インターネットで求人情報を探す程度のことは秘密裡にできても、面接を求められれば、突然に有給休暇を申請することになる。無断欠勤をすれば、その理由を厳しく問われるばかりか、減俸などの処分につながる恐れもある。体調不良での欠勤にすれば、それはありうことで、深く詮索されないと思われるかもしれない。しかし、前日まで元気で勤務していた者が、その日だけ突然に休まねばならぬほど体調が悪くなり、翌日はまた元気に勤務する様子を、周囲の仲間たちは目にすることになる。口に出して言わないだけで、欠勤の理由が体調不良ではないことを仲間たちは悟る。最初の欠勤で面接を受けた会社に就職が決まれば良いが、そんな欠勤を繰り返すようでは、社内での自分の信用を落としてしまい、その職場で働き続けることがより一層難しくなる。仕事を持っている状態では、学生時代ほどいくつもの会社を受験できるだけの時間はない。そのため、働きながらの就職活動は、選択肢が極めて少数に限られてしまうのである。

新卒での就職活動は過去の実績を問われない。卒業までに取得した語学検定のレベルが低いなど、就職活動までに身に付けられたスキルの程度が低くても、将来の成長に対する期待のみで採用してもらうことも可能である。これは、一生に一度、新卒での就職の際に認められる特権である。筆者の事例は、必ずしも多くの学生にとって適切ではないかもしれないが、勤務先を変えることの難しさを感じてもらうために紹介する。埼玉県内のとある短期大学に在職していた私は、2004年に本学の教員公募に応募した。実は、1998年から新たな勤務先を探し続けていたが、面接にさえなかなか至らず、7年目でやっと本学に転勤するチャンスを得た。働きながらであり、就職活動をする時間が限られたことはもちろんだが、勤め先を変える場合、新卒とは違って、必ず過去の実績が問われる。筆者の業界では、論文の数が問われることは当然だが、それだけではない。大学の社会的役割が大きく変化し、俗に言う「大学全入時代」の到来を見据えた頃から、研究だけでなく、教育の実績も強く求められるようになった。筆者の場合、英語やビジネス実務の教育実践から論文につなげる努力を積み重ねた。ところが、本学に応募した際に、困ったことがあった。当時は、授業のビデオ審査を取り入れる大学はまだ少なかったが、本学への応募には、授業映像の提出が求められたので

ある。当時、筆者は個人所有のビデオカメラさえ持っていなかった。勤務先のカメラを使うことはできたが、突然に、授業の映像を撮影したら、同僚はもちろん学生たちにも、他大学への移籍の可能性を見透かされたに違いない。採用が保証されていない応募の段階でそのような状況に陥るとすれば、まさに墓穴を掘ることになる。転職できなければ、その後の職場では、文字どおり「死に体」での生活が続くことは目に見えていた。時代に応じた実績が問われることが身に染みる思いであった。ビデオを提出しなかったので、書類不備で審査もされまいと諦めていたところ、本学から不備の理由を問い合わせるメールをもらった。事情を説明する返事を送ると、英語で指導案を作成して予め提出した上で、それに基づく模擬授業を面接の際に実践することを条件に、審査してもらえることになった。

本学以外でビデオの提出は求められなかったものの、このような幸運に恵まれるまでに7年かかった。本学より前に書類審査を通過し、面接に至った大学もあったが、わずか二校のみで、もちろん採用されなかった。これらのことを思うと、自分の理想により近い職場を探すことは極めて難しいと実感している。筆者の場合、職場が変わる際に厳しく実績を問われるので、他の業界よりも移籍が難しいと考えられる。そのため、現代の若者の事情とそのまま比べることはできない。また、少子化の影響で、若い人材を確保できない会社が多い現代では、中小企業を中心に様々な業界で人手不足の状態である。多くの業界では、昔と比べて、より簡単に転職できることも現実である。転職斡旋エージェントのテレビCMも盛んで、そうした業者の仲介で転職者を積極的に採用する会社も増えている。CMの中には、登録するだけで引く手数多の状態になると思わせるものもある。ところが、そのようなCMも「採用が約束される」、「理想の転職ができる」などとは決して言わない。そこが巧妙である。現代でも転職の際には、新卒とは違ってやはり、それまでに身に付けた知識やスキルを証明する実績が問われるのだ。

では、新卒で3年以内に、「仕事内容に興味を持てなかった」、「労働条件が悪かった」という理由で転職を試みればどうなるであろうか。興味を持ってない状態では、熱意を持って仕事に取り組むことはできない。熱意のない仕事に、実績が伴うはずがない。労働条件が悪い場合、例えば、長時間の労働や、負担が重い仕事の場合、結果として、何らかの実績が伴うことがあるかもしれない。しかし、そのような実績を求められる仕事を避けるために、転職を希望するはずである。いきな

IV. 3. 社会人基礎力養成

り全く異なる領域での仕事を望んでも、その領域での実績がなければ採用を期待することは難しいに違いない。一例として、2024 年問題への対応で人手不足が強く懸念されている物流業界、特にトラックドライバーの事例を紹介する。国土交通省による平成 27 年度の調査結果 (https://jta.or.jp/wp-content/themes/jta_theme/pdf/ikusei_teichaku.pdf) によると、トラックドライバーに応募した人の 47.2% が前職もドライバーであった。上のデータは、ドライバーの経験がなくてもトラックドライバーとして就職できている人が半数近くを占めることを示す文脈で提示されている。だが、別の見方として、トラックドライバーの場合、転職するにしても、会社を変えるだけで、果たして本当に理想に近い職場環境を得られたのかという点に疑問が残る。筆者も実は勤務先を変えただけで、職業を変えてはいない。それは共通しているが、より理想に近い環境に移ることができたことは本当に幸運である。幸運に恵まれないと、望むような転職は難しいという現実がある。いつでも思い通りの転職ができるわけでは決していない。より理想に近い職場に移るためには、自分が今いる職場で、次の職場で必要とされる知識やスキル (Employability) を身に付けることが不可欠なのである、

学生でいられる間に、自分の将来のキャリアに活かすことができる知識やスキルを身に付けることができる就職先をしっかりと選ぶ。そうすることが、理想のキャリアに近づく第一歩となる。「どうせ転職するから将来を今から考えても無駄である。現在の学生生活を楽しむために時間を使う」と考えてはならない。自分のキャリアの理想像を描いて、それを実現するために、何を身に付ける必要があるのかを考えるのである。これから就職活動をする皆さんは、概ね 20 年の人生を生きている。つまり、20 年という時間の長さが実感できるはずである。同じだけの時間が経てば 40 歳になる。これまでの時間の中で自分が成し遂げてきたこと、すなわち、自分の成長を振り返ってみよう。まだまだと思う部分もある一方で、随分と大人になったと実感する部分も多いはずである。次の 20 年はゼロからの積み上げではない。これまでに養った力を活かして成長してゆく。特に、仕事での成長は、これまでの 20 年よりも速い成長が期待できる。40 歳の時にどうなっていきたいのか、その理想像を描いてみることである。それを実現するためには、何を身に付ける必要があるのか。それを身に付けるために、どれくらいの時間、どのような経験を積む必要があるのか。そのような小さな問いを、自分に投

げかけ、その答えを見つけることを繰り返す。そこに時間をかけるのである。結果として、新卒でどのような業界でどのような職業に就けば、自分が望むキャリアにつながる知識やスキルを身に付けることができるかがわかる。それは「自分のやりたいことがわかった」ということである。あとは、仕事に関する実績を問われないという新卒の特権を十分に活用して、その仕事ができる就職先に積極的にアプローチすればよい。面接は、プレゼンテーションと共通している。自分が知らないだけで、実は、本番に臨む前に結果は出ている。どれだけ周到に準備したかが勝負を分ける。新卒での就職活動の準備に、決して手を抜くことのないように、しっかりと準備してもらいたい。

4. 臨地実習

中国と日本の考え方・環境の違いから感じる世界の広さ ー中国の価値観と街並みに触れてー

22122009 大木 萌々華

1. はじめに

中国には、日本と同じ文化や似た価値観もあれば、全く異なるものもある。このことは中国を訪れずとも想像できることだが、現地にて文化的差異を体感するならば、より強い印象をもって異文化理解を享受できると実感した。

そこで本稿では、日本と異なる価値観や文化的差異に焦点を当て、中国人における〈積極性〉、中国の〈街並み〉と環境保護という二つのテーマで論じたい。

2. 中国人における〈積極性〉

実習の初日から最終日まで常に感じていたことは、中国人の積極性の高さである。

2024年3月5日の夜、中国で初めての食事をとった。そして、空港の外の世界を歩き、日本ではあまり見られない「積極的な店員」の姿を目にした。店員は客を見つけると躊躇なく話しかけ、「ここで食べていきなよ」「〇〇がおすすめだよ」と言わんばかりの勢いで勧誘していた。日本では、中国



写真1：ドアがなく開放的な店（筆者撮影）

のように開放的な店は少なく、店のドアも閉められていることが多い。しかし、多くの中国の店は中と外が区切られておらず、ドアが開け放たれたままになっている。そのため、店員は客を見つけると、すぐに外に出て呼び込みをすることができる。かつて、日本で呼び込みをしている店員に声をかけられたことがあったが、断ると店員はすぐに立ち去った。しかし、中国では話しかけられたら逃れられないと感じるほど、断る隙を与えない迫力で自分の店をアピールしていた。自

分の気持ちを突き通す積極性が中国の店員にはある。日本人はこの勢いに間違いなくあっさりと負けてしまうだろう。

この積極的な姿は、店員だけではなく、学生たちにも顕著に見受けられた。3月6日、閩南師範大学の学生が私たちの歓迎会を開いてくれた。彼らは、担当グループの学生のみならず、他の学生にも気軽に話しかけていた。これは、博物館見学や街中を散歩しているときにも同様の態度が見られた。日本人学生の多くは、初めに学年を尋ね、学年に応じて話し方を変える傾向がある。しかし、中国人学生は学年の区別なく、初対面は敬語で、慣れてきたらフレンドリーな言葉を使うケースが多い。日本人も初対面は敬語で慣れてきたらフレンドリーな言葉を使うということはもちろんある。また、中国人も学年を聞く人もいると思う。しかし、日本人は親しい関係を築けたとしても、年齢の壁が完全になくなることはおそくない。たとえば、先輩は後輩ともっと仲良くなりたいと思っていても、後輩は先輩への気遣いが大前提としてあるため、どれだけコミュニケーション力が高い人でもその壁を払拭することは難しい。しかし、中国語には敬語がなく、名前に「先輩」をつける習慣もない。ここに中国人の先輩後輩の親密性を生む要因があるのかもしれない。

また、中国人の学生は先生との距離も近く、積極的に質問をしていると感じた。これは性格も関係していると思うが、中国の学生は内向的な人でも、日本人の内向的な人とは違い自分の考えはしっかりと発言していた。さらに、質問した内容を忘れてしまい、再度先生に尋ねるなど、日本人とはかなり異なる様子も散見された。日本人の場合、自分の言動を相手がどのように見なすかを懸念する傾向がある。それに比べ、中国人は自分を大切にしており、自分中心に試行し、自分が困ることはしない選択をする。このような気質が、授業中も間違っているにもかかわらず、自分からどんどん日本語を使う積極的な態度に繋がっているのだと思われる。私は、スペイン語の授業で指名された時に、「学んだ文法や単語が身についているのか確認できる」と肯定的に考えるのではなく、「自信がない所だから当たりたくなかった」と否定的に思っていた。しかし、自信がない所だからこそ、先生に確認してもらえるチャンスだと考えるべきだった。

中国人は日本人と比べて、チャンスを逃さず、自分の考えを強く持ち、それを正直に発言する。そのため、積極的傾向が国民的気質として強く感じられた。そ

IV. 4. 臨地実習

して、中国人学生の〈積極性〉に着目し、日常における常識の違いや感覚の差異について思考することで、私たちの「当たり前」を新たな視点で問い直すこともできると気づかされた。

3. 中国の〈街並み〉と環境保護

私が中国での10日の滞在を通して感じた日本との違いは〈街並み〉である。中国のいたるところにイルミネーションや花、モニュメントがあったことが印象に残っている。

厦門の空港を出てまず思ったことは、色彩が豊かなことである。静岡も比較的草木が多いとは思いますが、色彩の豊かさでは明らかに負けている。厦門だけではなく漳州の中央分離帯や歩道橋はブーゲンビリアで飾られ、道路の真ん中や川沿いには、ガジュマルやバナナの木がたくさん植えられていた。そして、道の途中にモニュメントがあり、公園には豪華なイルミネーションが施されていた。

植物の多さは日本というより、静岡との比較になるかもしれないが、同じ亜熱帯の沖縄と比べても、ここまで草木や花は多くないと感じる。また、イルミネーションはクリスマスからバレンタインにかけて日本でも施されているが、中



写真2：厦門の街中にあったモニュメント（筆者撮影）



写真3：歩道橋に植えられたブーゲンビリア（筆者撮影）



写真4：一年中ある木のイルミネーション（筆者撮影）

国ほど豪華ではない。一方、中国の人は縁起が良く、キラキラとした派手なものが好きであるために、イルミネーションも赤を基調とした華やかなものを施しているのではないかと考えた。

また、中国の中の静岡のような場所とは考えられないほど、漳州は人の動きが活発で、23 時頃になっても街の明かりがついている点が新鮮に感じられた。

さらに、街を歩く中国の人々を見ると、水筒を持っている人が多く、ごみの分別も行っていることから、中国でも、SDGs を意識している様子が垣間見えた。また、日本のようなレンタル自転車もあり、日本と同様に中国（漳州）でも環境づくりに力を入れているのではないかと考えた。



写真 5：街中にある分別式のごみ箱（筆者撮影）

そこで、私は SDGs という点において、中国でも増加しているが、日本ほど多くはない自動販売機について考えた。

私は、日本では至る所に設置されている自動販売機を、中国では一度も見かけず、不便だと中国で生活しているときは感じた。しかし、自動販売機が日本よりも少なく、気軽に飲み物を買えないため、水筒を使っていると考えると、自動販売機は環境に悪影響を与えていると感じた。日本では自動販売機があることが当たり前であるため、気が付かなかったが、環境のためには、自動販売機の在り方も検討する必要があると感じた。日本でも水筒を使っている人は多いと思うが、水筒の中身が無くなってしまったら自動販売機に頼るしかなくなる。しかし、自動販売機ではなく、水筒に直接飲み物を入れられる機械を街中に設置すれば、より SDGs に繋がるのではないかと、中国の人々の様子を見て考えた。また、そのような機械を導入することで、自動販売機が少ない国でも、お店を探す手間が省くことができたり、お店でペットボトルを買うことなく手軽に水分を手に入れることができたりすると考える。

IV. 4. 臨地実習

以上、中国の色鮮やかな街並みから、改めてSDGsについて考えることに繋がり、日本では当たり前だと思っていたことを見つめ直すこととなった。それと同時に、自分が環境保護のためにできることを検討するきっかけにもなった。

4. おわりに

10日間の中国への実習を通して、母国とは違う文化や習慣を体感することができ、改めて、自分の知っている世界の狭さを実感した。そして、同じ人間でも、生活してきた環境が異なるだけで、考え方や行動に大きな差が生まれることを知った。そして、他国の人々との交流によって多様性を理解する大切さを学んだ。さらに、他国の街並みを見て、その特徴を考えることから、自国に足りない意識や考え方を見出せるとも感じた。

したがって、中国の人々との交流は、日本と中国の知識を深め、価値観や文化を知ることに繋がる。さらに加えて、SDGsなどの日本や中国以外の他国にも通ずる共通の問題について、課題を発見する機会にもなる。どの国も抱える共通の問題に、一人ひとりが向き合い、自分なりの意見を持つことで、世界が一つになると考えるからである。

だからこそ、これからも他国に赴き、自分の世界を広げ、中国の人々のように、自分の意見をしっかりと持ち、積極的に発言していきたい。

女性の人権問題として捉える

—「戦争と女性の人権博物館」を訪れて—

22122027 佐藤 茉央

臨地実習の期間中に、グループメンバーと共に「戦争と女性の人権博物館」を訪れた。ここを訪れたいと思ったきっかけは、二年次の協働研究セミナーで、慰安婦問題を学ぶ機会があったからである。この問題の解決が、日韓関係の改善に繋がると考え、問題意識を持ちながら調査を進めた。しかし、日本の文献からは、日本の視点でしか学ぶことができなかったため、韓国社会では、慰安婦問題がどのように捉えられているのか知りたいと思い、フィールドワークのメンバーと調

べた結果、この博物館を訪れることにした。

博物館の外の壁一面には、博物館を訪れた方が書いたメッセージカードが飾られており、そこには韓国語だけでなく、日本語も多く見られた。他の国の言語も沢山あり、慰安婦問題をはじめとする女性の人権問題について関心がある人が、世界中にはたくさんいると感じた。

その他、館内には、被害を受けた女性が書いた日本軍への怒りや、謝罪を求めるメッセージ、当時の苦しみを表現した絵が廊下にくつも飾ってあり、日本で文献を読むだけでは分からない当事者の声が痛いほど伝わってきた。

展示物には、当時の状況を細かく記した図や表なども展示されていた。営業時間や料金表、どの階級の人がいつ利用できるかを記した利用日割り当て表が描かれており、女性がただの道具のように扱われているようで、現実起きたこととは思えなかった。

特別展示にはベトナム戦争で韓国が慰安所を設置していたことが被害者の写真とともに展示されていた。また、今もお南スーダンなどの紛争下において少女の強姦などが問題になっていることを知った。過去から学ぶことなく、現在今でも同じことが繰り返されていることを知り、この博物館が、単なる過去の慰安婦の歴史を伝える施設ではなく、今なお戦時下で苦しむ女性たちの人権について、現代の人々に考させる施設であることに気づかされた。過去に起きた歴史としてではなく、現在や、今後も起こりうる女性の人権侵害をどう食い止めるのか、という問いを投げかけているように思えた。そして「人権問題」という普遍的な側面から、私たちはこの問題に向き合う必要があると感じた。

訪れる前は、韓国では慰安婦問題に関するデモなどが行われている印象が強かったため、我々日本人が行っても良いのかとても不安であった。しかし、この博物館は、反日の感情からできたものではなく、「これからの未来を良くしたい」、「同じ過ちを繰り返して欲しくない」という女性たちの強い願いからできた博物館であることが分かった。

言語を学ぶ上で、その国の人々が歴史をどう理解し、語っているのかを知ることとはとても大切だと思うので、今後更に、その多様な側面に触れ、この問題について理解を深めていきたい。

日韓の共通課題を考えるきっかけ

22122056 星野 伽蓮

現在、日本では少子高齢化や人口減少による人手不足から、外国人労働者の受け入れに力を入れている。機能実習生制度が廃止され、「育成就労」という新しい制度の成立に向けた国会審議が行われる中、「日本語教員養成課程」や「協働研究セミナー」といった大学での学習を通して、外国人労働者について考える機会を得た。そこで、韓国での臨地実習に参加し、「協働研究セミナー」における学びの延長で、韓国ではどのように本課題を捉え、対策をとっているのかを比較検討するに至った。

まず、実習では韓国の富川市にある「外国人住民支援センター」を訪れた。本センターは、人口約 70 万人を有するソウル近郊の富川市にあり、富川市は同センターに業務委託して外国人支援を行ってきた。外国人の韓国語学習支援の他、日常生活の悩みや医療機関での付添など、9ヶ国語での対応が行われていた。

特に、韓国語教育だけでなく、子供の母国語教育が同じ施設で行われていることが印象的であった。母国語教育は、親が韓国語を話せない場合、親子間のコミュニケーションを助けるために必要な支援である。さらに、アイデンティティ問題も含めた支援が行われていた。

日本でも母国語教育は行われているが、日本語学校で実施されるのではなく、外国人学校が担っている。しかし、私達が訪問した富川市の「外国人住民支援センター」では、韓国語教育と母国語教育を一緒に実施していた。こうすることで、子供の韓国語習得と母国語の習得を同時に見守りながら支援できるメリットがある。

日本との大きな違いは、既に韓国語教師が国家資格になっている点である。そこで、国家資格を導入したことによる過去との変化について質問した。資格取得前から韓国語教師をしていた方は、教え方と外国人学習者に対する考えが変わったと回答された。外国人の立場に立って分かり易い説明を試み、教える自信もついたとその利点を説明していた。外国人住民支援センターへの訪問は、日本語教

員を目指す私にとって、教え方や外国人との接し方を改めて考察する良い機会となり、また、日韓の共通課題を考えるきっかけにもなった。外国人受け入れ問題は、日本と韓国が対峙する共通課題といえる。互いの取り組みを参考にしながら対応していけば、多文化共生社会を作る上で大いに役立つはずである。

令和6年度、私は韓国に留学中である。外国人受け入れ問題を含め、日韓両国がともに抱える課題に目を向け、4年次の卒業研究に備えた情報収集を行っている。外国人労働者受け入れ問題に対して、両国がどのように影響し合いながら制度を発展してきたのか、今後の研究に繋げて行いたいと考えている。

グローバルな視点を養う

23122011 植田 晴名

私が韓国の民主主義に興味を持ったのは、一年次に履修した「韓国文化入門」の授業がきっかけだった。韓国は近年まで民主主義ではなかったという事実には驚愕し、日本と韓国の民主主義に対する想いを、実際に現地を確認してみたいと思い、臨地実習に参加した。日本は、第二次世界大戦で大敗し、アメリカに統治されるという形で、民主主義を獲得した。しかし、韓国は日本に統治されていた歴史的背景があり、全く異なる歴史を歩んで民主主義に至っている。臨地実習では、韓国の民主主義の現状を知るために、主に三つの場所を訪れた。

一つ目は、イ・ハニョル記念館である。韓国へ発つ前に、指導教員の崔先生からイ・ハニョルに関する映画を薦められ視聴した。映画は実存したある学生の悲劇を物語り、生々しい事実を知ることとなった。イ・ハニョルという人物は、1980年ごろ激化した学生運動に参加した際、警察が発射した催涙弾が彼の頭部に当たり亡くなった。民主化を希求して、若い青年が命を落としたのである。記念館には、当時、彼が着用していた衣服や、勉強に使ったノートが展示されていた。これらを目の当たりにし、普通の大学生が学生運動に参加して、政府に対して民主化を訴えた帰結の「死」という凄惨な事実が、よりリアルに心に迫ってきた。このような記念館の存在は、韓国社会が民主主義を渴望し、その体制に至る苦闘の歴史を忘却させまいとする強固な信念を表象していると感じた。

IV. 4. 臨地実習

二つ目は、延世大学にあるオブジェを見学した。延世大学はイ・ハニョルが実際に通っていた大学で、催涙弾に打たれた場所でもある。大学の敷地内には、学生デモに関するオブジェが設置されていた。ここにも、民主化への道のりを決して忘れてはならないとする強い想いが刻まれていることを確認した。

三つめは、明洞聖堂を訪れた。民主化運動の際にデモ隊が立てこもり、教会側も積極的に支援したため、今も韓国における民主化の歴史を象徴する場所として認知されている。映画にも頻出しており、その存在に民主化への史実を少なからず感じることができた。

臨地実習で現地を巡った体験は、歴史の再認とそれに対する国家国民の想いをダイレクトに共感するものとなった。このような経験を経て、また新たな問いも生まれてくる。韓国は日本に主権を剥奪され、軍事的に統治された過去があり、韓国の国民はそのことに強く反発していた。日本から解放され、主権を回復後、なぜ独裁政権に戻ってしまったのか。政治において、何を正義とするのか、韓国の政治や社会を考察する上で検討すべき重要な問いの一つではないだろうか。

また、日本には民主主義を勝ち取ったという歴史的背景はない。しかし、むしろこの背景に着目し、これを踏まえて我々は政治や社会、歴史的な問いを立てるべきだろう。臨地実習での経験は、他国との比較検討から多くの学びが得られることを気づかせてくれた。ゆえに、グローバルな視座から思考することを忘れずにいたい。韓国に実際に赴いて、現地の様子や人々の声を聴くことで、自分の考えをより刷新することもできた。韓国の民主化の聖地である光州に行けなかったことは残念だったが、今後の学びに活かせる多くの経験が得られたことに感謝している。

V 各言語圏での活動

1. 英語圏

アメリカ留学を通して学んだ「自由」と「責任」

21121008 池田 実優

2024 年 2 月から 3 月、私は英米語学科の学生として、またアカペラサークルやダンス部に所属し、エンターテインメントを愛する一人の学生として、長い間憧れていたアメリカを訪れました。目的は大学が実施する語学研修プログラムに参加することでした。このレポートでは、アメリカ滞在中に感じた「自由」とそれに伴う「責任」について、自分の視点を通して考えを述べていきたいと思います。

まず、皆さんに質問をしたいと思います。

“ホームステイ”という言葉聞いて、どのようなイメージが浮かびますか？おそらく、「異文化交流」や「アメリカらしい温かい家庭生活」、「ホストファミリーとの楽しい会話や温かいご飯」など、ポジティブなイメージを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。しかし、他方で「言語の壁」や「慣れない生活環境」、さらには「文化の違いによる困難」といった不安を感じる方もいるかもしれません。

私も例外ではなく、渡米前には学内や他大学の先輩たちから体験談を聞き、期待と不安が入り混じった気持ちでいました。ホストファミリーとの連絡が前日まで取れなかったこともあり、不安が募る中、留学初日を迎えることになりました。それでも、「きっと温かいホストファミリーに恵まれるだろう」との期待を胸に、アメリカに到着しました。

しかし、実際にホストファミリー宅に到着してみると、家の説明を簡単に受けた後、「あとは好きにしていから」と言われ、その後の交流について不安を感じました。「もっとみんなで一緒に過ごすのかと思っていたのに…」という焦りが募り、どう接して良いのか分からず悩んだのです。しかし、ホストファミリーの生活スタイルに戸惑いながらも、少しずつ会話を始め、家族の紹介を受けた後、やっと一緒に食事をすることができました。

食事が終わった後も、ホストファミリーは基本的に放任主義で、最初に抱いた「ホームステイ」というイメージとはかなり異なっていました。それでも、この

自由なスタイルが私に「自由」と「責任」について深く考えさせるきっかけとなったのです。

私のホームステイ先はサンタアナという街にあり、語学研修先であるカリフォルニア大学アーバイン校には通学に1時間半もかかります。普段から徒歩で通学していた私は、最初はその距離感に不安を感じていました。留学初日の夜、時差ボケで眠れなかった私は、午前3時頃にホストファミリーの誰かのアラームが鳴り響く音を聞き、「アメリカには日本のようなホスピタリティがないんだな」と実感しました。ホストファミリーはみんなそれぞれ独自の生活スタイルを持っていて、あまり干渉されることなく過ごしていました。

その後、私は少しずつホストファミリーとの交流を深め、夕食の時間にリビングに顔を出し、2歳の子どもと遊ぶこともありました。自分を律して、ホストファミリーとの時間を大切に、積極的に会話をすることを心がけました。そして迎えたアメリカでのバレンタインデー、留学のちょうど中間地点でもあったので、思い切ってホストファミリーに手紙を書いてみることにしました。その結果、彼らはとても喜んでくれ、私の不安は徐々に消えていきました。

それと同時に、他の日本人留学生からはそれぞれのホストファミリーの事情を聞くことも増えました。中には「ホストファミリーが優しいけれど、料理をさせてくれない」「アメリカに来たのに門限があって、行きたい場所に行けない」という声もありました。彼らは、私が最初に抱いたイメージ通りの「ホスピタリティあふれるホームステイ」をしていましたが、それが窮屈に感じる人もいることを知りました。

最終日が近づくと、私は一人でアメリカを旅し、大谷翔平選手が在籍していたエンジェルスドームやカリフォルニア・ディズニーランド近くのダウントウン・ディズニー・ディストリクトを巡ることができました。こうして自由に好きな場所を回れたのは、ホストファミリーが信頼してくれていたからこそです。

もちろん、自由には責任も伴いました。大学内でホームレスに「ご飯をおごってくれないか？」と声をかけられたり、さすらいのラッパーに絡まれたりと、不安を感じる瞬間も何度かありました。ホストファミリーは自由を許してくれましたが、その自由をどのように使うか、どんな時に周囲の人を頼るかとは私自身の判断に委ねられていました。こうしたことから、私は小学校時代に担任の先生から

「自由と責任は深くつながっている」と繰り返し教わったことを思い出しました。アメリカでの経験を通して、その言葉がどれだけ深い意味を持つのか、実感することができました。特に、カリフォルニア・ディズニーランドでの経験が印象的でした。日本では乗車中の撮影が禁止されているビッグサンダーマウンテンですが、アメリカのディズニーでは特に制限がなく、代わりに、もし携帯を落としてしまっても、アメリカで対応してくれる可能性は低いというルールがありました。自由がある一方で、それを使う責任が伴うということを実感しました。

留学初日には戸惑いが多かった私ですが、勇気を出して行動を起こすことで、アメリカでの留学生生活を有意義なものにすることができました。ホストファミリーと過ごした3週間は、私にとってかけがえのない時間となり、今でも彼らとは連絡を取り合い、私の大切な家族のような存在です。

この四月からは、アメリカで学んだ「自由」と「責任」の大切さを胸に、私は社会人として新たな一步を踏み出します。この貴重な経験を活かし、日々成長し続けたいと思っています。

2. スペイン語圏

挑戦と成長の 1 ヶ月 ～スペイン語学研修で得たもの～

22122052 服部 未由羅

2024 年 2 月 3 日から、3 月 4 日まで、スペイン・アリカンテ大学での語学研修に参加した。滞在期間中は、本学の提携校であるスペイン・アリカンテ大学において、スペイン語での授業を受講した。授業以外では市内にある施設の見学や、スペイン国内を巡った。現地では一般家庭でホームステイを経験し充実した時間を過ごすことができた。

私は海外へ行ったのは今回が初めてであり、すべてがカルチャーショックの連続だった。水道水は飲むことができず、ミネラルウォーターは硬水が主流。トイレトペーパーはごみ箱に捨てる。食事は一日 5 回。など日本と違うことばかりで最初は戸惑っていたが一週間もすればスペインの生活に慣れていった。私には「やるからには全力で」と「やらずに後悔よりやって後悔」というモットーがある。スペインでもこのモットーを忘れずに様々なことに挑戦した。

語学力は初級であったため、くらいついていくのに必死の毎日だった。授業はすべてスペイン語で行われるが聞き取れないことも多く、授業中の指示すらもとに理解できなかった。同じクラスには、スペイン語を勉強し始めて数か月の英語圏の学生もいたが彼らはスペイン語見事に使いこなし、分からないことがあれば英語も交えながら質問していた。そんな姿をみて、自分は分からないことがあってもその説明ができないので質問さえもできず、何をしにきたのかと後ろめたく思ったことも度々あった。そこで、今の自分にできることを考え日々の生活を有効に活用しようと工夫した。食事の後できるだけリビングで過ごしファミリーと会話をしたり、一緒に遊んだり、より多くのスペイン語に触れるよう努力した。また、ファミリーにスペイン人の友人が欲しいと相談し、日本語を勉強しているスペイン人を紹介してもらった。彼女とは日本語とスペイン語の両方を交えながらコミュニケーションをとっていた。地元のおいしいレストランに一緒に行ったり、ハイキングに行ったり、一緒にカボエイラをしたり日本ではできない貴重な

経験をすることができた。研修終盤では授業もかなり聞き取れるようになり、スペインでの生活もそつなくこなせるようになっていた。

スペインでは毎日が挑戦で、壁にぶつかったときにどう乗り越えるかが常に問われていた。そこで私は自分らしく、後悔しないためにとにかく全力で挑むことができた。たった一か月の経験ではあったが、trial and error の精神で密度の濃い充実した一か月を過ごすことができた。

日本語の通じない国での生活

松田 千潤

語学研修を始める前に事前にオンラインで開催される事前研修に参加する必要があった。日本語を勉強している学生といくつかのテーマについて話し合う研修だった。アイスブレイクとして、しりとりをした。当時は知識も今の自分よりも知識や語学力なかったため、何も発言ができない時間が多く続いた。かろうじて、名前を聞くことはできても相手の発言を聞き取ることができない場面が多く、日本語で考えが思いつくもどのように伝えたらいいのか全く分からず、ただその時間をパソコンの画面上でうなづくことしかできなかった。

研修が始まり、日本から離れ移動している間まるで夢を見ているかのように窓から見える景色を見ていた。実際に自分は日本を離れ外国にいたと感じたのはホストファミリーに自分の部屋に案内されたときだった。移動の間には友人やガイドの人がいたため、日本語で会話をしていたがホストファミリーは全く日本語を話せない。私のホストファミリーは、両親はスペイン語のみ、娘さんは英語が話せるような状況だった。自分は英語もスペイン語もままならない状況であり、緊張も相まって何も聞き取ることができなかった。最初のコミュニケーションは翻訳機を通して会話をしていた。アリカンテ大学の授業では指名されて、答えるまでに自分一人だけ時間がかかっていた。教室の空気をくずしていたと感じていた。家に帰ると、自分の語力のレベルは最低レベルであるということがより明確になり、簡単な会話もできない悔しさと話したいけど伝わらなかったら相手を困らせてしまうというマイナスな感情の連鎖が授業や家族との会話に積極性をなくし

た。このままの自分に苛立ち、どうにかして学力を身につけて帰国すると決意した。翻訳を使わないようにすることホストファミリーに語学力の向上をサポートしてもらえるように自分の意思を伝えた。ホストファミリーは全力でサポートしてくれた。休日に娘さんの友人と三人でアリカンテを散策し、流行りのカフェに行き日本とスペインの文化を紹介したり、若者スラングを教えてもらったりした。また、自らおいしいバルの場所やおすすめのファッションブランドを聞き休みの日に友人と訪れた。訪れた日の夜には自分の行動をファミリーに報告するようにした。その結果、日がたつごとに会話量も増え、短い文章ではあるが自分の意思を伝えられるようになった。

この研修を通して、現場の環境の中で自分自身の実力が低いと感じたときにあきらめるのではなく、その環境に食らいつく公としたときに自分の意思をはっきり伝え行動することが大切だと実感した。この経験は自分にとってとても有意義な研修になった。



スペインで感じた日本文化の魅力

22122026 佐藤 巴南

昨年の2月から3月にかけて、私はスペインアリカンテ大学での語学研修に参加しました。スペインは地域ごとに異なる公用語を有する多民族国家であり、そのような国での生活は日々が新鮮で非日常的でした。非常に貴重な経験であり、

V. 2. スペイン語圏

振り返ると感慨深いものがあります。

研修中、私（佐藤）はもう1人の研修生（田村）の2人でホームステイをさせてもらいながら現地での生活を送りました。ホームステイは今回で2回目でしたが、1か月という長期間の滞在は初めてだったため、当初は不安もありました。しかし、陽気で親切なホストファミリーに恵まれ、充実した時間を過ごすことができました。

滞在が進む中で、私たちはホストファミリーからある課題を提案されました。それは、大きなキャンバスに日本を象徴するものを描き、家族それぞれの名前を漢字で表現した絵画の制作でした。予想外の絵画制作の依頼には驚きましたが、ホストファミリーの性格から似合う漢字を一字ずつ当てはめ、日本らしさを表現する材料を集めていきました。

制作を進めていく中でなぜホストファミリーがここまで日本文化に魅了されているのか、私はその理由が気になり始めました。話を聞くと、彼らは日本文化に他国や自国にはない美しさを感じているとのことでした。実際、ホストファミリーは東京オリンピックを観に日本を訪れる予定だったが、感染症の影響でその計画が実現しなかったことを話してくれました。また、富士山を直接見ることができなかったことを残念に思っている事も伝えてくれました。他にもアニメ、音楽、スポーツ、料理といった多方面から、日本とスペインの文化について制作を通じ熱心に語り合う中で、改めて自国日本の素晴らしさを実感し、少しでも恩返しができればと思い、気合を入れ絵画制作に取り組みました。

完成した作品には、ホストファミリーの名前を加え、富士山、日の丸、鳥居、梅の花を描きました。絵を贈った際、ホストファミリーは非常に喜んでくれまし



↑実際に描いた絵画



↑ホストファミリーとの記念写真

た。この制作活動は、大学の語学研修と直接関係があるものではないかもしれませんが、日本が持つ文化が国境を越えて愛されていることを実感する貴重な経験でした。文字や絵、言葉を通して、日本についての理解を深める良い機会となり、非常に意義深いものだと思ひ返ります。

この研修を通じて、私は自国の文化に対する誇りを再認識するとともに、異なる文化を尊重し、理解を深める重要性を実感しました。この経験は私の未来においても大きな財産になると思ひます。本当の家族のように接してくれたファミリーの皆に出会えて本当に幸せでした。彼らと与えてくれた経験を忘れず、今後とも日々の学びを深めていきたいと思ひます。

スペイン語学研修に行つて感じたこと

22122040 田村 瑠香

(2024 年 スペインアリカンテ大学 語学研修参加)

2 月から 1 ヶ月間、スペインに語学研修に行った。このプログラムでは現地の家庭にホームステイしながらスペイン語を学ぶことが目的だった。私が滞在したのは、高校生の男の子と中学生の女の子がいる 4 人家族の家庭だった。到着したその日から家族はとても親切に迎え入れてくれ、すぐに居心地の良い環境が整ったのを覚えている。ホームステイ中は、家族と一緒にたくさんの時間を過ごした。例えば、スペインの伝統的なボードゲームや「ウノ」などのカードゲームと一緒に楽しんだ。ゲームを通じて笑い合ひながら自然に会話が生まれ、スペイン語に触れる良い機会となった。また、毎日の食事とも家族が作ってくれて、どれもとても美味しかった。朝ごはんやおやつのパン、昼ごはん、夜ごはんといった食事からは、スペインの家庭料理の魅力を存分に味わうことができた。私も感謝の気持ちを伝えたいと思ひ、帰国前に日本らしいお礼を用意した。大きな画板を使って富士山の絵を描き、その横にホストファミリー全員の名前を漢字にあてて書いた。その作品をプレゼントすると、家族はとても喜んでくれた。この瞬間、文化を共有する喜びを実感し、ますますホストファミリーとの絆が深まった気がした。また、この 1 ヶ月間、スペイン語を学ぶ環境としては最高だった。日本で勉強して

V. 2. スペイン語圏

いるときよりもずっと速いペースで言葉を身につけることができた。特にホストファミリーは毎日簡単な単語テストを出してくれたり、家族全員がゆっくりと分かりやすい言葉で話しかけてくれたため、少しずつ会話が成立するようになった。最初は緊張していたものの、次第に自分の言葉で話す楽しさを感じられるようになった。最終日には、ホストファミリーからネックレスやスペインの伝統的なお土産をプレゼントしてもらい、別れが本当に名残惜しかった。彼らの温かいおもてなしと優しさのおかげで、語学だけでなく人となつながら喜びも得ることができた。ホストファミリーは大の日本好きで、日本の文化や食べ物に興味を持っているそうだ。しかし、コロナの影響でまだ一度も来日できていないとのことだった。そのため、いつか彼らが日本を訪れる際には、ぜひ一緒に日本の観光地を案内したいと考えている。私が感じた日本の魅力を直接彼らに伝えられる日を心待ちにしている。現在も頻繁に連絡を取っており、近況を報告し合うなど親しい関係を続けている。ホストファミリーとの交流は、私の人生においてかけがえのない経験となった。この素晴らしい絆をこれからも大切にしていきたいと思っている。

2024 年度 スペイン・ラテンアメリカ特別研究 サブレポート抄録

2024 年度のスペイン・ラテンアメリカ特別研究では、6 人の受講者がサブレポートの執筆に取り組んだ。以下、抄録とキーワードを紹介する。

担当 増井 実子

21122002 秋山 ひより

『ゲルニカ』から考える人権問題と戦争

本レポートでは、スペイン内戦、特にゲルニカ爆撃に影響を受け制作された、パブロ・ピカソの傑作『ゲルニカ』を軸に、戦争における民間人の人権侵害や反戦アートについて考察を深めた。『ゲルニカ』を中心に、現代アーティストの反

戦アートにも触れ、戦争と人権に関する表現の多様性を論じた。また、『ゲルニカ』が現代でも平和と人権の象徴として多くの人々に影響を与えている普遍性について考察し、人権教育や国際社会での活用の重要性を述べた。結果、『ゲルニカ』が持つ普遍性は、現代の戦争や人権問題に対しても強い影響を与え続けており、今後その役割をさらに拡大させる必要があると結論づけた。

キーワード：『ゲルニカ』、人権、反戦アート、民間人の犠牲、普遍性

21122017 落合 沙文

スペイン語における日本語のオノマトペ表現について ―漫画『ジョジョの奇妙な冒険 Part3』に見るオノマトペ翻訳の難しさ―

本レポートでは、日本語のオノマトペの特殊性と他言語との相違点を明らかにし、それが翻訳時に生じる問題にどのように影響を与えるかを調査する。特に、日本の漫画におけるオノマトペを題材に、『ジョジョの奇妙な冒険 Part3 スターダストクルセイダース』の日本語版とスペイン語翻訳版を比較し、擬態語を中心としたオノマトペの表現方法や翻訳に伴う課題を分析した。日本語のオノマトペが他言語と比べて創造性に富み、表現の幅が広い一方で、その視覚的効果やニュアンスを他言語に再現する難しさが翻訳の障壁となっていることを示した。

キーワード：日本語のオノマトペ、スペイン語翻訳、漫画、翻訳困難、

『ジョジョの奇妙な冒険』

21122034 鈴木 桜子

スペイン語圏における日本語教育の課題と指導法―スペインの学習者が直面する学習困難を中心に―

本稿では、世界各地の日本語教育の現状を概観し、日本語教育機関数、日本語教師数、学習者数について整理した。外国人の日本語学習者が直面する学習困難点を検証した。スペイン語圏の日本語学習者に特有の学習困難点は確認されなかったものの、共通する課題として、漢字の習得と助詞の使い分けに焦点を当て、これらの困難点について論じた。さらに、スペインで活動する日本語教師へのイ

V. 2. スペイン語圏

インタビューを通じて、教育現場の意見や視点を取り入れた。これらを踏まえ、漢字の習得と助詞の使い分けに関する効果的な指導方法を提案する。

キーワード： 日本語教育、学習困難点、漢字、助詞、スペイン語圏

21122043 堤 彩華

スペインと日本における LGBT の受容とツーリズムの発展

本稿では、LGBT ツーリズムの概要を整理した。スペインと日本における LGBT ツーリズムの歴史と現状について考察した。スペインでは LGBT の権利が法的に保障され、観光業においても積極的な受け入れが進んでいる一方で、日本では法整備の遅れや社会的な無関心が課題となっている。両国の比較を通じて、日本が LGBT ツーリズムを発展させるための具体的な提案を行った。本稿は、観光業における多様性の尊重と、すべての人が快適に観光を楽しめる環境づくりに寄与する一助となることを目指している。

キーワード：LGBT ツーリズム、観光業、多様性、スペイン、日本

21122047 野副 文那

なぜアステカ・マヤのデザインは現代アートに影響を与えているのか

本レポートでは、アステカ・マヤ文明の芸術的要素が現代アートにどのように影響を与えているのかを考察したものである。特に、タトゥーとウォールペインティングにおける古代文明のモチーフの活用に焦点を当て、それらが現代のメキシコ社会でのアイデンティティ形成や社会的プロテストの表現法手段として機能している点を分析している。また、アステカ・マヤ文明の神々や自然との関係性を示すデザインが SNS を通じてグローバルに共有され、若い世代の文化的アイデンティティ形成に重要な役割を果たしていることも指摘する。さらに、メキシコ政府による文化政策や観光復興の観点からも、これらの現代アートの意義を論じている。

キーワード：アステカ・マヤ文明、現代アート、アイデンティティ

21122052 間嶋 柚月

スペインのアニメ業界の現状と今後

スペインは世界で第5位のアニメーション生産国であり、特に3Dアニメーションの分野においてアメリカに次ぐ制作能力を有している。また、自治州によっては固有言語を持つという歴史から、アニメが言語学習や地方言語の普及の一助になったという背景を持つ。本レポートでは、スペインのアニメ業界の現状と今後の方向性について、市場規模、字幕や吹き替え、アニメーターの状況といった観点から考察を行った。

キーワード：アニメ業界、スペイン、3D アニメーション、字幕・吹き替え、
地方言語

3. ポルトガル語圏

ポルトガル食文化について

22122023 佐口 健心

ポルトガルの食事は、温暖な恵まれた気候と地中海に面していることにより、オリーブオイル、豊富な香辛料、新鮮な魚介類や海産物を用いた独特な料理があり、外食も、伝統的な家庭料理から高級レストランまで幅広い選択肢がある。またポルトガルの食卓は家族や友人との交流の場でもあるため、食事を楽しむ文化が根強く残っている。本レポートでは、私が訪れたポルトガルでの1か月の生活をもとにポルトガルの食文化について述べていく。

最初に、ポルトガルでの食材調達である。語学研修中に滞在した語学学校 CIAL のシェアアパートでは、食事は各自で賄う必要があった。ポルトガルは主に、スーパーや市場で食料品が売られている。スーパーは日本とは違い、量り売りが主流で野菜や果物には100g当たりの値段が記載されており、レジで値段が分かるシステムになっている。



ポルトガルの主食はパンと小麦である。しかし、2週間ほどたってから、スーパーには、日本の米と同じような種類の米が売られていることに気づいた。このため、ポルトガルの主食は、パン・パスタ・米の3種類が食卓を支えていることがわかった。中でもパンはとても安く購入することができ、バゲットは1本30センチくらいのものが約80円で、他の種類のパンも100円程度で購入できるものがほとんどだった。肉類や魚介類については、日本とほぼ同様の価格で売られており、エビが少し安く購入できるという印象であった。そのほかにスーパーでの日本との違いは、ペットボトルは、6本入りの包装から1本を、包装を破いて取り出す必要があり、最初にその状態を見たときには、盗んでいるように見えたため戸惑いを感じた。調味料は基本的に塩、胡椒、オリーブオイルがメインで日本の調味料である醤油や味噌も購入することができるが、ボトルの醤油が1本あ

たり約 2000 円で、味噌も高価であった。一方で、唐がらしなどの香辛料は安く購入することができ、小さなボトルで 80 円ぐらいであった。

次にレストランについてである。リスボンには家庭で庶民的なレストランから高級レストランまで幅広くある。研修中はリーズナブルなレストランを利用したが、数回だけ調査の目的もあり、少し高いところにも行ってみた。一般的なレストランの価格帯は前菜からメイン、デザートまでで約 3000 円であった。メニューの表記も日本語表記があるレストランもあった。



料理ごとに番号が付けられていて、番号で注文するという形式であったため、注文は容易であった。メニューでは、魚介類が豊富で特産品のタコやイワシはこのレストランにもあった。日本のレストランと異なる点は、水が無料で提供されないため、ビンの水を注文する必要があるところである。レストラン内を見渡したところ、ポルトガル人は、食事と一緒にワインを飲んでいる人がほとんどで、食事はワインで楽しむ習慣があることを実感した。料理の味付けは日本より薄目でシンプルだった。リゾットやサラダには基本的にパクチー等の香葉が添えられていた。少し高級なレストランでもメニューはほぼ類似していたが、違いとしては 1 テーブルに 1 人のウェイターが付き、その人が料理の提供から最後の会計までを担当していたことである。更にどのようなレストランでも店員の接客が丁寧で、チップの制度があるから、高評価を得るために良いサービスをしているのではないかと感じた。



最後に、ポルトガルのカフェについてである。ポルトガルに到着してから感じたのは、町の至るところにカフェがあることだった。1 つの通りで 2 ～ 3 軒のカフェを見かけた。語学学校にもコーヒーの自動販売機があり、いつでもコーヒーが飲めるようになっていて、ポルトガル人はコーヒーが好きなのだと思った。カフェのメニューも種類が豊富で、

コーヒーに入れるお湯の量や牛乳の量で名称がそれぞれついていた。サイズが一番小さく、一口で飲み終えてしまいそうなほど小さいカップのものを、「カフェ」と呼び、いわゆるエスプレッソであるが、このエスプレッソのコーヒーの量が基本となって、バリエーションがある。例えば、カフェにコーヒーにミルクを数的垂らしたものは「カフェ・ピンガード」(Café Pingado)、コーヒーに水を多く入れたものを「カフェ・シェイオ」(Café Cheio)、カフェよりもさらに水の量が少ないものを「カフェ・クルト」(Café Curto)と呼んで、濃くて苦い。ポルトガル人はたいてい、コーヒーと一緒にパステル・デ・ナタ (Pastel de Nata、エッグ・タルト) 等の甘いお菓子を食べる。その他に、ココアや紅茶などのメニューもあるが、メニューの下の方を書いてあり、ポルトガル人のコーヒーに対するこだわりを感じた。

1か月のポルトガルでの生活を通して、ポルトガルと日本の食に対する価値観の類似点と相違点を体験した。ポルトガル人がコーヒー好きであることは、日本人と同じであるが、食事に対する楽しみ方や過ごし方など、違うところに興味を抱いた。食事は各国、各地域で違いが表れるので、今回の経験を活かして、例えばブラジル等、他の地域の食文化についても調べてみたい。

4. 中国語圏

2024 年度の中国語圏における研修

若松 大祐

2023 年 5 月に厚生労働省が新型コロナウイルス感染症を 5 類感染症に位置付け、日本ではコロナ禍がようやく終了した。これに伴い、中国語圏での研修活動が 2019 年度までと同じように、実施可能になる。数年ぶりに、長期留学、語学研修、臨地実習という、グローバルコミュニケーション学科の提供する中国語圏の研修すべての実施を報告できる。

(1) 中国語圏での長期留学

参加者 1 名：小泉杏果

場所：銘伝大学華語訓練中心

出発日：9 月 19 日（木）

秋学期：2024 年 9 月 23 日（月）～ 2024 年 12 月 13 日（金）

冬学期：2024 年 12 月 23 日（月）～ 2025 年 3 月 21 日（金）

帰国日：3 月 22 日（土）

(2) 中国語圏での語学研修

参加者 3 名：田中優理亜、村松真帆、若月千春

場所：銘伝大学華語訓練中心

時期：2024 年 8 月 9 日（金）～ 9 月 6 日（金）、28 泊 29 日

(3) 中国語圏での臨地実習

2024 年 3 月 5 日より 3 月 14 日まで、中国福建省漳州市に位置する閩南師範大学外国語学部（協定校）に滞在し、日本語学科の授業・課外活動に参加するとともに、同大学および周辺地域での参観を実施した。詳細については、本誌 p.113 を参照いただきたい。

また、2025 年 3 月 4 日より 3 月 13 日まで、同じく実施する予定である。

(4) グローバルコミュニケーション学科の報告会

グローバルコミュニケーション学科では、人間力セミナーの時間を使い、「海外語学研修報告会」（第8回）と「学生海外活動報告会」（第15回）を毎年実施している。

- 海外語学研修報告会

日時：11月13日（水）2時限

場所：D321 教室

題目：台湾语言进修经验（台湾語学研修報告）

発表言語：中国語

報告者：田中優理亜、村松真帆、若月千春

- 学生海外活動報告会

日時：1月15日（水）2時限

場所：D321 教室

題目：2024年度静岡県青年友好代表団の参加報告

発表言語：日本語

報告者：森下真千子

概要：本誌 p.75 を参照いただきたい。

VI 退職者

長年にわたって御指導くださり、
ありがとうございました。



江藤 秀一 ETO Hideichi

常葉大学 学長 / 常葉大学短期大学部 学長 / 特任教授

所属：外国語学部

学位：博士(文学)

学歴

1977年 明治学院大学大学院 文学研究科 修士課程 英文学専攻 修了

主な経歴

1974年～1981年 常葉学園中学高等学校 教諭
1981年～1987年 常葉学園短期大学英文科
1987年～2000年 武蔵野美術大学造形学部
2000年～2016年 筑波大学 教授
2016年～2018年 常葉大学外国語学部 特任教授
2017年～ 常葉大学 学長
2019年～2020年 常葉大学 法学部 特任教授
2020年～ 常葉大学 外国語学部 特任教授
2021年～ 常葉大学短期大学部 学長

専門領域(分野)

イギリス文学・文化

研究テーマ

■ 18世紀イギリス文学および文化

主要な研究業績・社会活動実績

- 「大英帝国前夜」『帝国と文化－シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで』（江藤秀一編）春風社、2016。
- 「イギリスの歴史と文化」『授業力アップのための英語圏文化・文学の基礎知識』（鈴木章能と共編著）、開拓社、2017。
- “A Brief History of Johnsonian Studies in Japan,” in *Johnson in Japan*, ed. Kimiyo Ogawa and Mika Suzuki. Lewisburg, PA : Bucknell University Press, in 2020.
- ドクター・ジョンソンズ・ハウス理事(英国ロンドン)、野村胡堂・あらえびす記念館運営審議委員(岩手県紫波町)

VII 外国語学部言語文化研究会

VII. 外国語学部言語文化研究会

『とこはことのは』 38 号の編集の現場

2025 年 2 月 6 日 (木) 10:30-17:30 に草薙キャンパス A520 教室で、教員 3 名と学生 1 名が『とこはことのは』の編集(初校)を行いました。

常葉大学外国語学部が 1984 年 4 月に開設され、2024 年はちょうど 40 年目に当たります。外国語学部英米語学科の学会誌『Albion』が 1988 年 3 月に創刊され、2013 年 3 月にスペイン語学科の学会誌『Retama』を合併し、2018 年 3 月に『とこはことのは』に改名しました。この 40 年間の学内学会誌の掲載内容を眺めると、外国語学部の構成員は自らの活動を記録する媒体を変えてしまったようです。すなわち、年度ごとに冊子に記録することから、イベントごとに大学ホームページに掲載することになりました。この変化は最近の 10 年間で顕著です。

コロナ禍での 34 号 (2021.03) は 185 頁、35 号 (2022.03) は 172 頁、36 号 (2023.03) は 132 頁、昨年度の 37 号 (2024.03) は 102 頁でした。今年度の 38 号 (2025.03) は 150 頁あり、久々に分量が増えました。

編集後記

今年は『とこはことのは』刊行 40 周年記念号ということで、在校の関係者のみではなく、これまで常葉大学で教鞭をとられていた先生方などからも玉稿の投稿をいただいた。それらの中では、私が赴任する以前の学部学科の歩みや運営について語られており、先人の方あっての現在の常葉大学であることを改めて実感した。また、そこには学部や学科の在り方について非常に共感しうるメッセージも含まれており、今後大学の学びを考える上で、参考にしたいと強く感じた次第である。

(那須野絢子)

今回は、40 周年記念号の編集に携わったことにより、一足先に一言哲也先生や戸田勉先生の寄稿を拝読させて頂いた。お二人の寄稿には、今後の社会変化に即した学科カリキュラムの編成の必要性が記載されていた。外国語を勉強する意義や目的は、語学試験のためではないことは明らかである。入試募集にも既に少子化の時代の影響が見られているが、時代に対応した学科の在り方やカリキュラム編成の必要性を考えさせられる一日であった。

(宮腰宏美)

2024 年は常葉大学外国語学部の創設 40 周年です。そのため本号は創設 40 周年に関係する文章を収録しています。来年 2025 年は周年イベントがないけれども、次号 39 号も引き続き多くの投稿をお待ちしています。

(若松大祐)

とこはことのは

第 38 号

2025 年 3 月 10 日

発 行：常葉大学 外国語学部 言語文化研究会

代 表：増井実子

編集委員：若松大祐（委員長）、有富智世、那須野絢子、宮腰宏美

連 絡 先：〒 422-8581 静岡市駿河区弥生町 6 番 1 号

常葉大学外国語学部『とこはことのは』編集委員会

TEL (054) 297-6100〔代表〕, FAX (054) 297-6101〔代表〕

<https://www.tokoha-u.ac.jp/language/publication/>

ISSN: 2435-8851

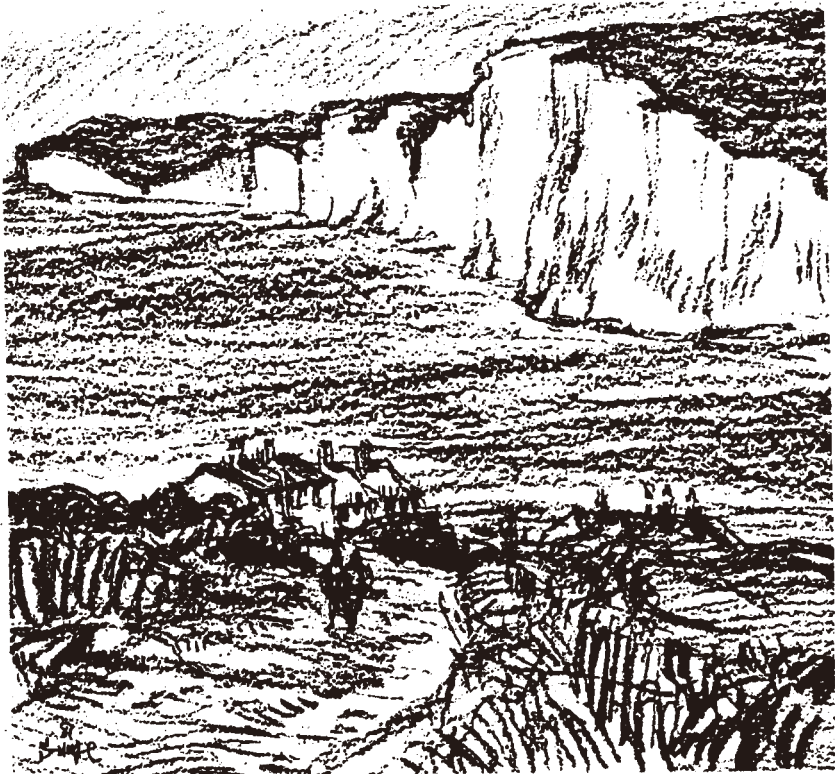
印刷製本 株式会社 篠原印刷所

〒 422-8033 静岡市駿河区登呂 6 丁目 7 - 5

TEL (054) 286-5141

旧 題

Albion



ドーヴァーの白壁

題字は諏訪卓三（元学長）による。扉絵の作者は不明。